

特22-173



1200800151246

增訂

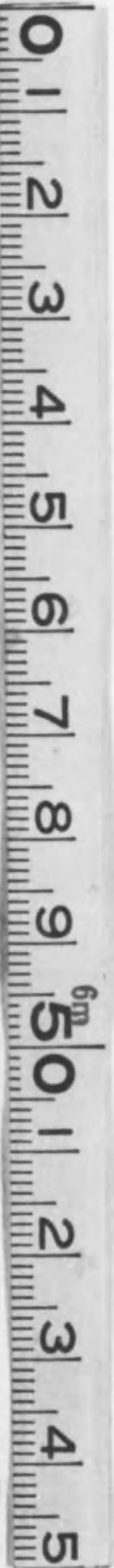
國文通釋

全

國語研究組合編纂
講國學院
師院逸見仲二郎校閱

東京

金昌堂



始



特22
173

國學院
講師
逸見仲三郎校閱
國語研究組合編纂

增訂

國文通釋

全

東京

金昌堂



凡例

一本書は、現時全國各中學校に、教科書として採用せられたる各種國文讀本中より、六ヶ數字句、詩歌等を抜出して、簡單なる解釋を施したるものなれば、中學校の生徒諸君は勿論、師範學校、高等女學校、小學校教員養成所などの生徒諸君、及び教員檢定出願志望者諸君に至るまで、苟も國文讀本を繕かんと欲する諸君は、必ず坐右に歛くべからざる良書なり。

一本書は、普通、漢字を以て書かるゝものと、假字を以て書かるゝものとの二様に區別したり。これ索引者の便宜を計りてなり。

一本書漢字の部の引き方は、詞の頭の文字の畫を以てせり。然れども崇敬文字たる御の字の如きは、御曹子、御臺所などの外は、多く之を省き、高貴の御事をいふ時にのみ之を用ひたり。

一漢字の畫は、通常の畫字引に由らずして、實際、吾人の日常書く時の筆使ひによ

りたり。乃ち其の大略を擧ぐれば左の如し。

- 三書 丩 字 弓 𠂔
- 四書 不 支 卅 公 爰 世 ネ
- 五書 石 印 月 母
- 六書 矢 出
- 七書 沈 貝 臣 秀 酉 没
- 八書 枕 治 食 糸
- 九書 革 段 神
- 十書 乘 宸 海 官 卿
- 十一書 國 祭 得 黃 御
- 十二書 登 越 將 富 淵 華 雄
- 十三書 鄉 焄 遠 腹
- 十四書 隨 壽 聚

- 十五書 滿 餘 節
- 十六書 肅 歷
- 十七書 邊 慈
- 十八書 鞞 藏
- 十九書 難 總
- 二十書 闕 機
- 二十一書 龜 聯
- 二十二書 饗 籠
- 二十三書 關 鹽

一漢字にして二様に用ひらるゝもの、或は略字は、其の一方に改めたり。たとへば、
 万は萬、脩は修、隱は隱、曆は曆、豊は豊、鐵は鉄、潜は潜、辺は邊、等の如け
 れば、一方にて求め得ざる時は、他の一方にて之を求むべし。
 一動詞、形容詞の單獨なるものは、すべて終止格と改めて載せたり。

一漢字に附屬せる關係詞乃ち「行かばや」のばや、「散らなん」のなんの如きものは、之を分ちて假字の部に載せたり。

一人名にして、我國に屬せるものは、之を省きたれども、外國のは略傳を載せたり。

一帝號、年號、相似字、月の異名、方位、干支、時刻等又名數にして本文にもれたるものは之を附録として卷末に添へたり。

明治卅六年二月再版のをり

編者識

索引
漢字の部

一	畫	一	十四畫	一九三
二	畫	四	十五畫	二〇二
三	畫	二	十六畫	二一一
四	畫	二八	十七畫	二一九
五	畫	五二	十八畫	二二三
六	畫	六七	十九畫	二二六
七	畫	八一	二十畫	二三〇
八	畫	九五	二十一畫	二三三
九	畫	一一四	二十二畫	二三五
十	畫	一三二	二十三畫	二三七
十一	畫	一四九	二十四畫	二三八
十二	畫	一六七	二十五畫	全
十三	畫	一八二	二十六畫	二三九

索引

二十七畫	二四〇
二十八畫	全
二十九畫	二四〇
三十畫	二四一

假字の部

いの部	二四三
ろの部	二五〇
はの部	全
にの部	二五二
ほの部	二五三
への部	二五四
との部	二五五
ちの部	二五七
ぬの部	二五八
をの部	全
わの部	二五九
かの部	二六一
よの部	二六八
たの部	二七一
れの部	二七四
その部	全
つの部	二七六
ねの部	二七九
なの部	全
らの部	二八三
むの部	全
うの部	二八六
ゐの部	二九一
のの部	全

おの部	二九二
くの部	二九七
やの部	二九八
まの部	三〇〇
けの部	三〇二
ふの部	三〇四
この部	三〇六
えの部	三〇九
ての部	三一〇
あの部	全
さの部	三一八
きの部	三二四
ゆの部	三二六
めの部	三二七
みの部	三三〇
しの部	三三三
ひの部	三三六
もの部	三三六
せの部	三三八
すの部	全

附録

御歴代帝號一覽	一
年號について	三
御諡號の後の字について	四
名數	七
年號一覽	九
相似字	一九
十二ヶ月の異名	二七
方位	二八
千支	二九
時刻	三〇

索引終

國文通釋

漢字の部

逸見仲三郎校閱
國語研究組合編

一畫の部

一定 イチャギョウ 確定して動かすべからざることをいふ。必ず、必ず、たしかに、などいふに同じ。

一しほ ヒトシホ ひさしほの。○一期 イチキ 一生運さい所に立つ。○一期 イチキ ふに同じ。

一抱 ヒトカ、ヒトカ、ヒトカ 浴にいふひと。○一味同心 ヒトカ、ヒトカ 浴にいふひと。○一味同心 ヒトカ、ヒトカ 同トキ心になりて我れに味方す。○一圓 ヒトヒツ すべて、悉くなることなり。○一圓 ヒトヒツ さいふ、こきなり。

一片の煙、一ひらの雲 ヒトヒツ ひらは薄く平なるものを数ふる。○一字 ヒトジ 字は佛堂などを數詞なり。○一字 ヒトジ 字は佛堂などを數詞なり。

一向 ヒトカ 「ひたすら」の所に出づ。○一過眼の地 ヒトカ 一度さ

地をつた。○一葉の夷舟 ヒトカ 一艘の夷舟さいふ地をいふ。○一葉の夷舟 ヒトカ 一艘の夷舟さいふ

夷地の舟。○一孤島 ヒトカ 一つのほな

一天瑠璃の如く ヒトカ 大空全体が瑠璃の如くある

を帯びたる。○一所懸命の領地 ヒトカ 只一ヶ

地にして、これなくては、到底生活の出來ざる故、この一所を大切に

リ、くはいふなり。されば、後々には、大切なることはいふに用ふる詞となれり。

一旬 十日の事なり。一ヶ月を三分して、一日より十日までを上旬、又は初旬といひ、十一日より廿一日以後を下旬といふ。○一揆 人民のむらがり起りて、所在を

かすむるをいふ。又、一休といふ所にも用ふる。「白旗一揆」の如し。

一擧千金を漁獲す 圓だけもある、澤山のさりものがある。○一朶 一花なり。

一勁刺 一本のこぼき。○一たまり ひさまいふに。○一廉の國産 りつばな國産、充分同。○一陣の烈風 ひさましきりの強き風なり。

一家言 一己の私。○一領 一組。○一絶句、一絶句 一つの絶句、一つの絶句にして、共に詩の

一聯句、一絶句 一つの絶句、一つの絶句にして、共に詩の

一聯句、一絶句 一つの絶句、一つの絶句にして、共に詩の

一聯句、一絶句 一つの絶句、一つの絶句にして、共に詩の

一聯句、一絶句 一つの絶句、一つの絶句にして、共に詩の

一聯句、一絶句 一つの絶句、一つの絶句にして、共に詩の

一併なり。「聯」の所を見よ。○一双 一對、乃ち二つのことなり。

一鉢の儲 一鉢の寶食なり。さきさき、佛家にて食事をいふ。

一の人、一の上 一の人は攝政關白をいひ、一の上は左大臣をいふ。又、左大臣をも、一の人。○一所の宮 後三條天皇の御譲位の條にては、藤子内親。○一葦 小舟をさす。王をさしていふ。○一葦 小舟をさす。

一瞬 ひとまたまきにして最。○一奇觀 一つしきみものを。○一目瞭然 一目にてはつきりいふことなり。○一碧を凝らす 水の一様に

一犬虚を吠えて萬犬實を傳ふ 一人のあたひあり。○一碧を凝らす 水の一様に

一刻千金 蘇東坡の句に「春宵一刻值千金」さあり。乃ち、一刻の儲の間をも、實に、千金の意なり。○一碧を凝らす 水の一様に

一犬虚を吠えて萬犬實を傳ふ 一人のあたひあり。○一碧を凝らす 水の一様に

一刻千金 蘇東坡の句に「春宵一刻值千金」さあり。乃ち、一刻の儲の間をも、實に、千金の意なり。○一碧を凝らす 水の一様に

一犬虚を吠えて萬犬實を傳ふ 一人のあたひあり。○一碧を凝らす 水の一様に

一刻千金 蘇東坡の句に「春宵一刻值千金」さあり。乃ち、一刻の儲の間をも、實に、千金の意なり。○一碧を凝らす 水の一様に

一犬虚を吠えて萬犬實を傳ふ 一人のあたひあり。○一碧を凝らす 水の一様に

るを。○一の院 頼朝、義仲等の兵を起し、時

一撮 撮は、一合の百分の一、乃ち、一勺の十分の一なり。

一騎當千 一人を以て、敵の千人に當る程をいふ。

一葦水 一の小舟にて渡れる。○一往 一通り程、近き水をいふ。○一往 一通りなり。

一條禪閣 關白一條兼長をいふ。博學多聞にして、最も、朝身に委しく、神佛の曹に通じ、和歌を善くせり。○一伯殿 從三位密相三河守忠直をいふ。大坂の役に軍功あり。

功に誇りて、霞の少きを憤り、甚だ放肆なりければ、豊後の萩原に、配流せられたり。

一世の契 この世限りの縁。さいふことなり。

一介の使節 一人の使者をいふ。○一世紀 百年をいふ。○一瞬の勞 ちよつこの骨折りをいふ。

一足 一本足にて。○一日三秋 僅、一日の日をも、長き月

日の如き思ひ。○一紀 十年をいふ。

一とせの御輿ぶり 或る年の強訴をいふ。○一本御書所 内裏西北の詰、式乾門の脇に在り。

一塵もろごかず 一本のちりも動かぬといふの拾りた。○一本御書所 内裏西北の詰、式乾門の脇に在り。

一樹の陰 偶然相逢も多少の因縁ありとの意拾葉抄に、「蒲野齋孝傳曰、昔三人各一洲背孤露亮三人、暗會於一樹下、相問、寧爲三斷金之契、二人曰善、乃相約爲三父子、梁朝破三人不離」とあり。

一重あがりたる所 一段高くなり、たる所をいふ。

一ひさご 一柄杓をいふに同。ひさごは、水をくむ器なり。

一人に師範して 一人は、天皇をさしていふ。

一時一事 意は明。○一あじか 「あつち」にして、藪又は、竹などにてざるの如く作り、土を運ぶに用ふるもの、俗にいふ、もつこの如きものなり。

一所不住 居所の定まらぬをいふ。○一刹那 「刹那」の所を

見。○乙名 一詳の長、乃ち會長をいふ。

一枝を伐らば云々 攝津國八部郡須磨寺に、若木櫻といふ名木あり。

其の辭、藤原の制札文に、「此花江南所無也、一枝於折盜之輩、任三天水紅葉之例、伐二枝可レ剪二

二畫の部

人倫 人の守るべき五倫の道をいふ。○人烟 人家の

より立つ煙をいふ。轉じては、人のすみかをもいふ。

人跡板橋霜 古人の詩の句にして、冬の曉に、板橋の霜に人の足跡の二つ三つ

着けるを見て、我れに先き立ちて、早や、この橋を渡れるものあるを知りたる意をさして、かく書名をなしたるなり。其の所以は、衆人の氣づかざる予守教習に、先鞭を付けたる事を、いはんがためなればなり。

一指壽永三年二月二日とあり。消閑雜記に、これは、櫻のためにあらずして、梅のためなるべしと見ゆ。

一貫 ひさつづきなるをいふ。

一期の月影かたぶきて云々 月かげを人生に、死期を山の端にたとへ、餘算は餘命のこさをいふ。

儿を覆ひ なしつゝある事務を止むるをいふ。

九重の春 宮中の春なり。宮城を九重と稱するは、九天に擬し、天子は、九門を備ふといふ。支那の古事より出でたり。○入朝 朝廷に参内するをいふ。

九仞の功を一簣にかく 九分九厘まで出来居る大事業を、僅か一厘のこさにて、成就せさせざるをいふ。書經に「不レ矜二細行二終累大徳爲レ山九仞功虧二簣二

八葉の花がた 藥師嶽、觀音嶽、地藏嶽、淺間嶽、大目嶽、不動嶽、阿彌陀嶽、釋迦嶽を、富士の八葉と稱し、之を紋所の遊の八葉にたとひたりしなり。

二柱の公 柱は、貴き人、又は、神を數ふる時の略公と。○十志 志とは、紀傳體の歴史の一部に

なり。○十志 志とは、本紀、列傳の外に、一部としておかる。乃ち、兵志、法志、佛事志、職事志、氏族志、禮樂志、食貨志、神祇志、陰陽志、國郡志なり。

○ト居 長き土地を求めて、○十念 土淨

宗にて、南無阿彌陀佛六字の名號を、信者に授け、佛に縁を結ばしむることなす。

八十平瓮 平瓮は、土器の平たく淺きものにして、今の皿鉢の如きものなり。八十は、數

の多きを形容し。○人體を見うけ 人體は、ふに。○入魂 殊更、親しく交

同し。○入魂 殊更、親しく交ることをいふ。

七徳の舞 白氏文集、新樂府の最初にあり、初め、破陣樂の舞といひしを、後に、七徳の

をいふ。○人參 我が國の野菜として用ふる人參をいふ。○人參 我が國の野菜として用ふる人參をいふ。

十王堂 十王を祀れる堂をいふ。十王とは、冥途の十人の王にして、不動藥師王、釋迦初江王、文殊宗帝王、普賢五宮王、地藏閻魔王、彌勒摩訶王、藥師泰山王、觀音平等王、勢至都市王、阿彌陀輪轉王、の十王。○人參 我が國の野菜として用ふる人參をいふ。○人參 我が國の野菜として用ふる人參をいふ。

舞を改めいふ。乃ち、禁暴、戢兵、保大、定功、安民、和衆、豐財の七徳にして、暴を禁ず、兵を戢め、大を保ち、功を定め、民を安んず、衆を和げ、財を豊かにするの義に取れり。

二神垂跡

伊弉諾、伊弉諾の二神、天の浮橋に立ち給ひて、霧の海に、島の如きものあるを見そふはし給ひ、天の瓊矛を以て、之をさぐりみ給ひ、其の國なること知ろし召して、やがて、天下り玉ひけり。之を垂跡といへるなり。元來、垂跡といへる詞は、佛家の語にして、神佛混淆の主義より、日本神も、天竺の佛の垂跡、乃ち、跡を此の地に垂れたるなりといふより起れり。本地垂迹の所を參照せよ。

十握の劔

十にぎりもある程の、長き劔をいふ。劔は兩刃にして、刀は片刃なり。

入徴

趣味奥深く、玄妙の感。動物を、原生動物、棘皮動物、脊索動物の八門に分つ。

〇八門

動物を、原生動物、棘皮動物、脊索動物の八門に分つ。

〇八省

中務、式部、兵部、刑部、大納言、海綿動物、陸腸動物、蠕形動物、節足動物、軟體動物、棘皮動物、脊索動物の八門に分つ。

二至二分の晷

夏至、冬至、春分、秋分なり。一晝夜十二時を百刻と定め、夏

二鎮

鎮西府(太宰府)をいふ。

二卯角

二人の子供をいふ。卯角とは小兒の髪を結びたり。故に子供をあげまきといふ。

七八段ばかり

六尺五寸を一間といひ、六間を一段、十段を一町、三十六町を

〇十一束三ぶせ

一束は一握りにし、指四本の幅なり。三ぶせは、指三本の幅なり。専ら、弓矢の長さを計る間なり。

七五三、五五三

先づ肴を出し、酒三度すゝめ、膳も饂飩も引く、これ二献なり。此の如く、三度出すを式三献といひ、一献毎に、肴も饂飩も代ふ。されど、初献は、必ず難煮あり。但し、肴あり。七五三といふは、三とは式三献なり。五とは五献するをいふ。七とは、飯七の膳まで出すをいふ。五五三といふも意は同じ。何れも皆祝して、奇九折なる細道。つら

至にては、晝六十刻、夜四十刻、冬至にては、晝四十刻、夜六十刻、春分秋分は、晝夜各五十刻なり。

刀圭

薬を盛るさとのことなれども、釋つては、醫術、又は醫師のことなれども、釋つ

八十伴の雄

八十は数の多きをいひ、伴の緒は、上古、會社一部の長をいふ。乃ち、

〇入木の道

書法、乃ち筆道のことをいふ。晋帝の時、王羲之といふ書家に、祝版を書き改めしむ。工人、之を削るに、墨の木に入ること二分なり

〇八重波

波の幾重もなを、かくはいふなり。

〇八重波

波の幾重もなを、かくはいふなり。

〇七星五行

七星は、支那の星學にいふ貪狼星、巨文星、綠存星、文曲星、廉貞星、武曲星、破軍星の七つの星にして、五行は、支那の理學にて、天地間に在りて、常に運動して、休息せぬ五種のものとの義なり。乃ち、木、火、土、金、水これなり。木より火、火より土、土より金、金より水、水より木を生ず。之を相生といひ、之に反對して、木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木に尅つことして、之を相尅といふ。

〇二引兩

足利高氏の紋所にして、丸を見よ。二本の棒を引きたる。〇十善の戒力 佛家の詞にして、十悪をせぬをいふ

〇十善の君

天子の尊稱なり。天子には、前に説ける、十善を修めたる

〇二兩

二輛に同じ果報によりて、生れ給ひけり。〇二兩 二輛に同じ

〇九卿

三公の所。〇入部 自分の領分をいふ。〇九卿 三公の所

〇人の極めたる大事

人の身に付きての基だ大切な。〇八十梟帥 梟帥は、勇猛の義に

〇人爵

天爵の所。〇二十八將 共に、光武

〇二十八將

共に、光武の南宮にして、天の二十八宿にたざれり。乃ち

鄧禹、馬成、吳漢、王梁、賈復、陳俊、耿弇、杜茂、
寇恂、傅俊、岑彭、堅鐔、馮異、王霸、朱祐、任光、
祭遵、李忠、景丹、萬倫、蓋延、鄧珍、姚期、
劉植、耿种、臧宮、馬武、劉隆、これなり。

人の世もさこそあらしの風をい
たみ云々 風のあまりひどいために木の葉は皆ち
りはてて地上に落ちて、もとの土、乃
ち礦物質にかりて仕舞ふが、人の世に生れ出でたる状
も、又かくの如くにして、死しては元の土にかへるも
のであるといふ意なり。「あらしの風の」あらしに、さ
こそあらしのあらしなけれ、「かへるての色」に、土に
かへるのかへるさ、紅葉 ○刀自 「母刀自」の
のかへてさなけれたり。

七經 五經に公羊傳、穀梁傳 ○十三經 七經
に周禮、儀禮、論語、孝經、孟子、○七座 座は間屋
兩雅を加へたるものなれ。○七座 座は間屋
絹座、炭座、米座、檜物座、馬座、
千桑積座、相物座の七座なり。

八等の姓 天武天皇の朝に、諸臣に賜はる。乃ち
(一)を眞人といひて、諸國に封ぜられ

たる皇子に賜ひ、(二)を朝臣といひて、皇別諸子の上
列に賜ひ、(三)を宿衛といひて、從來、連さひし神
別家に賜ひ、(四)を忌寸といひて、簡化人の身分ある
者に賜ひ、(五)を道師といひて、技藝の職あるものに
賜ひ、(六)を臣、(七)を連、(八)を稻置といひて、各等
差ありて賜ふ。恰も今日の爵位の ○八虐 謀反、
逆、謀叛、惡逆、不道、大不敬、不孝、不義を八虐
といひ、是等の犯罪は大赦あるも、容易に、其の恩典に
あづかることを ○七珍 金、銀、珊瑚、琥珀、瑪瑙、
得ざりしなり。

二十四さしたる 矢を、箭にさすには、大略
廿、三十、三寸 ○人寰 人里を
六の數なりとぞ。○八荒 八方を
いふ。

八駿 八疋の名馬をいふ。乃ち、騄驎、綠耳、赤驎、
日免、騏驎、黃龍、黑驎、山子の八駿なり。
二十五菩薩 觀王、勢至、藥王、藥上、普賢、
文殊、師子吼、陀羅尼、虛空、

所云々 論語に「人而無信、不知其可也、大車
に、○刀劍 かつた刃のものを刀といひ、
もろ刃のものを劍といふ。
十二の諸侯 十二の大名をいふ。乃ち、魯、衛、
曹、鄭、曹、蔡、燕、秦、吳、以上周
と同姓なり、齊、宋、陳、楚、秦、以上は周と異姓な
り。右十三國の中、吳は後に中國に通じたれば、之を
除きて十二 ○八荒 八方を
いふ。

七首爆彈相交りて 懐劍を以て刺さんと
し、爆烈彈を以てた
ふさんとする人の時 ○二度がけ 二度戦陣
々に出で来るをいふ。 ○二度がけ 二度戦陣
ふこそにて、壽永三年、梶原平三、範頼に關して、一
の谷を攻めし時、子景季と共に東門に向ひしが、戦ふ
に及びて父子相失す。平三以爲らく、敵の擒となりし
ならんさ、乃ち、再び兵を率ゐて、敵陣に走せ向ひ、景
季の無事なるを見て歸陣せしこと
あり。これをさしていひたるなり。

十月の旬 旬は儀式にして、孟冬の旬をいふ。こ
の時には、氷魚を賜はるを式とす。

九匱の井底 八尺を切さいふ。乃ち、極めて
深き井戸の底さいふことなり。
入道 佛道に入りたる人にして、三位以上を
入道さいひ、其の以下を新羅意さいふ。
人生七十は古來稀なり 「古稀の齡」
の所を見よ。
十人の見る所云々 大學に「十目所見、十
手所指、其嚴乎」とあ
るに由 ○九志 神祇、山陵、姓族、職官、城軍、
禮儀、民、刑、兵の九志をいふ。
八景 近江八景は、支那の瀟湘八景になすらへて命名
したるものにして、石山の秋月、片田の落雁、
三井の晚鐘、比良の暮靄、勢田の夕照、栗津
の晴嵐、矢走の歸帆、唐崎の夜雨これなり。
刀伊 刀夷とも書き、時代によりては、船儀、鞆鞆、
また女眞ともいひ、今の遼東半島の地なり。
人の誠なきは車に牛馬をかくる

二人張 二人にて弓弦を張る位の強き弓なり。○八寸 馬をはく四尺を量として、以上を何寸と稱す。寸は乃ち今の一寸なり。

人の夢に云々

平家物語に、青侍の夢に、平家の御方したる殿島明神をおひたて、八幡宮の御刀を、賴朝に賜はんぞ仰せけるを、其の側に、春日神の坐して、此の後は、我が子孫の藤原氏にも賜ひ候へし申す。○二千里の外 白

文集に八月十五夜、禁中獨直對月禮元九さいふ題にて、銀燭金剛夕沈々、獨宿相思輪林、三五夜中新月色、

二千里外故人心、禁宮裏面照波冷、浴殿四頭鐘漏深、宿恐清光不向見、江陵卑濕足秋陰とあり。この中の句をかざりて書。○七條院 後鳥羽院の御母后種子をいふ。

人の戀しさもまされ

古今集凡河内躬恒の歌に「我がやど

○十陵

清和天皇の朝

の花見がてらにくる人は取りな。○十陵 清和天皇の朝、天智帝の山階院、施基皇子の田原院、光仁帝の後田原院、贈大皇太后高野氏の大枝山院、桓武帝の

八幡山

京都の東寺のこまなり、東寺は一に左寺といひ、本社は、八幡山數王護國寺なり。

八幡山

男山八幡の頭坐まし

二引兩の手綱

筋を二本引きたる手綱をいふ。

人目實事面白なし

人目もわるく、又、實際にも面白なしとの意

○九品淨土

西方の阿彌陀の淨土の名にして、淨土とは、四總五濁

の穢惡なき地をいひ、極樂往生相の等級にして、上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生の九級なり。

入りにし人

後醍醐の愛妾靜の、賴朝の命によりて、鎌倉八幡宮の神前において、

舞を奏したる時の歌なり。「吉野山峰の白雪ふみわけて、入りにし人のあさぎ戀しき」古今集に「みよし野の山の白雪ふみわけて入りにし人のおさぎづれもなし」新編古今集に「吉野山けさふる雪や積るらむ入りにし人の跡だにもなし」なごあり。

柏原院、贈大皇太后藤原氏の長崎院、崇道皇子の八島院、平城帝の楊梅院、仁明帝の深草院、文徳帝の田色院をいひしが、後、○八墓 藤原鎌足の多武峰加藤ありて一定せず。藤原基經の宇治墓、藤原高藤の小野墓、贈正一位宮道宿原基經の宇治墓、藤原高藤の河島墓、藤原基經の宇治墓、藤原高藤の小野墓、贈正一位宮道氏の中小野墓、贈正一位斑子女王の宇治墓の八墓をいふ。

二度勅をうけて

爲家先きに勅をうけて後後撰集を撰び、後、又勅をうけて、贈古今集

を撰びしをいふ。

人やりならぬ道なれば

人にやらず、我

から行くをいふ。古今集に「人やりの道ならなくにおほかたはいきうしさいひていざかへりこむ」とあり。

人こふる涙の海は云々

古今集に「しきたへの枕の

下に海はあれど人を見るめは生ひ。○入帷子 物を箱に入る時、それを包む單の帛をいふ。蓋し、單なるが故にかたがらさいひしなるべし。

二拾片

金は、ひらたきものなれば、ひのさいふなり。

七つのあゆみに七歌

魏の曹植、年少くたり。其の兄曹丕、之を忌み、事に囁れて植を惡めり。成る時、植に向ひ、七歩、歩みを運ぶ間に、詩一首を作れといふ。植、歩を運びながら、「煮豆、燃豆、釜中泣、本是同根生、相煎何太急」と吟じたり。

八百日行く濱の云々

八百日は、多くの日数をいふ。濱より濱、何日行きてもつきぬ意の序なるべし。

人をあやふきに落入るゝ

龍を滅し人を

○七種の花

萬葉集にして忿怒せしめ、遂に暴暴あらしむるをいふ。

の花尾花葛花などしこの花、女郎花又ふちばかまあさかほの花とさいふ旋頭歌あり。

人間のたねならぬ

天照大神の御末にましませば、古より、理入

○九條殿の遺誠

右大臣師輔公の遺誠なり。

この遺蹟に、「始自三衣冠及三子馬車、
隨有用之、勿求美麗こそあり。」

二のはしをのぼる 二の階、乃ち二位
に進めるをいふ。

七尾縣 明治の初年に、能登國におかれたる
縣にして、後、石川縣に合併せり。

二所藤云々 「弓の上手二所に藤をまきたるにて
「操太」は、握る所の太きをいふ。

九重の門のしりくめ繩云々 禁裡の
門のしりくめ繩は、しめ繩にし

め繩や、繩の頭や、終等を飾り并べたる状の、如何に
新にて美しからんぞ、それのみ、互に言ひ合へりさな
り。「しりくめ繩」は、しめ繩にし
て、「なよし」は繩をいふ魚なり。

又まからずといひて立ちぬ 又参り
ませう

三畫の部

大學院 分科大學の業を卒へ、尙ほ、某科目につき
て、其の奥義を研究せんと欲する人の、入

さいびて其の坐を立ち去りたりさなり。これ、行く先
きに立つ白波などいふやうなる、海路の旅行に、いさ
不吉なる歌をいひ出して、井み居る人々に、甚しく
嘲けられたるを以て、きまりわるくなりたるなり。

人の心もあれたるなりけり 家を預
かりた

人はいさ心も知らずふるさとは
云々 人はどうだか、心のはかり知られぬものだが、
梅の花は、このやうに、前かたの通りに、相違
らずに匂うて居るその意なり。

○十戒 五戒に、
「いさ」は、濁りてよむべからず。

邪見、股語、獸語の五
つを添へたりるなり。

○土木 ふしん、工事な
ごいふに同じ。

千潮 海水の退きた
る時をいふ。 ○上海 シヤンハイ
支那江蘇省にあ
る、大都會の地

○工夫 思案して、方法
を立つるをいふ。

夕さり くれがた
をいふ。 ○小成に安んず 少
ばかり、事の出来あがり

○三冬 冬期、三ヶ月
たるに、満足するをいふ。

○大鹿毛 肥大な
る毛をいふ。

○大御勅 勅語の、
馬なり。

千金の子 富家の子
供をいふ。 ○士大夫 士は、さ
むらいの

山陵 「みささぎ」
の所に出づ。 ○大人君子 共に、徳ある
の人をいふ。

己に克つ 正しき心に、かへるをいふ。論語に、
「顔淵問、仁、子曰克。己復禮爲仁」とあり。

○下の潤ひ乾く 下
の潤ひた

○大刹 大なる寺
をいふ。

山田奉行 伊勢の山田におかれたる奉行にして、
神領たる、度會、飯高、飯野の神郡を

○凡夫 たゞの人
をいふ。 ○工藝 工作にかゝ
るをいふ。

○山川を俯仰す 仰ぎて山を望み、
俯して川を眺む

○山背 今の山城
國なり。 ○土功 土地に關する
工事をいふ。

上卿 卿は、支那の諸侯の臣に賜ふ最上の爵にして、
上卿は、乃ち卿の上位を占むるものなり。

上卿 大臣か、大中納言の中にて、重立ちて、除目、
叙位、又は、奪官などの事を扱ふ人をいふ。

太極殿 昔、八省院の眞中において、天皇朝政をさ
し給ふ正殿なり。太極は、無極にして、天

上邦 上方さいふに同じく、
○土地厚く 地士

○口々に守兵の居る 京都

四方より入り込む、入口。○大成殿 孔子を祀る御殿に、番をする兵の居るなり。○大内 「おほうち」の所に、出づ。

大判、小判 共に、隋圓形の薄き貨幣なり。其の質黄金にして、豊臣氏及び徳川氏の時代の鑄られ、明治維新迄通用したり。其の相場、混合物の多少によりて差異あり。

上木 書籍ふどを、版。○大連 大臣と、對等の職にして、大臣と並びて政をされり。大臣は、文官にして、大連は武官なり。而して、大臣は、世々皇別家より出で、大連は、神別家より出づ。○戸 死にかげの儀にして、死體のこごなり。

士庶 さむらひと、普。○寸陰を惜む 一寸の時の通の民さなり。

大器の人 すぐれたる、器量のある人なり。

子道の本分 子たるもの、行ふべき。あたりまへのことをいふ。

干將、鑊邪 共に、支那にて、有名の劍なり。古の二劍を作りたり。よりて名とす。乃ち、一は陽劍にして、一は陰劍なり。其の之を鑊るや、金銀、容易に鑄けざりければ、夫妻、各髪を断ち、爪を剪りて、爐中に投ず。火勢をたすけて、漸く鑄かすことを得たり。さいふ。一はすぐやきにして、陽、一はみだれつきにして陰なり。其の名聲、恰も、我が國における、正宗の如し。○干城 國家のふせぎの名にして、大將のこさなるべき。○尸祀 いたしを設けてまつるをいふ。「おたしる」の所を見よ。○大節 人の守るべき、大切のみさをいふ。○上臈 藤を

分高き婦人。○大井川行幸 大堰川とも書き、桂川となり、淀川に入る。延喜七年九月十日、宇多天皇行幸あり、供奉の人々、歌を奉り、其の序は、紀貫之の作れり。○土宜の美惡 物産の善惡なり。

千里鏡 遠目鏡、乃ち望遠鏡のこごなり。○大樹 幕府の世に、將軍家をさしていふ。支那後漢の馮異といふ人、諸將、並び坐して功を論ぜし時、獨り、樹下に屏きて、知らざる者の如くなりしかば、軍中説して、大樹將軍といひしより、この語出でたり。

三代 支那の夏、殷、周の三代をいふ。○千古 おほむかしき。の三代をいふ。○千古 おほむかしき。

小袖 うちぎの大袖なるに對して、したぎをいふ。縮入、褶、單衣ともいへり。

山だち 山賊のこごなり。○大人 有徳の人をいひ、又、父を敬ひてもいふ。○山鷄 くらげに似て太く、羽毛に赤黒色の斑點あり。

三伏 夏の熱きさをいふ。乃ち、夏を初伏、中伏、末伏の三伏に分ち、初伏は、夏至後、第三の庚の日、中伏は、第四の庚の日、末伏は、立秋後、第一の庚の日をいふ。この頃の日は、殊に炎熱なり。

三品の上白 支那より始めて、本邦に砂糖を輸入せしものは、佐三品なりし故に、三品といへり。○大かゞり 「かゞり」の所を見よ。

山水の奇骨 山水の妙所と、いはんが如し。○山がつ 山

の字にして、山里に住み居る人なり。○山踏み 山にわけ入るこごなり。○大御心 天皇のこごなり。心ないふ。

三くさ 三種。○弓矢取つての譽 武人として、の。○弓手 左の手をいふ、弓を左に持て名譽なり。右の手をいふ、弓を右に持て名譽なり。

三國第一 日本と支那とを馬手といふ。右手に馬の手綱をもてばなり。○三國第一 日本と支那とを馬手といふ。右手に馬の手綱をもてばなり。

山門の記録 山門の比叡山延暦寺の異名なり。これ、天台宗の總本山なるを以てなり。三井寺(圓城寺)も今宗の大寺なれば、之を呼びて寺。○大嘗會 天皇の御即位の後、始めて行ふ新嘗祭をいふ。神事第一のものにして、其の祭場を、大嘗宮といふ。而して、御即位、七月以前なれば、其の年に行ひ、以後なれば、翌年に行ふ。○工匠商估 職人、商人をいふ。

大理

前漢の景帝の時、この嶺をおきて、不法を正し、訟獄を決したり。唐に至りて大理寺と稱す。恰も、我が國の嶺。○大中黒の矢 鷹の非遣使の如き嶺なり。上下白くして、中の方、大きく黒き斑ある羽にて、ばきたる矢をいふ。

大の中ざし

「なかざし」の所を見よ。

大節に臨みて奪ふべからず

死生の際

みて、其の志の奪ふべからざるをいふ。論語に「可三以託三六尺之孤」可三以寄三百里之命。大節一而不可奪也。○上つかた 上の方なり。つば、のささあり。○弓弭 ユハズ 弓の先の方なり。

大伴部、久米部

部は、むれの轉トたる詞にして、同トく、大伴、大久米の帥ひ。○小迫合 コセリアイ 小戦居たりし、部下の兵士をいふ。○三城目 白河の地。名なり。

後、九代將軍家重、其の子好重を、清水門内に住ましめ、田安、一橋と同格にせり。この三家を稱して御三卿とす。○小刀に鐔をうつ 小刀には、鐔をうつ、却りて、其の不便を來すが如きをいふ。

三公九卿

公卿といふに同ト。天の三台星、九星とす。三公は、太政大臣(内大臣)、左大臣、右大臣をいひ、九卿は、大納言、中納言、及び三位以上をいふ。

士官

陸海軍人の、士官をいひたるに非ず、學術を修め得て、官途につけるものをさしていへり。

山づみ

山祇の字にして、山を守る神をいふ。乃ち山の神なり。

太平洋の濤をわけ、喜望峰の頂を仰ぎし古人

西班牙の有名なる航海學者、コロンブスは、一千五百一年、印度に遊び、海路、喜望峰を望み大に喜びしよりかくは名づけしなり。氏は、愈、四方の周遊に志し、遂に、○大母 祖母の、大平洋を横ぎりたり。

千年のことぶき

千年といふ程長き命なり。

大猷院殿

徳川三代將軍家光公の事なり。○千戈 たてこ、いふことにて、戦。○大小 刀さ、脇差争のこをいふ。

大相國家

徳川二代將軍秀忠公は、征夷大將軍を辭して後、太政大臣となりし故、かく

川ごし

八百屋のこ

川をこゆる人の、人

○土物店 さないふ。

○小姓

貴人のそば近

く、仕ふる。○三家 徳川初代將軍家康公、將軍少年をいふ。○三家 家に嗣なきとき、之をつがしめんさて、其の子義直を尾張に、頼宣を紀伊に、頼房を水戸に封じたり。然れども、尾紀二家より、將軍家をつぐの權ありて、水戸のみは、之をつぐの權を得ざりき。只副將軍となりて、旗本八萬騎を、指揮する

ことのみを。○三卿 御三家に嗣なきとき、入り得たりけり。○三卿 御三家に嗣なきとき、入り得たりけり。○三卿 御三家に嗣なきとき、入り得たりけり。○三卿 御三家に嗣なきとき、入り得たりけり。

八代將軍吉宗公、其の二子、宗武を田安に、三子宗平を一橋に、邸を作りて住ましめ、米十萬俵を給したり。

千五百秋の瑞穂國

我が日本國の別名なり。この別名は、既に、天照大御神の、皇孫にさづけ給ひし、勅語の中に見えたり。かく別名をつけたる所以は、日本國は、千万年の行末までも、めでたき瑞穂の、榮えゆくべき國をいふ意なり。

山ゆかば草むすかばね、海ゆかば

水づくかばね云々 續紀天平の詔書には、

「海行かば云々、山行かば云々」あり。草むすかばねは、山野に戦死して、屍に草の生するをいひ、水づくかばねは、河海に戦死して、屍を水に漬くるをいふ。大意は、君命は重きものなれば、如何なる事をも辭すべからず、陸に戦ひて屍を山野にさらすも、海に戦ひて屍を水に漬くるも、只君の命のまゝにして、決して、空しく坐死はせぬ

なり。○三關の國 三關のある國をいふ。三關は、不破關、越前の愛發關をいふ。

山は人の面より起り、雲は馬の頭

にそひて生ず 山のけはしき状をいひたるに
て、李白の詩に「山從三人面
起、雲傍馬頭」 ○山柿紀凡 山邊赤人、柿
本人慶、紀實
之、大凡河
内躬恒となり。

三千の刑不孝にまされることやあ
る 孝經に、「五刑の屬三千にして、罪不孝より大なる
はなし」とあり。乃ち、諸種の罪の内にて、不孝を
以て、第一の重き
罪とせざるなり。 上首 長たるも
のないう。

大府の一有司 幕府の役
人ないふ。 ○子規 夏の
始め
宵夜を分たす鳴き、秋になれば、なきやむ鳥にして、
形ひより復せて、胸、腹、淡黒くして、尾も亦
黒。○女房 古、禁裡、院中などにて、召し仕ひ
居る官女ないふ。これ、官女の住ま
へる所は、長局さて、一列に房
あり、之に住へるを以てなり。 ○上達部 「かん
だち
め」の所
に出づ。 ○女院 佛門に入りて、門院或は、院の
號を贈られたるものないふ。

大番組 徳川氏の時、江戸、京都、大阪
の三城を、守りし武士ないふ。

口分田 庄田法により、公民、及び、奴
婢等に、給與したる田地ないふ。

小學の題辭 朱氏の書か、れたるものにして、
すべて十節より成る。今の、數字
を並べたる題辭と
は、大に異りたり。 ○小部 部の小なるものをい
ふ。部とは、昔、高
貴の家、又は、神社佛閣などにて、用ひたる日置、日
除の月にして、格子をおろして、其の上をおほふ。

弓勢 弓を張る力
量ないふ。

夕立のなごり覺ゆて 夕立のふつて通つ
た、あとの標に見
えて。 ○下愚の性うつるべからず
最も愚なる人の性は、他に移すことの出來ぬないふ。
論語に、「上知と下愚とは移すべからず」とあり。

口業治めつべし 十善の中に、不妄語といふ
あり、之をさしていふ。口
舌のために、罪を犯
すことなきないふ。

下公門式路馬 路は車にして、式は、車
前の横木に俯して之に憑るないふ。
所なり。意は公門に至れば、車を下りて、
車前の横木に俯して之に憑るないふ。

上意 主君の意
見ないふ。 ○女郎花 夏秋の候、黄色な
る、小粒の花を、
集め綴りて咲く秋草なり。
又、なみなへしともいふ。 ○山の井 山にわき
出る清水
ふい。 ○千五百万の文詞 千五百万は、詞
数の多きを、形
容して言ひたるに過ぎず。
長々しき文章といふに同ト。

下の上を尅するはきはめたる非
道なり 尅は勝に同トく、下に在るもの、勢に乗
て、上にあるものに尅つ意なり。乃ち戰時
陪臣として、上皇に敵し奉り、
へ、違國に遷し奉ることをいふ。 ○大番 禁裡
を
守
らせんため、鎌倉の命をうけて、諸國の守護、地
頭等が、其の家來を、京師に上番せしむるないふ。

山鳥のほろくと鳴くを聞きて
も 玉葉集に、「山鳥のほろくとなく聲きけば父かこ
う思ふ母かこ思ふ」といふあり。この意をさして
書ける。 ○大番の頭 大番組の頭
役ないふ。

大荒目の鎧 小札にせず、札の頭を、直ぐに切
りたるばかりにして、大に荒く綴
りたるないふ。故に、其の量重く、勇
士にあらざれば、用ふるに能はず。

小十人歩行衆 歩行は、徒士ともいふ、小十人
と共に、前驅の役に服したり。

上巻の總 紐の結び方にして、左右に輪を出し、
中を、石だいに結びたるないふ。

大饗 大なる饗應の儀にして、諸大臣以下、殿上人を
招きて、饗應することなり。二宮の大饗とは、
禁中、正月二日の公事にて、群臣、中宮、東宮の二宮
に拜禮し、芝罈門の西の廊に、中宮の饗につき次に、
東の廊にて、東宮の饗につく、又、大臣の任ぜら
れたる時に、行はるるものを、大臣の大饗といふ。

大食調入調曲 雅樂の調と、曲となり。大食
調は、十調子の一にして、平

剛し、之を戒むる間に在り。其の老するに及びては、血氣既に衰ふるれば、之を戒るを得る在り。とこれに、りて其の。○三里の灸 三里とは、膝がしらの意明なり。下外の凹みたる所に、として、大に、歩行を健にするといふ。

子を思ふかとは、燒野のまじす夜の鶴、子を思ひ傳へたり。生きさし生けるも。○兀坐 まつての、誰か我が子を思はざらん。○兀坐 まつて坐する。○子の日 古、正月の第一の子の日に、千代を祝ふことあり。○大經 筋道をいふ。

山姫の布を晒す 古今集に「たぢのほぬ衣、山姫の布をさらす。○千段巻 しげ藤の弓の、もさらん」とあり。○千木 神社の更に斜に巻きたるものをいふ。刀。○千木 神社の神をも、同様に製したるをいふ。○千木 神社の根の左右の端にある屋の棟に、ぶつちがへにしたる長き木にして、其の先を長く残し、かたそぎにきりたり。

これは古の家の作り方の今。○大寶の制 武文に神社などに存したるなり。○大寶の制 武文天皇の大寶元年に大寶令といふ法律を發布し、この時に定め給ひし制度なり。

大和舞 大和國より出でたる古き舞なり。大かたは月をもめでし云々 有原業平の歌に、「大かたは月をもめでしこれぞこのつもれば人の老さなるもの」とあり。この意をいへるなり。

三つの燈花 和訓栞に「御慶園帝の、尊氏に拘輿して、吉野に入らせ給ふに、夜深く冥暗なりしかば、稻荷の社前にて「うば玉のくらき山路にまよふなる我れにかさなん三つのさもしび」とまされしが、是れ、稻荷山に、三個峰ありて、三個社を造營せし事によらせ玉ふなり」とあり。○大義には滅親 左傳に、「厚從二州見たりける。○大義には滅親 左傳に、「厚從二州見たりける。」

三間の寢殿 寢殿は、貴人の表坐敷にして、正殿コ朝拜 元日、紫雲殿において、殿上人の拜賀したる儀式をいふ。これは、朝拜のなき年に行ひ、普通の朝拜に對していふ。○三年竹の節近 矢竹の堅強きをいふ。○丸根 柳葉、又は、劍尻などいふ。強きをいふ。○丸根 柳葉、又は、劍尻などいふ。

大路見たるこそ祭見たるにてはあれ 大路的賑かなる様を見てこそ、賀茂の祭を見たといふものよきなり。

下國の受領 格のひくき所の受領にして、受領は從五位上、上國は從五位下、中國は正六位上、下國は正六位下にして下國とは、和泉、伊賀、志摩、伊豆、飛騨、隱岐、淡路。○大叫喚の聲 佛説に地獄の一種なり。地獄に、拵活、黒繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、無限の八種ありて、之を八熱地獄といひ、この叫喚、大叫喚の地獄に陥りたるものは、うめき苦み叫ぶといへり。

三人張 三人にて、弓弦を張る程の強き弓をいふ。口さきこら 「口さきこら」に同じく、らは、妻ら、子らの如く、單に添へたるまでなり。

三間の寢殿 寢殿は、貴人の表坐敷にして、正殿コ朝拜 元日、紫雲殿において、殿上人の拜賀したる儀式をいふ。これは、朝拜のなき年に行ひ、普通の朝拜に對していふ。○三年竹の節近 矢竹の堅強きをいふ。○丸根 柳葉、又は、劍尻などいふ。強きをいふ。○丸根 柳葉、又は、劍尻などいふ。

下襲の尻 裾のことなり。三條右大臣 高橋公の子定方公をいふ。千顆萬顆 顆は小さ粒となりたるものを數ふる數詞なり。丈六の金色佛 其の長け、一丈六尺ある、金泥の像坐像なり。○大和鍛冶 大和國奈真には、治多く住ひしが、それ。○三木一草 太平記に、正成、結城親光、名和長年を三木と。○兀子 四つ

腰掛 ○大歌小歌といふことあり

なり。○大とこ 大徳の音

大歌は、古代の歌をいひ、小歌は、當世の歌をいふ。

○大床 縁側より、一段の幅のたつた高き僧を敬ひていひたるなり。

○大文の指貫 大文は、織物の紋をいふ。

○下嫁 皇女を臣下のものにして、指貫は「指貫」の所を見よ。

大童 髪をさけて、甚しく亂れたるを形容していふ。亂髪、亂れがみなどいふに同じ。

夕顔 瓢の花にして、夕暮に白く咲くものなり。

口つきのをのこ 馬の口より、馬の男をいふ。

三味僧 法華三昧を修むる僧をいふ。

三苗を征せしもいくさを班して云々 古事記にて、三王の一を稱せらるゝ萬の、三苗を征伐せし時、三王にしてせせりしが、軍兵を

ひき返して、徳政を施したるに七旬にして、悉く服従したりと、乃ち之をいひしなり。

川もせきあへず 川の面も狭くなるばかりに、多く通る状をいふ。

三人のをのこども 爲氏と、爲教と、爲相とをいふ。

子を思ふ心のやみ 後撰に、「人のおやの心はやみにあられども子を思ふみちにまよひぬるかな」とあるによれり。

山より侍従の兄の云々 山は、近江國の比叡山をいふ。

山三井寺のさわぎ 「弘安元年五月十二日、日吉神興三基京都に入

る、是れ、園城寺金堂供養によりてなり。十六日、日吉神興各々山に歸る」と帝王編年記にあり。このさわぎをいふ。山は、比叡山の延暦寺なり。

○下文 官より下す。書付をいふ。

大日本島根はもとよりの云々 日本島根は、日本全国をいふ。乃ち、何所の地も、天皇の御地なれば、皇都に同じきないふ。

三輪が崎なる云々 万葉集に、「くるしくもさきのいわたりに家も」

○大殿籠 天皇のおやすみにならぬことあり。

○弓ひく道にもたけく 弓をひく上手なるをいふ。

○小櫻を黄に返したる 藍の地に、櫻を白く染めぬきたる草を小櫻草といふ。それに黄を施したるを細くたちて、おどしたる鑑なり。

三笠山もうちわたし 「うちわたし」は、意なり。仲鷹の歌は、古今集に「天の原ふりまけ見れば、春日なる三笠山に出でし月かも」とあり。

○上品上生 「九品淨土」の所を参照せよ。

○上皇も新主も 上皇は、後伏見上皇、花園上皇をいひ、新主は光嚴、白河上皇をいふ。

○尸祿 其の職をつくまざる、何の功も帝ないふ。

○子錢 単に錢をいふに同じ。

○子錢 単に錢をいふに同じ。

千乗の君 諸侯をいふ。○上昇 上氣逆上するをいふ。

山びこ 山にあたりて、聲の返射するをいふ。又之を山神のしわざとして、水魂ともいふ。

三節會 元日節會、七日の節會、踏歌の節會をいふ。七日の節會は、即ち、白鳥の節會なり。

凡例 著書の初に、例として、書き置ぐる文なり。

小一條院 三條院の御子、敦明親王なり。○大比え 近江の比叡山をいふ。

上品のうてなにあれ出でたらむ 上品の蓮臺に生れ出でたらむなり。蓮臺は佛の坐する坐なり。上品は「九品淨土」を参照せよ。

大風起り雲飛揚す 漢高祖の詩に、「大風起兮雲飛揚、威加四海内」

兮歸故郷、安得三猛士兮守四方」とあり。

士卒の疝を病めるを 魏の將吳起、士卒の疝をやめるをす

ひしこさあり。直は、○川戸 川の瀬戸 靡に似たる腫物なり。○川戸 をいふ。 山梨縣

山なしといふなる國に云々 山梨縣

山口の花 山の入口の花なり。轉じては、物に入る初めをいふ。

山鳥の尾の秋の夜 山鳥の尾の如く長き秋の夜さかいる枕詞なり。

○大織冠 冠の名にして、織物にて作り、位によりて相違あり。大織冠は、

○上毛頼人 カミツケンカヒト 大外記なり。小納言の下に、大小外記ありて、大小公事の詔書券文を勘定する等の事を掌る。

山わかれとびゆく雲のかへりくる云々 山の端を離れて、彼方に飛び行きし雲が、また、都にかへる時のなからんやま、頼もしく思はるゝさあり。

山はさけ海はあせなむ世なりとも云々 よしや、山が裂け、海の水が濁れて、陸も、予は、天皇陛下に對して、いかでか二心のあ

大坂定番 大坂には、城代、定番、在番、加番、町奉行等の職あり。定番は二人ありて、玉造口、京橋口の二所を守り、料三千錢なり。其の配下に、奥力三十騎、同心百人宛あり。

三條の疑問 八月、朝鮮の使、綱吉の命を贈けるを賀し、光圀にも亦、方物を贈る。其の禮欠ぐる所ありければ、光圀乃ち之を詰責せしむ。其の三條は、一に、贈れる所の産物、唯物數のみを記して、姓名なきこと、二は、紙尾に一印を捺して、而して、三使の贈る所なき事、三に、印文、尹公の二字に似たり。凡そ、古人へ、贈は、自名を稱して、字を稱せず。然るに、これは、字を用ひたりとの三條なり。

口ひやくかつをしほからからき 口ひやくかつをしほからからき

山崎のたなゝる小櫃の繪も云々 山崎のたなゝる小櫃の繪も云々

世は云々 何も食ふものなき、つらい時には、口がひりくするやうな、體のしほが

○大悲の額 悲は、慰傷を調へたるなり。

○小心翼々 恭しく悔むの苦を救ふ意なり。

三界はたゞ心一つなり 佛經の語にして、乃ち、慾界、色界、無色界をいふ。三界は只一心にして、心外に別法なしとあるに由り。

三途の闇に向はんととき云々 三途は佛語にして、彼の世に向はんとするに臨みて、何の善業もなければ、佛にも何事も以てかこたんと意なり。

上なかしもゑひすぎ 人品を、上中下にて、上中下の人、皆酔ひすぎたり。

子の日なりければきらず 當時、陸奥家の法とし

小松もがなといへど 小松を引きたいと日一の所を参照せよ。

女兒のためには親をさなく云々 子の爲めには、親の心も、をさなきやうになることなり。これは、女兒にかぎりたるにあらねども、紀氏の亡見は、女子なりし故に、か。

千世へたる松にはあれど云々 百年を経たる松ではあるが、吹きわたる風の身にしみわたるやうすば、今も昔に、更にかはる所はなしとの意なり。

「たな」は店にて、「小櫃」は、小さきはりに繪をかきたる小兒の玩具なり。「まがりのほらのかた」は、法螺貝の形したる餅。○大あなぐり 大衆さて、菓子の類なり。○川せうえう 「せうえう」は遺探す、一の。○川せうえう 「せうえう」は遺方法なり。遊歩、散歩などいふに同く、氣ばらしのそとあるきないふ。

夕月夜をぐらのやまになくしかの云々 今日、九月三十日にして、秋の盛くる日なるが、あれ、あの小倉山にて、鹿の長鳴きして居る、其の聲のきれぬうちに、秋は暮れて仕舞ふであらうといへる意なり。「夕月夜」は、小倉といふ

四畫の部

手垂にねらうて

上手にねらうてなり。手垂は、熱練といふに同く。

五倫

人の最も重んずべき、五の道なり。乃ち、君臣に義、父子に親、夫婦に別、長幼に序、朋友に

にかかれる枕間なり。

文見ても教に背く身のさがを云々

朝な夕な書讀みて、人の行くべき道學べども、學びし道を、實行すること能はざるならばした、かへすとも、遺憾に思ふけれど、實に仕方のないものだといふ意なり。「しみがへり」は、くりかへしくりかへしといふ意にして、其の。○丈夫 「ますらを」しみに、盡をいひ加へたり。○丈夫 「ますらを」よ。

信あることこれなり。○天樂園 この上もなき之を、五常の道といふ。○中ざし 「なかざし」の所を見よ。

分科大学

大學を、醫科大學、理科大學、工科大學、法科大學、文科大學、農科大學の六つに分ち、其の科一。○公立學校 立公

學校は、政府の費用により、又は、保護によりて、設けたる學校をいひ、私立學校は、公立學校の反對にして、一人、或は、數人の力によりて、設けられたる學校をいふ。

不具合人

口にて言ふ所と、身にて行ふ所との一致せぬ人をいふ。

支舖

出店、支店、などいふものと同く。○天職 天子の職分をいふ。

天爵

學問、道徳の如きものをいふ。之に對して、爵位の如き、人の定めたるものを人爵といふ。

天津

支那の都會地なり。直隸省にありて、大運河と、白河との會する南岸にありて、貿易港なり。

天さかる鄙

天さかるは、鄙といふ詞の、枕詞なり。鄙は、都より見れば、天の如く、遠く離り居るをいふ。○少參事 明治維新の際、暫く置かれたる地方官なり、政事に參與し、今の書記官の如き官職にして、大參事の下官なり。

文庫

圖書館の如きものなり。

文はかたし武も易からず

文學はなかに、武學はなかに、

しきものである、されば、武術は、やさしきものであるかといふに、いや、武術も、さやうに、やさしく、覚えらるるものでは。○手をれ 手にて、折れないといふ意なり。

日かげ

日あし、時間、などいふに同く。○戸ぼそ 門戸なれども、轉じて、

凶歉

凶歳、凶年、などいふに同く、穀物のみのらざる飢饉年をいふ。

文教

學問の教をいふ。○五經 易經、詩經、春秋、左氏傳、禮記をいふ。

六經

五經に樂經を加たるものをいふ。又、後世は、五經に四書を加へていへり。

比々として皆是なり

いづれも皆、これ

太平の化久しく

久しき間、世の中が、無事に治りてこいふ意なり。

天朝の舊典 朝廷の古き儀式など、書き記したる書物なり。

文華 學問のひらけて行くことをいふ。

文人墨客 文章や、詩などを作り、書畫をかきなごして、風流に暮し行く人なをいふ。

月日は旅寝に移る 旅の空に、数多の月日を送りたることをいふ。

切嗟 みがくこと。不慮 思ひがけなきことなをいふ。

分限相應 身分に、つりあひたることをいふ。

天道の咎 天のうしろの、お五欲 佛家の詞なり。色、聲、香、味、觸の五種の情慾をいひ、又五塵ともいふ。

中を執る ほどよき所なをさるなり。

天地と徳を合せ、日月と光を共にす 其の心正しくして、一致の行ひあることは、天地の善美正大にして、心正しきか如く、其の威光の

美しくかやけることは、日月と同一であるといふ意なり。

天變地妖 天地のなせる災にして、地震、洪水、大風などの如きものをいふ。

左衛門尉 古、禁中の出入を按察し、及び、巡邏するを司る役人なり。長官を督といひ、次を佐、其の次を尉といひたり。

引付衆 評定衆をたすけ、訴訟の事を取り扱ふ役なり。先例を引き、諸事を書き付くるを以て、この名あり。

公裁 裁判の裁り。文房具 書物寫眞に、必要の道具にして、机、筆、紙、墨、硯なをいふ。

丹 赤色の土をいふ。古は、物を染むるに、之を用ひたり。

尺にて押せば 物のさを以て、押しはければなり。

天府の國 四方より、萬物の聚る國といふことなり。

内外の名區 京都内外の、名所の地なり。

文書記録 つかきものや、かきつけ、などをいふ。公卿 三公九卿

の所を見よ、後世に至りて、は、すべての殿上人をいふ。○中世 大化の新政時代の、至る。○互市 貿易の間にいふ。○公債證書 官府の借財の證書をいふ。

内附入貢す 關地となりて、貢物を奉るなり。入貢さば、外國より入朝して、貢物を奉る。○太平記 花園天皇より、後光嚴天皇に至る、五十年間の事を、記したる。○水主 「カミ」の所にいづ。○方域 四方の區域なり。

仁 五常の一にして、博く、物を愛し、いつくしむ心なをいふ。○仁徳 物事に徳をいふ。○太泥 乃ち「ほろれお」たる、仁の。○五常 五倫のこともいひ、又、仁、義、禮、智、信の五徳をもいふ。

不肖 ちがひなる。○友愛悌順 友愛は、兄弟の間の愛情をいひ、悌は、兄に仕へて篤實なること、順は、正しき方に従ふこと。

夫人 貴人の妻をいふ。曲禮に、「天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孺人、士曰婦人、庶人曰妻」とあり。○犬公方 公方さば、將軍のことなり。

天稟 天よりうけだ。○反復 くりかへす。化育の生機 作物を、そだつる生氣をいふ。日月の蝕 日蝕さ、月蝕をいふ。蝕は、むしのくふさいふ字にして、古は、日月の蝕を、虫の作用とす。○手練 研究したる手したればなり。○日乘 日記のこと。

太守 古、上總、常陸、上野、三國の守の稱にのみいれども、後には、國主、親王、殊に、之に任ぜらるること定りたり。○日乘 日記のこと。

井幹、井榦 木を四角にくみて、井の縁となしたるものなり。

手形 金銭の代用をなして、流通する書き付けなり。

方丈ばかり 四方共、各、一丈ばかりなり。

手どり髪

鞍に近く、頭に生え。○天守ツクシの城

本丸に、殊に、高く設けたる、物見やぐらなり。織田信長、安土城を築き、この物見やぐらに、耶穌教の神たる、天主を祀りしより、この名起れりといふ。

日野のひとへ羽織

日野といふ絹にて作りたる、單羽織なり。

内の樂

耳目を樂ましむる、樂ならずし。て、精神を樂ましむる樂をいふ。

内裏

宮城のこゝ。○丹誠 眞心より出でたる、親切をいふ。又、熱心さなり。

木乃伊

人體のひぼしをいふ。埃及も同じ。○天鵝絨 スペイン語なを藥用に使ひたり。○天鵝絨

線を入れ、織り上げて之をぬき、經線をわなにし、其のわなを切りて、毛をたてしめたるものなり。

中ぞらにてやむ

中ぞらとは、どちつかず、中途にて、やむ。○化醸 變化せさせて、醸造するをいふ。

を講じて、其知を致すこそ、人の務めなれといふにあれば、この學は、實行に傾けりといふべし。之をまた陽明學といふ。○分部昌命拜書 拜書は、讀書と同いふ。○分部昌命は、近江國新島郡大濃の藩主なり。

日と同じくして語るべからず 日

比と同く、同等の比較を。○火燈口 「櫛形」に

同所を。○公幣をつひやすことなし

見よ。○公幣をつひやすことなし

にのみ金ぐらの金を、○不覺 不覺悟の略せら

費すことなきをいふ。○介錯 切腹したる人の、首

油断して、其の策。○介錯 切腹したる人の、首

を失したるをいふ。○介錯 切腹したる人の、首

井蛙の見 井の中の蛙は、其の見る所甚だ狭く、こ

れにたさへて、我が見聞せし範圍の、甚だ狭

く、廣く世間の有様を知らざることをいふ。

内府 内大臣のこゝにして、橋本綱紀の傳にあるは、

三條實美公の父君たりし、實美公の事なり。

勿體なし

おそれある。○月代 明治維新前

頭より、頭の中央へかけ。○公公 平の論をいふ。

て髪をそりしをいふ。○公公 平の論をいふ。

公家の御事を重くして本所の煩

をとむ 公家は、公卿を略し、本所は、公

卿の領分たる、莊園をいふ。乃ち、公

家をてい重にそり扱ひ、これ迄しげく、武人の暴

家などとして、公卿の領分たる莊園を、侵略するこ

とありて、其の煩、いはん方な

かりしを、停止したるをいふ。

犬馬の齡 自分の年齢を卑下していふ。類書

要に「犬馬齡穢自言老也」あり。

手跡の正邪 書きたる文字の、

正不正をいふ。

天淵なるべし 天と地の差

あるべしなり。

王陽明流の學者 明の王陽明の唱へし、學問

を信仰せし學者をいふ。

天賦の至誠 天より授けられた

る、眞心をいふ。

丹地道なほくして險しからず云

々 兩句共に、たとへにして、道の平坦にして險し

らず、水のおだやかにして、波のなきが如く、心

に、一の不平なく、其の職。○丹青の妙手 彩色

繪の上手をいふ。丹は赤色、青は青色

なり。この職より、彩色繪の異名とす。

水屋 茶室の隅の、器

を洗ふ所をいふ。○王化 天皇の德に化

するをいふ。

天業 あまつひつぎ。○手向 神佛に、そなへも

のわざをいふ。○天の羽々矢 戦争に用ふ

ても、中江藤樹、及び其の門生熊澤蕃山等、之を主張したりしが、後にこれに禪學を加味したる心學出てたり。然れども天明の頃石田梅嶽、中澤道二等の唱へし道話とは異れり。

内木綿の眞進國

内は善美の意、木綿は、清淨潔白の義、眞は美稱、進は幸にして、五穀の善く出来るをいふ。乃ち、我國の異名なり。

不祥ながら御相手になり申す

下貴

の御相手としては不肖なる身故、御不足でもあらうけれども、御相手と成り申すといふ意なり。

文机

書物を載する机をいふ。

不倫不祥のこののみ續く

人の道に違ふことなり。

不吉のこののみついできてなり。乃ち、子として親を殺し、義朝、姪として、叔父を殺し、清盛の如き、御兄に先き立ちて、御位につき給ひし、後鳥羽天皇の如き、を不倫といひ、海低の藩屏を消え奉りし、安徳天皇の如きを、不〇公事。訴訟といはる如し。

月の宿かるも

「卒都婆も言むし」の所を見るべし。

文車

下に輪を作り添へて、牽くべきやう、造りたる書物櫃をいふ。

反古

書きくづしたる紙なり。

支離して體をなさず

はなれなくさなりて、一體の文章をならぬ。〇心を置く

「こころをおく」の所に出づ。

天道

天の道にして、天地間における、靈妙の體をいふ。

天目一箇神

上古、はじめて、寶劍を作りし神なり。

五穀

米、麥、粟、豆、稗をいふ。又、米、麥、粟、類、二稻類、三豆類、四麻、五麥これなりとあり。

五月雨に花たちばなのちりしより云々

一首の大意は、正成公、討死せしより以來は、天下、藤氏の有に歸し、闇黒世界となり云々

反匙

琉球に産する毒蛇にして、其の色青く、人がまれば、大抵死すといふ。

内通詞、部屋附など

通詞は、通辭、通譯の異なる國人と、談話をなす時、其の間に立ちて、双方の言語を取次ぐ人なり。内通詞は、カランズ一己の手に、履ひきりたる通詞をいひ、部屋附とは、旅館付きの通詞なり。

火技の中興

火技は、砲術などいひ、中興とは、衰へたるを、再び盛にするをいふ。

仁和寺

山城府の寺なり。

心づきななし

「こころ」に出づ。

天御虚空豊秋津根別

本州の所

六軍の猛虎にあらず

六軍は、天子の統率し給ふ軍勢をいふ。乃ち、左右龍武、左右神武、左右神軍これなり。猛虎は、共に猛獸の名にして、武勇の兵をいふ。

六合

天地四方をいふ。

木磁

木と、磁器とをいふ。〇六稜

六つの角をいふ。

公文所

鎌倉幕府の、文書を取扱ひし役所に於て、後に、政所と改む。長官を別當といふ。

元服

「もさざり」をいふ。〇水樓

水邊にある樓閣なり。

五つゑあまり

五丈あまりなり。

天の文あり

天のあやもやうあり。

水牛の胃

水牛の角を、前に立てたる胃にして、黒田家、累代の寶器なり。

五段

「七八段ばかり」〇天真

わざとならぬ心なり。

水牛の角

前に立てたる胃にして、黒田家、累代の寶器なり。

天の文あり

天のあやもやうあり。

公文所

鎌倉幕府の、文書を取扱ひし役所に於て、後に、政所と改む。長官を別當といふ。

五節舞

古、陰曆十一月中の丑の日、朝廷に行はれし舞會に、五人の舞姫を擧げて、盛なる舞樂ありき。これを五節の舞といひ、其の趣を舞妓といふ。「續かへす天つ少女を云々」の所又一五節舞試一を○丈夫健男の伴よ「ますら

を見○公達 君たちの音便にして、諸王、諸家、清暉、などの高貴なる人の、子息を敬ひて

不爲昭々信節不爲冥々惰行 昭々ばあきららかにして、冥々ば其の反對なり。乃ち、人の目前なごあらはなる所において、わざわざましく、節操の事を言行せず、又人の見ない所

天兒屋命 天照大御神の、天磐窟にかくれ給ひし時、祝詞を奏し、神なり。後、皇孫に從ひて、日向の高千穂峰に降り給ふ。これ乃ち、藤原氏の先祖なり。

天太玉命 高島靈神の御子にして、皇孫瓊々杵尊を補け奉りて、高千穂峰に降り給ふ。

天鈿女命 天照大御神の、天磐窟にかくれ給ひし時、舞踏せし神なり。

内外典 内典とは、佛家にて佛書をいひ、外典とは、佛書以外の書物をいふ。

天そより聳ゆ 天に支ふるが如く、高き所の魚のたとへに叶へり 水の少ある魚の如く、やがて、死するより外道なきことにて、命の旦夕に迫るをいふ。佛經の語に「是の日已に過ぐれば、命も衰減せんこと、猶○丹つき 丹のなるなり。これ、薪の乏しきを以て、佛像をぬすみ、或は、堂の道具を破りたりてくだけばなり。丹は、赤に黄色を帯びたる繪具にして、神社佛閣などをぬるに用ふ。

天堂淨土 天堂は、耶蘇教にていふ極樂世界にして、淨土は、佛家にて、佛の居る清淨無垢の極樂世界をいふ。○太宰の帥 太宰府の長官をいふ。太宰府は、筑前にありて、九州二島を管轄し、上古は、鎮西府といひ、唐三韓、諸蕃のことも司り。帥に正副あり。

天漢の脉より分る 天漢とは、天の河のこにて、皇族の御方をいふ。○中岳 一に金洞山に、妙義山は、白雲、金洞、金龜の三峰より成り、金洞は、其の中央なるを以てなり。

六府 六衛府ともいひ、左近衛、右近衛、左衛門、右衛門、左兵衛、右兵衛をいふ。

爪はじき 「つまはじき」の所に出づ。

文弱に流る 文事にのみつとめて、更に勇氣のなき方にいたむくないふ。

心の駒のすさぶべき方ならず 駒は、佛經の語にして、意馬心猿といふより出でたり。單に、心の向いて行く方ではないといふに同じ。

井樓 城壁、城門などの上に築きたる、高き家をいふ。乃ち、やぐらのことなり。

天機 造化自然の機密をいふ。又、天島の御機けんをいふ。

木綿付鳥かすかにおとづれて遊

介子権が戒

介子権は、晋の文公の忠臣なりしを食はしむ。國にへるに及びて、恩賞、子権に及ばず。由りて、子権は、錦上山中にかくれたれば、文公、人をして之を求めしむるに得ず。よりて、其の山をやきしに、子権やけ死にたり。文公之を哀み、封して介山といひきとす。介子権、曾て、文公に謂て曰はく「公の晋主たるは、天命なり。然るを、人々、己れが力と思へるは、誣ならずや。人の財を竊むものは、猶ほ之を盜といふ。況んや、天の功を貪りて、以て、己れを力とすか云々」と、之を介子権の戒といふ。

不輸の地 増租を出さぬ地をいふ。○元亨利貞 元は萬物の始りなれば、時において春なり。亨は萬物の長する時なれば、時において夏なり。利は萬物の遂ぐる時なれば、時において秋なり。貞は萬物の成る時なれば、時において冬なり。

木先生 木下順庵をいふ。○木賊薊 能狂言の名なり。

木綿付鳥かすかにおとづれて遊

木綿付鳥かすかにおとづれて遊

木綿付鳥かすかにおとづれて遊

子なほ残月に行きけん云々

木綿付鳥は説

のこまにして、遊子とは旅人をいふ。陶谷の有様は、古支那の秦の昭王の世に、孟嘗君といふ人あり。孟に

○心しらび

「こころしらび」の所に出づ。

五五三

「せ五三、五五三」の所を見よ。

日の光やぶしわかねば

「日の光やぶしわかねばいそ

のひみふりにし里に花もさきけり」

中黒の旗

新田氏の紋所は、丸の中に横に一本の旗を中黒の旗

○巴の旗

上古、柄の上に雷きし模様を中黒の旗

勾踐の耻を忘る

呉王闔閭、越と戦ひて死にり。子夫差、父の怨を

復せんとして、朝夕祈の中に臥し、出入毎に人をして、夫差、汝は、越人の汝が父を殺し、こゝを忘れたるを

にかけ、坐臥に之を嘗めて曰はく、汝、會稽の耻を忘れたるか。范蠡と、國を富まし、兵を強むること二十年、遂に、吳を亡して之を併せたり。之より、不和の心あるを「吳越の思をなす」といひ、辱を清むるを「會稽の耻を雪ぐ」といひ、腹食を忘れて、復讐をはかるを「臥薪嘗膽」といふに至れり。

六の花

雪のこまなり。其の形、六出なれば六出花ともいふ。韓詩外傳に「草木花多五出、雪

花六出」○六尺

賈人のかごを、つぐ人をいふ。

中書王

中書とは、中務の唐名にて、一品中務卿、征夷大將軍宗尊親王をいふ。

文選

周の本より、六朝までの詩文を集めたる書にして、其の數三十卷あり。

六十の露消えがたにおよぶ

六十の年の過ぎんとする時なり。乃ち、爪折りたる

○爪木

爪折りたる小枝のこゝ

○手合せ

對手に立つをいふ。乃ち、用意といふに同じ。

天莫空勾踐時非無范蠡

陸下は、勾踐の事

不定のことかな

疑はしきことか。なといふに同じ。

太夫判官

太夫は、五位の通稱にして、判官は、檢非違使の尉をいふ。檢非違使の長

介灼の僧

はうする僧なり。○引出物

「ひき

○日本の標

標文は「天長地久大日本國」の八字なり。

天文推歩

天體の變化につき、推しりて、天文推歩

身を慎むべきことをいひたるにて、天は高くして、如何なる高さ人なりとて、頭の届く憂ひなく、地は厚くして、如何に亂暴に踏みたりとて、決して、破るゝが如き憂ひなれども、尙ほ、丈をわづめて行くがよ、足音静に、行くがよ。○介して ながだちとて、しさいへる意なり。

天誅時に乗ぜり

賊を誅伐するは、誠に能き時機であるといふ意なり。

不飴殘杯冷炙

残り酒を入れたる杯や、つるを好まずにて、富貴の人の門に出入して、其機嫌を取りて御かけを蒙ることなどを好まぬといふ意なり。

木牛流馬

木にて、牛馬の形の車を作りしものなり。之を使用して兵器糧食を運搬し、

以て人力を不求め聞達於諸侯

開達助けしなり。

名譽といふに同じく、諸侯は諸大名といふに同じ。乃ち、名譽が諸大名に聞えて、用ひられんことを求め望まないといふ。○中堅 中のそなへないといふ。

水流如箭萬雷吼

水の流は矢の如く早く、其の水音は、一時に千萬

の雷の鳴るが如く、實○火燈 陶器にて作り、上にすさまじき火をいふ。○上東門院 一條天皇の皇后にして、影子女子といひ、藤原道長なり。○水理 水路といふに同じ。

不破の關屋

新古今集に一人住まぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後には秋の

允文允武

まことに文にも、まことに武にも、共にわたらせ給ふといふことなり。

火漿

火山よりふき出す、岩の石のさけたる物をいふ。

水邊楊柳綠煙絲

水邊にある柳の枝の緑な煙のたつやうにした。

不使羶血盡膏日本刀

羶血とは獸類の血のなまぐさきをいふ。元人を殺しめて、獸類にたごへたるなり。乃ち彼れ元人の羶血を、日本刀にぬらすして、東風一颯云

々々、其の意前に立ち戻るなり。日本刀に血をぬることは、日本刀を以て切ることなり。乃ち日本刀にてきるこそなく、太濤のためにはき去られたるが残念だといふ意なり。

五柳先生

五柳は、支那の陶淵明といふ人の號なり。

六根清淨

六根とは、眼、耳、鼻、舌、身、意をいふ。眼における色、耳における音、鼻における香、舌における味、身における觸、意における法を六塵といひ、六塵の迷ひなきを六根清淨といふ。

○六塵

「六根清淨」の所を見よ。○五山 京都五山は、南禪寺、五山之上、天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺をいひ、鎌倉五山は、建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺をいふ。

○比々羅木の八尋矛

ひいらぎの木にて作りたる矛にして、八尋は、彌磨の義にて美稱なり。古の矛は、鋒刃あるもののみならず、ほささきの木を以て作られ。○斗牛をつく 天をつくといふに同じ。斗牛は星の名なり。○水なくして飴を作る 本日

書紀に曰はく「天皇新て曰はく、吾れ今將に、八十平糞を以て、水なくして飴を造らん、飴成らば吾れ必ず録刃の威をからずして、坐ながら天下を平げん」と、乃ち、飴を造り給ふに、飴即ち自ら成る。又新て曰はく、吾れ今將に、嚴裝を以て丹生の川に沈めん。もし魚大小さなく、悉く酔ひて流れて、譬へば被葉の浮くが如くならば、吾れ必ず能くこの國を定めん、もし然らずば、終に成る所なからん」と、乃ち糞を川に沈め其の口下に向ふ。しばらくありて、魚皆浮び出で、水のまじく、嘖嘖す」とあり。乃ちこれをさしていひたるなり。○文恭公 德川十二代將軍家慶公のことなり。

月輪關白

藤原兼實公をいふ。○文、行、忠、信 語論

中言

中間に立ちて、双方の交りを損するが如き、言語をなすをいふ。

天道のむくい

漢書に「有陰德者、必蒙其樂、以及子孫」とあり。

内覽の宣旨

太政官の發する文書を、天皇の未だ御覽あらせられざる前に、閱す

○内辨 古の即位、元日などの節

○心ざしとゞまり 心を

○心あらむ友もがな 歌など

○心にくし 憎きにあらず、其の人

○心各有執 人皆、自分の心に、かつたきりて動かすべからざるたしかの所があり

○内甲 内胃とも書き、かぶこの内面をいふ。又、内に被る麻布、或は、木綿にて

○匹夫匹婦 世の常並の平凡な男女をいふ。

○内命婦 命婦は五位の官女にして、五位の官人の妻は外命婦といひ、之に對して、五位の

世にあらむおもひでかくこそあらまほしけれ 世にあらんかひには、かやうにありたしと前にかくありしことを思ひ出で、いひたるなり。大國隆正翁の説に、資朝卿の心は、人各身のほどくに従ひて、なすべき業のあるものなり。そのなすべきことを盡してこそ、丈夫と生れし甲斐はありけれ。北條一家逆意をふるひて

日頃ぞ世に多くなる 此の頃となりてこそ、世間にも澤山になりたり。

日のたて日のぬき 日のたては、東西に通ふ程度をいひ、

犬ふせぎ 佛堂の内陣と、拜殿との間に、犬をふせぐ爲めに設けたる、櫓の如きものをいふ。

○五節帳臺試 五節とは、古、陰曆十一月中の丑の日に、朝廷に行はれし節會なり。この日、五人の舞姫をえらびて盛なる舞樂あり、之を五節の舞といへり。帳臺試は常寧殿にて、主上御覽ありて、まゐりの儀式あり。内々参るをば曉坐といふ。

○方人 味方

○中院 土御門上皇を申し奉る。

○中門の廊 古、貴人の邸宅には、總門の内、又中門ありて、其の屋根は、廻廊に連りたり。故にかくいふ。こゝに、侍所ありて、下部のもの詰居り、客の來る時の取次をなす。

世をへうする 世を代表することにて、西八條の懸がしきに反し、世間の鎮靜

天皇を苦しめ奉ること、年久しくなりぬ。今之を道討せんとするは、天皇に近く仕へ奉る我輩のなすべき業にぞある。成ると成らざるを以て、いふべき時は、かゝる人のあるによりてこそ、世の中の志をも起すなれ。心にしみて思はれたるにより、あな、うらやまし、世にあらん思ひで云々といひしなり。

不具に異様なり 異る様なりといふ意なり。

太夫敦盛 太夫とは、五位の人の通稱にして、多くは、「だいぶ」ともいふ。

心にくし 憎きにあらず、其の人

心各有執 人皆、自分の心に、かつたきりて動かすべからざるたしかの所があり

○内甲 内胃とも書き、かぶこの内面をいふ。又、内に被る麻布、或は、木綿にて

○匹夫匹婦 世の常並の平凡な男女をいふ。

○内命婦 命婦は五位の官女にして、五位の官人の妻は外命婦といひ、之に對して、五位の

○世官世族 世々、或る一族の

○文献 古き書もの

○丹生のやしろ 官幣大社、丹生川上

○天返 上

○矢束 矢の長さといふに同じ、矢は、一

○元三 元日は、年月日三つの元

仁ありて命をがし云々 後漢書に、「東方有君子國

仁ありて命をがし云々 後漢書に、「東方有君子國

仁ありて命をがし云々 後漢書に、「東方有君子國

天子本命の道場

本命は、司命などいふに全
く、聖運の隆盛、寶祚の

無究なるを祈願す
る修法場ないふ。

○中有の旅の空

論に

「要途與冥途」中「中有」ありて、必
ず死を期したるなりなどに用ふる語なり。

父の盡に幹す

周易蠱の卦の語なり。「蠱者蠱
而生蠱也」とありて、父の身

にふからぬことあれば、其の子たるもの諫めて、之
を救ひ正すないふ。幹は、正しく助くといふ義なり。

不興して

不孝してとも書き、不孝もの
として、勸導することないふ。

分内

區域さい。○六孫王
源經基は、清和天
皇第六の皇子、貞

純親王の長子な
れば、かくいふ。

文をもて朋をつとへ

論語に「君子以レ文
會レ友、以レ友輔レ仁」

○水無瀬殿

御島羽院の離宮にし
て、山城國乙訓郡にあ
り。

○父の王を失ふ例

觀世無量壽經に、
「劫初以來、有」諸

惡王二食三國位二故殺三其父二万
八千人云々」とあるによれり。

文は道を貫く器

鶴林玉露に「文章一小技、
於道未レ爲レ尊、此論後世

之文也、文者貫道之器、此論
古人之文也」とあるによれり。

王事監きことなければ

詩經に「馮牲驅
々、周道倭倭、

豈不懷歸、王事靡盬、我心傷悲」とあり。監は、堅固
ならざるをいふ。乃ち、臣たるものは、王事に奔走し
て、よくその職分を盡すべし、自ら其
の身の勞を思ふべからざるの意なり。

天翔りても

靈魂がこの祭場のそら
なかけ廻りてもなり。

火桶

木製の圓き。○心にくし
きをいふ。

心あはたしく

花の心も、いそがし
く散るとの意なり。

六月はらへ

今の大祓のことにして、名越祓さ
もいひ、陰曆六月のみそかに行ふ
神事なり。年中の罪咎

○公事

朝廷にて行はる
諸の制度儀

式をいふ。十二月に行はるし。○亢龍の悔
公事は、年中最も多きなり。○亢龍の悔
に「亢龍有レ悔、盈不レ可レ久」さあるによれり。只進み
て、極點に達すれば、遂に退くより外の道なしとの意
なり。○六藝 禮、樂、射、御、書、
藝、の六つをいふ。

不堪の藝

無器用の
藝をいふ。

文も久しくきこえさせねば云々
手紙にても、久しく、御様子なうか、ほれば、心もさ
なし、如何に御暮し遊ばすかなど、少しばかり書きて
よこしたるが
うれしきなり。

内を慎まず軽くほしきまゝにし
て 自分の身元を正しくせず、行跡をかゝるく
しくして、ほしいまゝにするさきはなり。

世にあまされて期する所なきも
の 世に用ひられずして、官に
仕ふる目的なきものなり。

牛車を用とする人なし

牛車は公卿の
乗る車にして、

公卿の衰へ。○月のみやこ 京都を天上の月
の宮にたとへて
し様をいふ。

心のみへだてずともたび衣云
々 心ばかりは通ひて、隔てなきも、旅の山路を、遠
く隔てたる遠方の有様は、如何に暮しをらんぞ、
知るよしなれば、そののみ覺束なく案づらるといふ
意なり。「しら雲」のしらに、不知をかれ、衣と雲との
縁にて、隔、重さいふ詞
を用ひて、隔なせるなり。

心ばへある本文

本文とは、古書などに見え
たる典故ともなるべき文

句にして、その結 陰曆正月廿一日、仁
排なるものをいふ。○内宴 壽殿にて行はせたま
ひし、内々の節會にして、文人に題
を賜ひて詩歌文章を作らしめたり。

仁和の帝の御言葉云々

古今集に、光
孝天皇の御詠

さて、「君がため春の野に出て若葉つむわが衣手に露はふりつゝい」とあるなへり。仁和は光孝天皇の御代の年號な木がらし 秋の末より、冬の初に

水無瀬山わがふる里はあれぬらむ云々 湘殿も今は、誰も伺候するものもなき故に、定めて野らの如くに、荒れはてし仕舞ひしならむと嘆き給ひしなり。「水無瀬」は御鳥羽院の別荘たりし所なり。○犬くみ 犬食の字にして、犬を

太上天皇 上皇のことなり。又、不孝 「不興して」○井出の玉川 山城國

にありて、山吹、蛙を以て名高かりしが、今は絶えたり。古今集に「蛙なく井出の山吹ちりにけり花の盛にあはましもの」○五間五對 一間に一對、乃ち

の五間あり。○内官 京都の内なる役人を内官といひ、之に對して、地方に居る

友垣 垣は相扶持する意さも、友が君の義さもいへり。日の入る國 我國をさして日の出る國といひ、外國殊に支那をさして日の入る國

世々ふかくしげること葉の云々 言葉さいへるより繁るさいひ、通ひ路さいへる縁より、ふむさも、ゆくさもいふ。其の意は明なり。

月花のなげきのほまれ 歌の譽さいふに同ト。歌は、月花に對して、あはれさよみ出づるものなればなり。

文字の數だに歌とのみ云々 三十一文字さへ並ぶれば、それで歌だと思ひ居りしがこの意なり。

心なき身にもこれを云々 四行の歌に心なき身にもあはれを知られけりしき立つさはの歌のなぐれ」とあるによれり。

役人を外。○天文に象り 天の三顆星に「たごりて三公をおおき、九星に「たごりて」○文字やう 文字のさ九顆をおけるが如し。

月の桂を折る 試験に及第して、博士になくわが身はふりぬ三度まで月の桂を折るさせしまに」とあり。月の桂さは、月中に丈五自ほどの桂の樹あり、

公文式 公式令の初に詔書。○心の花も 心に卑心もさい。○水脈 舟の行くべき水筋をいふ。ふに同ト。○水脈 舟の行くべき水筋をいふ。

比良の大わざ 近江八景の一に、比良の暮雪あり。大わざは、大曲にして、水乃ち、大海さいふに同ト。

木高かる瑞枝 木高くある眞青にみづくしき枝をいふ。

水分の岩が根 山口の花さいひたるより、山口は、吉野山の麓なる地名にして、山口神社あり。水分は、

五つの車牛はあへげど云々 五車に積み餘るぼさ多しとの意なり。莊子に「惠施多方其書五車」とあり、「むなぎにみち牛も云々」の所を参照せよ。

中ごろ是をとくとせしものも 源の和點を加へしものを古點さいひ、藤原高経及び基俊等も、さりとくに加點したるものを次點さいひ、仙覺律師の點を加へたるものを新點さいふ。

元の僧なにがしの 一山一寺さいふ僧なり。この僧、妙覺菴の菴主頼賢の碑を書きてこの島にあり。○五大堂 觀瀾亭に相對する小島なり。

木の端の様に思はるゝ 枕草紙に、「思はむ子を法師

になしたらむこそ心苦しけれ、さるはいさたのもしき
わざな、たゞきのほしのやうに思へるこそいさほしけ
れ」さあるにふれり。木
の端」は木片をいふ。

心は必事にふれて来る 孟を欲すれば、
酒を欲するが

如くに、心は、事にふれてから、そ
れに感ずて来るものだとの意なり。

孔子も時にあはず 史記に、「孔子千七七十
餘君二無所遇」さある

へり。○天地の靈なり天地は云々
天地は廣大無邊にして窮なく、人は天地の性を受けて、
萬物の類長たれば、人の性、何ぞ天地と異ならんとい

へる意。○内のおとゞ 内大臣の
なり。

内のうへへ 天皇をさし
て申し奉る。

方わかちて 場所を別ち定めて、別々
に前職をつらぬるなり。

尺壁を貫ばずして云々 一尺の壁より
は、一寸の時

日一日夜一夜 終日終
夜なり。

日もえはからぬかたなるなり 氣天
の善惡をも見定め得ぬかたなるなりと、能取を
のしりたるなり。「かたぬ」は、乞見をいふ。

水底の月のうへよりこぐふねの
云々 海の底にうつれる月の上をかくこぎ行け
ば、恰も大空を行く心地とするか、されば、
この棹にふれ當るやうに思はるゝものは、月の中に生
えたりといふ、桂の木でもあらうかといふ意なり。四
陽雜俎に、「月中桂、高五百丈、下有二人、常所
之」さあり。一月の桂を折る」の所を参照せよ。

手向するところあり楫取して云
々 「手向」は、神に物を奉ることにて、陸路にても、
海路にても、道中の無事を祈るため、當時、専ら
行はれたる風なり。漕ぎ来る船路に、船人等の常に幣
を神に奉る所ありさきけば、直に、能取等に命じて、
幣を奉らしめ、海賊の難を
免れしめよと祈りたるなり。

問ををしむさの意なり。淮南子の原道訓に、「聖人不
レ貨二代之璧二而重三司之陰二時雖レ得而易レ失也」さあり。
六十日爲換 上方の代官より金を受けたり、六
十日の内に、江戸に納金する仕方
なり。幕府は時に、金匱運送の手数なく、
宿願にても、人夫驛馬の勞を免れる。

世外の奇人 世の中をばなれ。○心術 心も
たる奇人なり。

○文珠樓 大佛の前の大通にあ
りて、文珠菩薩を安置
ふ程の意なり。

○水火になれと 非常に騒動
するを形容
ばかきいふ。

○井然 正しくして亂れた
る所なきをいふ。
したるにて、みぢん。

○井然 正しくして亂れた
る所なきをいふ。
なれといふに同じ。

分野を見よ 分野は、群れ居る場所をいふ。こ
れはもと天の二十八宿によれり。
例へば、この星辰の宿りは、宋の國にあたりし
さやうに、その宿所を割りあてたるものなり。

不請の念佛 佛にまらせずして念佛すとも、佛
はうけ給はぬことなるを、たゞ、佛
に舌根をやすひて、念佛
を兩三度唱へたりさなり。

手をひでゝ寒さも知らぬ云々 泉
寒きものなるに、手をぬらしても、其の寒さも知ら
ぬ、泉といふ國に、その泉を汲むともなく、かくも空
しく、數多の日數を経ることかなと嘆きたるなり。く
むは、泉の縁よりいひたるにて、一二の兩句は、泉さ
いふないはん
が爲の序なり。

天雲のはるかなりつるかつら川
云々 天雲の如く、遙に遠く思ひたる桂川も、今は、
袖をぬらして渡ることかなと、京に歸りしを喜
びし。

○太元の法 太元帥の法さといふ。陰
曆正月八日より一週間、
天皇の阿多禰(太元帥とも)といふ神を、治部省に祭
り、天皇の衾衣を祈りし法にて、臣さしては行ふこと
能はざるこ
さなれり。

世の中にいひさゝめきつる事 周伊
と隆家との御の。○五戒 佛經の語にして、偷盜、
沙汰どもなり。邪淫、妄語、殺生、飲酒

の五つの ○五部の長なる神 「五伴結」に戒なり。同。全所
を見。○孔穎達 唐の代の人にして、學問深遠なり。太宗の命を受け、禮儀を

五經正義を撰びて其の名噴々たり。

五畫の部

平板の憾を懐かしむ 文章の無味なるをいふ。

四書 大學、中庸、論語、孟子の四書をいふ。○四表八表 四方

に同。○半空 空中をいふ。○主管者 第一の番頭をいふ。○代言人 今の辯護士に同。人に代りて訴訟などの事をいふに同。

○古事記 我が國の、最も古き國史にして、上中下三卷あり。奈良朝の時、太安履といふ人、勅命を奉りて、神代より、第三十三代の、推古天皇に至るまでの事蹟を記せり。

史類 二十一史の類をいふ。二十一史とは、史記、前漢書、後漢書、三國志、晉書、宋書、南齊書、梁書、

陳書、後魏書、北齊書、周書、隋書、南史、北史、唐書、五代史(以上十七史といふ)遼史、宋史、金史、元史をいふ。○目も遙に 見る目がはるかにいふに同。

氷柱 滴りて、垂れたる氷をいふ。○立春 陰曆の正月の節、乃ち陽曆二月三日をいふ。曆學にて、五日を一候といひ、三候を一氣といひ、二氣を一ヶ月といふ。一年、乃ち十二ヶ月には、二十四季七十二候あり。○仕を辭す 「つかへを致す」と同。全所を見るべし。

古學 古代の事を、研究する學問なり。○永ざらぬ 儻といふ字に、永の字あるを以ていふ。○史傳 史は、代々の出来事を記し、乃ち、眞字の様なり。○史傳 史は、代々の出来事を記し、乃ち、眞字の様なり。

玉 寶石なり、瑤瑤に似て、不透明に、牛乳の色を帯ぶ。○玉帶 玉を以て、飾るに玉を以てし、禮服の時に帶ぶ。

平城宮 奈良朝の時、の宮なり。○古雅 古代のもの、風雅なるものをいふ。○目あたらし 珍しき目に同。

傳は、人臣一代の經歷を記す。○未發の用 未だ、世の人に知られざる効用をいふ。○去んぬる 去るに同。

末とほりがたし 何時までも、其の命令の行はるゝこと難しき意なり。○外本内末争民施奪 「財散則人聚」の意なり。○占城 暹羅の東、安南に隣る國なり。○示顯 佛の、奇異なる靈驗の現るをいふ。○生殺を司る人 裁判官をいふ。死刑にあて、殺すも、無罪にして生かすも、只、裁判官の判決にあるを以てかくはいふ。

奴ばら 人を罵りて、いふ詞なり。○古跡舊蹤 昔、何たりて、今はすたれたる土地をいふ。○本心 眞の心、乃ち本氣なり。

玉人 玉を以て、人をいふ。○正倉院 奈良の東大寺内にありて、寶物を藏し、今は、宮内省の管理に屬す。其の藏する所、悉く、南都時代の器物にして、實に我が國の、美術工

藝の淵藪と云ふべし。○玉冠 天皇、御即位の時に、かぶり給ふ冠なり。

打鍛ふ 金鋼を、火に燒きて、よく打ち固むることをいふ。

四神相應 土地がらの、四神に適當したるをいふ。玄武(北)の四神にして、天の四方の星の象なり。其の形に似たる所あるを以て名づく。乃ち、東に水流あるを青龍といひ、南に池のあるを朱雀といひ、西に長き道あるを白虎といひ、北に丘あるを玄武といひ、之を土地の最も上等なるものとす。○矢表 矢を、金障子の如く並べて、障間なきをいふ。

平安の名にしおふ 平安といふまはしき名を、持ちて居ること

を藏し、今は、宮内省の管理に屬す。其の藏する所、悉く、南都時代の器物にして、實に我が國の、美術工

藝の淵藪と云ふべし。○玉冠 天皇、御即位の時に、かぶり給ふ冠なり。

打鍛ふ 金鋼を、火に燒きて、よく打ち固むることをいふ。

四神相應 土地がらの、四神に適當したるをいふ。玄武(北)の四神にして、天の四方の星の象なり。其の形に似たる所あるを以て名づく。乃ち、東に水流あるを青龍といひ、南に池のあるを朱雀といひ、西に長き道あるを白虎といひ、北に丘あるを玄武といひ、之を土地の最も上等なるものとす。○矢表 矢を、金障子の如く並べて、障間なきをいふ。

平安の名にしおふ 平安といふまはしき名を、持ちて居ること

な。○辻 文字の如く、道の十字字に、通居る所をいふ。

正覺坊 海に産する、最も大なる龜なり。○去來して 出入

してさ。○史乘 歴史のこと。○史籍 史乘ふに同じ。○今昔の感 今昔を、比較

トク歴史の。○目安箱 評定所の前

甲螺 頭の意、常に。○目安箱 評定所の前箱にして、人民の投書を受け、

奸を告げ、冤を訴へしむ。

矢番へむとす 矢を、月づるにあてんとするなり。

弘文院 林氏の建てた。○朱注 朱子の注を施る學校なり。

して、朱子學といふに同じ。朱子學は、宋の朱子の唱へし學問にして、専ら、理氣、心性の研究にありて、道も、

學も、皆一の性に基くせり。故に、性理學といふ。程子、亦此の學を唱へしを以て、程朱學といふ。

白面の書生 年若くして、未だ世に、徳の少き書生をいふ。

北堂 女は、陰ゆる北とす。北堂とは、他人の田を、敬うていふ事なり。

失言 いひそな。○未然に防ぐ 未だ、事起らざる前に、然るべき

手あてをするをいふ。○玉蜀黍 もろこしきび、かきび、なごいふ。○目睫 まぶたに、生えたる毛をいふ。

代官 武家の世に、幕府直轄の地方にありて、年貢、公事、人別などを、司れる官吏なり。

目がれせで 「めがれせぬ」○永らふ 永世に生きてをいふ。○玉不琢不成器 「玉不琢不成器、人不知道」と

あり。これにて、其の意明なり。○田園 我が家の田、乃ち庄。○平家蟹 長門及び四國の海に産する蟹にして、甲に、人面の形現る。世に傳ふ、平家の一門水に入り、其の怨の化して、成りたるものなり。

汀 波のうち寄する所にし。波のうち寄する所にし。波うち寄はなり。

白練に雲龍を云々 白練とは、白色の練り。雲に駕したる状を指すなり。永徳は、狩野家、五世の祖にして、初め、州信といひ、後、重信と改め、信長に仕へて、法眼に叙せられ、其の裔世に珍重せらる。

古稀の齡 七十才をいふ。杜甫の詩に「朝回日暮常行處有、人生七十古來稀」とあるより始まる。○白糝 蒸は吐き出したる沫をいふ。

立ちかへりても行き見む 再び後戻りなして、行き見む。○命名 ふまれといふことなり。

室町家 室町は、京の地名にして、足利尊氏、幕府を開きしより、義昭に至るまで、十五代二百三十五年間、幕府の所在地なりしを以て、室町家とす。足利將軍家といふに同じく金閣寺は、義満、銀閣寺は、義政の。○田畠の土貢 田畠に作りたる土物を貢するに同じ。○四の宮 御鳥羽天皇の御事

にして、高倉天皇の第四の皇子、尊成と申し奉りき。○功德 佛説の語に、乃ち、くり。○市井 町村をいふに同じ。

令義解 大寶令の意義を、解釋したる書にして、淳和天皇の朝に、清原夏野等の、撰定せし所をいふ。○加護 神佛などの、力を添へて、巨魁 賊などの、頭たる。○白鹿洞 朱氏の書院の名にして、左の掲あり。

白鹿洞書院掲示 父子有レ禮、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信

右五教之目、堯舜聖契爲司徒敬敷五教即此是也學者學此而已其所以學之之序亦有五焉、其別如左

博學之 審問之 慎思之 明辨之 篤行之

右爲レ學之序、學問思辨四者所以窮理也若夫篤行之事則自修身以至干處事接物亦各有要其別如左

言忠信 篤行 懲忿窒慾 遷善改過

ち、母方の。○古を作す業 古は本の義なり。祖父なり。我れから始めを起す意なり。

○加比丹 幕府の時、長崎に來りし和蘭船の船長をいふ。

石清水 官幣大社、男山八幡の事なり。清和天皇の御代に、僧行基の奏請により、宇佐八幡を移せし。

○司職 當路の役人なり。

四方海波穩 四方のよく治りたるをいふ。○布施 僧に施す。

○石火矢 古の戰爭に用ひたる、戒器に金品をいふ。○四府 左衛門府、右衛門府、左兵衛府、右兵衛府の四府をいふ。

札 鐵などにて作りたる、長方形の薄小板にして、之を糸にてくさり合せ、紐を作る。

平文 漆地に、模様のものなり。○册立 皇后、皇太子な

いふ。冊命を下して、○史人 文人の義にして、書立つるを以てなり。

○外山 家の前面を見向くをいふ。○外山 家の前面

目みたつる 見向くをいふ。

○玉山倒る 瀝に酔ひたるをいふ。晋の山濤が、積慶をいひて「其の酔ふや、玉山の將に、頽れんとす」

○公文 官より發する文書に。○目代 目は、守るの義にして、布達のことなり。

○本所の領 莊園の領をいふ。

白地 「あからさま」の所を見よ。

外厲しく内荏なる族のみ 顔色の外はれたる所は、けしきとして、心の内のやはらかなる人は、小人にして、君子は、色厲にして、内剛なるものなり。

白駒の隙過ぎやすく 漢書に、「劉澤謂二間如白駒之隙」○目を賤め耳を貴ぶ 漢書に、「劉澤謂二間如白駒之隙」○目を賤め耳を貴ぶ

耳に見ることを賤めて、耳にきく事を貴ぶなり。

本を本として正に歸る 本來の正しき所を本とし

て、其の正道に、歸り來ることなり。○田安の殿 田安宗武公

の所をいふ。○平且 夜の明け方なり。

白氏文集 唐の白樂天さいふ人の、文章を集めたるものなり。

北斗を支ふとも 北斗は、天の北極の方にあり。乃ち、北斗星に届く程、潭山あるともなり。

不可は一條なり 此れ、莊子の詞にして、善も、不善も、只、一つ

の心に歸するものにして、決して、二つならざることなり。○皮籠 皮にて、

はりたる箱をいふ。外を、紙にてはりたる。合利をいふ。

正木のかづら 秋に色かへぬ、蔓草なり。

北政所 攝政、關白などの要に、宣旨ありて、稱ふる稱號なり。

尼前 尼を、敬ひて、いふ詞なり。○北の陣 古、中を守るを、兵衛府の陣をいふ。○左馬頭 左馬寮の長官をいふ。

半装束の數珠 半装束の用で立ちて、數珠を持つたる人なり。○主殿司 宮中の

玉にもぬける春の柳か 僧正暹昭の歌に「あさみどりにもぬける春の柳か」あり。○主殿司 宮中の

○申文 奏文、告文などいふに同。○民政 人民の心を、安んずるための政治をいふ。

台聽 「臺聽」の所に見よ。○台徳院 徳川二代將軍秀忠公をいふ。

台鼎の高き位 「臺鼎の高き位」の所を見よ。

弗撥鬻々 甚しくさわがしきことをいふ。○民心渙散 民心

ちりはてし、朝庭 ○民の天 民の天惠を慕はぬをいふ。いふ意なり。

正税 租税の一部にして、凶荒 ○巨礮 大砲に等に備へおくものなり。いふに

同じ。礮はいしびやせて、む ○四皓 四皓の同じ。戦争に用ひし武器なり。四皓の

所に ○伎能 「官官云々」 出づ。の所を見よ。

古も今もかはらぬ世の中に心のたねを云々 歌の道のみは、古も今も變りのないものなるに、なこましくも

古今集秘訣などいふつまらない書を殘さんと思ひて、かくは獻上し奉るなり。古も今も古今集の書名をあらはし、心のたねは秘訣のこをさしていひたるにて、古今集の序に「やまこ歌は人の心をたねとして云々」さあるによりたるなり。言の葉は言葉にして歌のこをいふ。

本所の煩をとゞむ 「公家の御事を重くし云々」の所を見よ。

左遷 高き官より、卑き官に遷さるいふ。通鑑晉記に「左手足、不レ如ニ右手足ニ強左遷者下也」

さあ ○印可 成る一語の成就せるものに、免許の状を與へて、之を證明するをいふ。

生井榮井 共に、井の美稱なり。 ○正親司 宮内省のて、長官を正さいび、皇族、 ○左右京職 京都

諸王などの名籍を司れり。を、朱雀大路より、東西に分ち、東を左京、西を右京といひ、左右京職をわきて各之を管したり。其の長官を

進、次を大小關といふ。 ○本地垂迹 僧、空海、最澄など、佛法の隆盛を計らんが爲め、日本の神は、天竺の佛と、一身同體にして、天竺の佛の、日本

に神と變じて、現はれたるに過ぎざれば、天竺は、神の天地にして、日本は、佛の跡を垂れたる土地なり。こ

いふ説を成したり。これ、 ○北面武士 諸國の六位なるを、下北面。 ○奴袴 損實に

を召して、院の御所を守らするものをいふ。其の諸大夫にして、四位、五位のものを、上北面といひ、下藤

の六位なるを、下北面。 ○奴袴 損實に

左右なく 「さうなく」の所を見よ。 ○史生 昔、地方官

の六位なるを、下北面。 ○奴袴 損實に

左右なく 「さうなく」の所を見よ。 ○史生 昔、地方官

白河少將樂翁公 田安宗武の三男、松平定信の家をつぎ、後、幕府の老老となり、賢明の用あり。辭退、退隱して、樂翁と稱し、文學に長ぜしを以て、詩文を作りて、世をおくれり。 ○包容 大目に見世人稱して、白河樂翁といふ。 ○包容 大目に見又、ゆるし入る。 ○石罅 石の隙間のことなり。

田塍 田のうれの。 ○片成り 半成りといふに來たる。 ○未見の門人 まだ、一度も會ふたないふ。 ○未見の門人 まだ、一度も會ふたないふ。意にして、死後、門人の禮をさりて、其の學を修めしをいふ。

白髮の恨 遠き國に居るまに、いつか、年若いて、頭髪の白くなりて、住舞ふうらみないふ。 ○玉堂金屋 奇麗なる家をいふ。

瓦の窓繩の戸 食しき人の、住家の状をいふ。 ○石楠花 高さ六七尺の灌木にして、夏の初めに紫の花を開く、其の花、つとに似て大なり。

布衣 位もなく、官もなき人をいふ。

仙蹕 主上の御車をいふ。

仙洞 上皇の御所をいふ。

召籠 禁錮するをいふ。 ○矢間 矢を放つために、開きたる窓をいふ。

加持 眞言密符の法を以て、佛の加護を祈るをいふ。 ○仙洞 上皇の御所をいふ。菟姑射山といふより起れり。菟姑射山は、莊子に見えて、仁人の居る所とあり。乃ち、上皇の世を捨て給へるを、壽 ○仙蹕 主上の御車をいふ。

白髮の恨 遠き國に居るまに、いつか、年若いて、頭髪

瓦の窓繩の戸 食しき人の、住家の状をいふ。

石楠花 高さ六七尺の灌木にして、夏の初めに紫の花を開く、其の花、つとに似て大なり。

布衣 位もなく、官もなき人をいふ。

仙蹕 主上の御車をいふ。

仙洞 上皇の御所をいふ。

召籠 禁錮するをいふ。 ○矢間 矢を放つために、開きたる窓をいふ。

加持 眞言密符の法を以て、佛の加護を祈るをいふ。 ○仙洞 上皇の御所をいふ。菟姑射山といふより起れり。菟姑射山は、莊子に見えて、仁人の居る所とあり。乃ち、上皇の世を捨て給へるを、壽 ○仙蹕 主上の御車をいふ。

白髮の恨 遠き國に居るまに、いつか、年若いて、頭髪

瓦の窓繩の戸 食しき人の、住家の状をいふ。

石楠花 高さ六七尺の灌木にして、夏の初めに紫の花を開く、其の花、つとに似て大なり。

可恨東風一驅附大濤オイトロ 残念の、こゝに東の方より

暴風が吹き起りて、大濤のため、敵軍を一はきにはき去られたりなり。

半生威武遍西洋 「半生」は人の一代を二分して、其の前半をいふ。

乃ち、僅に前半生の威武にても、既に、西洋の各國に、普く行きわたりたりなり。

叱咤シカ 怒る状。古き史 日本書紀をいふ。

申不害 申は姓、不害は名なり。刑名の學を以て韓昭公に仕へ、十五年間意を勵まして政治を施し、國富み、兵強く、敢て韓國を窺ふものなかりき。後世支那の政治家をいふもの、必ず、指を不害に屬す。警書に「申子」といふも。

田樂 上古、農夫の耕作の勞を慰むるために奏したる一種の舞樂なりしが、鎌倉時代より室町時代にかけて、甚だ盛大となり、後に、田樂法師さて、さる舞を専門にするもの出て來りて、鼓、銅拍子の如き鳴りものもちて、拍子を取るに至り、遂に變つて、

古文辭 支那にて、唐宋以前における夏殷、

を建立せしを始めて、堀河天皇の朝に、尊勝寺、持賢門院は圓勝寺、鳥羽天皇は最勝寺、東尊勝寺、崇徳天皇は成勝寺、近衛天皇は延勝寺などを鎮りき建立せられ給へり。これ所謂六勝寺なり。

左近の櫻 紫宸殿の南庭の左右に、左近の櫻、右近の櫻あり。拾介抄に、「南殿庭櫻樹者、本是梅也、桓武天皇遷都日、所植也。而及承和年中、枯矣、仍仁明天皇被植也云云」とあり。されば、仁明天皇の御時より、櫻を植ふられしなり。

申し承りてより 費所より歌の御教訓を授かりてよりなり。

四恩 佛教に、天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩をいふ。

功名稱遂不_レ退身避位則遇_二於害 功名手柄が出来たならば、早く官を辭して身を退げざれば、遂には、他人の讒に遇ひなどして、身に危害を加へらる。○史論 歴史に關するをいふ。

冬のむろ夏の風 佛本行集經に「爾時太子漸向長成、至三年十九時、淨

周、時代の。○司馬牛は皆人云々 諺論文章をいふ。○司馬牛は皆人云々

に「司馬牛憂ひて曰く、人皆兄弟あり。我れ獨り亡し。子夏曰く、之を聞くに、死生命あり。富貴天にあり。君子は敬して失ふことなく、人さ辭にして禮有り。四海の内皆兄弟なり。君子何ぞ兄弟の無きを憂へんや」と。

冬、青樹 扇骨木ともいひ、高き二三丈の樹にして、初夏に花を開き、實を結ぶ。材は堅くして扇の要となし、新芽は赤く美しきを以て、生垣とするものあり。

玉體 天子の御身をいふ。○石突 刀のこぼりないさきを包みたる命具をいふ。○功課 考課とも書き、國司受領などの、四年間の治績を考へて、賞罰せらるることなり。

申し請くる處 申し上ぐる處をいふ。○功課 考課とも書き、國司受領などの、四年間の治績を考へて、賞罰せらるることなり。

打ちて見れば 間題をうちて問答をかり見ればなり。

代毎にうちつゞきて云々 白河天皇の朝に法勝寺

飯王爲太子三時殿、一者慶殿以懸三懸冬、第二涼殿懸三夏、其三殿懸三春秋、二時殿息こり。乃ち、釋迦來の未だ太子たりし時、

仙人に仕へし雪山の薪 仙人は、阿羅漢をいひ、雪山は、北天竺なり。○矢坪 矢を射るる處をいふ。○四大種 堅さ濕さ軟さ脆さの四つをいふ。○氷様、氷の様 上古、元日に、宮内省より

北おもての下らう 院の北面の下らうなり。

白拍子 今の藝妓の如きものなり。白きは、素の意が故なり。○外人もなき所 他人交らずに、親類のみなるに

の意。○史學 歴史の學をいふ。

玉の緒のたえもはてなでくり返

し云々

命がなくなりもせで、生きかへりては、同
この世に、氣が寒きながらも、生きなが
らへてをることかななり。「玉の緒」は命のことな
いひたるにて、この緒といふ縁より、「くりかへし」
いひたるなり。「くりかへし」は一度氣
を失ひたるに、生きかへりたるをいふ。

末末の源氏

源氏の末

玉の如く

源氏といふ義にして、○北殿 位置は、北は、春
天皇の願をいふ、日通り、南は、大
炊御門通

○白轡

轡の地金を、白みか
きにしたるをいふ。

白波

後漢書に「角餘賊、在四河
白波谷、時俗號白波賊」とあるより起れり。

田を横にうづ

時道に流ぼす田の中を
真直に横ぎるをいふ。

外記

太政官の書
記をいふ。

目角二つ切れたる

目尻と目頭とに、角
立ちたるをいふ。

辻風

つむし風ともいひ、
暴風のことあり。

目もあはず

殺られぬ
をいふ。

立ちはなれよもうき浪はかけも

せじ云々

亡夫爲家の、この世に存在せし時と同
ト世なりせば、遠く都を立ち離れて、

○白き當色

衣服
の

當色にあらすして、作法
にかなひたる色をいふ。

玉かつらの君の云々

源氏物語中なる
玉製の君の源氏

○卯杖ほかひ

卯杖は、
古陰曆

の君に、若菜まゐら
せたる事をいへり。

半挿だらひ

水を物につぐ器なれども、轉して
は、齒を染むる時に用ふる、轉して

打ち物 刀、槍、長刀

を

○打ち食はせ

矢筈の、
さなり。

古のわら屋の床の云々

三位傳雅、蓬
坂の庵なる蟬

丸の許に人をやりて、京に來りて住み給へさいひし答
に「世の中はさてもかくても過こしてむ宮もわらやも
はてしなれば」といひかへせ

○半物草 鞋
に

○今日にとぢむる 今日にて
終るなり。

目つくるふが云々 眼科醫のあ
るなり。

今ひとりの翁

この翁は、世繼の翁と對話
せし、夏山の繁樹をいふ。

母屋

殿殿の内、五間四面は本屋にして、之を母屋と
いひ、其の外一間通を廂といひ、其の外に簀

○四方拜

正月元旦寅の刻に、
天皇、天地四方山陵

を拜し、寶篋萬歳を祈らせ玉ふ大儀式な
り。今も、一月一日の未明に之を行ふ。

○申定めて

言ひきつ
てなり。

石打の征矢

鷲の尾羽の、左右の端より、一二
に當るを石打の羽といふ。其の羽

○外官

「内官」の
所を見よ、

石文ある所に至りぬ 乃ち、十國
時の時なり。

矛盾

爲すこと、前後反對に相違することにして、
俗に、後さき揃はぬといふに同じ。唯非子に、

「楚人に、盾を賣るものあり。其の盾をばあて、曰はく、
物よく、之を透すことなし。後其の人、矛を賣る、其

の矛をばあて、曰はく、物よく、これにて透らざるなし
と。或人子の矛を以て、子の盾を透さば如何云々」と

○主観物に

主観とは、前文に、中
の心とあるもの即ちこ

○目路

視線の向ふ所、乃
ち、目に見ゆる限

○白玉の五百つとどひ

き

忙裏 いそがし **○寺門** 「山門の記録」の所を見よ。

奸人 「カマシキト」の所を見よ。 **○迅雷の響** 迅雷の如き響なり。

合 すべて、物を入るべき器を、数ふるに用ふる數詞なり。「皮箱三四合」の如し。

各種高等學校 種々の高等なる、學術を教ふる學校をいふ。大學豫備校たる、高等學校をいふ。 **○成童** 十五才。 **○早打** 早馬に非ず。 **○汚穢** きたなき。 **○老者** 昔は急を報ずる。 **○有爲の器** 後に、必ずてば、老人のこころなり。 **○朴訥** すなほにして、口器重あるをいふ。 **○朴訥** 數なきかたをいふ。

行事 なすべき事。 **○至誠懇到** ま心を、十二分にいひ盡す。 **○有遠慮無近憂** 論語に、「無遠慮、有遠憂」

其の上に乗じて、 **○印本** すべて、印刷せ清き行くなり。 **同種の親、同根の愛** 同種類のもの、親り生れしもの、互に、 **○自若** 物事にあたり相愛し、相親むをいふ。 **○西山公** 黃門光胤公、老後常陸國久慈いふ。 **○西山公** 郡、西山に卜居す。故に、西山公といふ。

先立たぬ悔の八千度かなしきは 云々。これは、古今集哀傷の部に、「藤原のたけふさの時にさぶらひに遺すてよめる」 **○江南** 支那の江南あり。其の意は明なり。 **○有司擬議** 有司とは、官吏に川海をいへり。 **○旬季** 季節をいふ。 **○旬季** 季節をいふ。 **○旬季** 季節をいふ。 **○旬季** 季節をいふ。

行司 商人の組合にて、専ら、事を執る人なり。今の幹事、頭取などに同ト。

あり。この語を、轉じていひたるなり。乃ち、先々の事までも、思ひ計りて行けば、まじつまりての、心配こそはな。 **○出仕** 勤めにいふ。 **○耳順** 六十歳をいふ。論語に、「六十而耳順」とあり。 **○自ら俸ず** 自分の身「六十而耳順」とあり。 **○庄司** 庄の司事なり。 **○安閑** 事すなく、 **○至奸** 最も、わるの事を、司らしむる者の稱。 **○至奸** 最も、わるにして、庄園の主をいふ。 **○色を以てす** 顔色を見て、裁列をするをいふ。

有徳公 徳川八代將軍。 **○名利財寶** 名譽、金錢。 **○安置** 祭りする。 **○夙夜** よるひなり。 **○朱印** 或る諸侯、或る商人、或る諸國に、貿易のために行く舟に、特許を興ふる。 **○朱印** 或る諸侯、或る商人、或る諸國に、貿易のために行く舟に、特許を興ふる。 **○朱印** 或る諸侯、或る商人、或る諸國に、貿易のために行く舟に、特許を興ふる。

企圖 思ひ立つ。 **○舟筏** 舟や、筏なり。筏とは、木竹などを、運送するに別、舟を用ひず、之を互に、さし合せ、

百賣千買 賣買の最も盛なるをいふ。 **○年市** 年の暮れて、新年に、必要のもの、賣る市をいふ。

沙曇り今日より晴れて越の海の 云々。沙曇りしたる越の海も、今日からは、君の惠にばれわたりて、眺望もさつぱりとなるであらうさあり。眼の曇りを海の曇るによせてよめるなり。「みるめ」は、海松布を、見る目にかけたるなり。

名におふ 名にさへつき。 **○托鉢** 僧の鉢を人に、米、錢など乞ふをいふ。 **○自鳴鐘** 仕かけによりて、自然に鳴る時計をいふ。 **○至誠神明に通ず** ま心が、神様の心に知らるなり。 **○如才なし** 気がきいてゐる、わけ目がないなどいふに同ト。 **○色をばげしくす** 色をばげますことにして、怒りたる時の状なり。 **○守護** 源頼朝、朝廷に奏し、諸國の國司を添へて、警備の爲におかれたる職なり。

地頭

守護と共に、莊園におきたる職なり。頼朝、之を統べて、總地頭と稱せり。

仲間頭

昔、さむらひさ、このこの間に、仕へたものな、仲間といひ、其の頭を、仲間頭とせしむ。又、後世、武家にて、召し仕ひ居る、奴隸の頭をいふ。

列氏が書

列禦冠といふ人の著書なり。禦冠は、郷の人にして、屈指の哲學者なり。其の書の骨髄とする所は、虚無、實言にして、「列子」を翻せば、其の主義を明にすることを得べし。愚公の山をうつせる話など、其の實言見るべきなり。

同日の談、同日の論

同等の談、同等の論などいふに同じ。

老いさらばふ

「ないさらばふ」の所を見よ。○名主 川

自治の村

地方の力をからす、村會を開きて

好字に書き改む

んえ

自ら、村内の經濟を治むるをいふ。○迂遠にや 「あらん」といふ書き直すなり。○迂遠にや 詞を、下に加へ

名寄

名所の名目を、寄せ集めたるも

好事

或る物の一方に、深く心をよするをいふ。物ずきといふに同じ。

羊齒様に

羊齒の如くに

名だゝる

名立であるの約りたるなり。乃ち

同祖

左祖といふに同じく、同意することなり。

光景

ありさま

考古學

古の事を、きはむる學問をいふ。

地下

殿上人に對して、殿しき人

をいふ。乃ち、朝廷に仕ふるより、以下の人をいふなり。又、六位以下にして、昇殿をゆるされざる者をもいふ。○同じくは 同トことであるならば、さてものことならば、なごいふに

同。○名折 名譽のきずをいふ。○行脚 諸國をめぐり

あるきて食を乞ひ、露宿などして、修業する僧をいふ。其の状によりて、雲水ともいひ、又頭陀ともいふ。

妄語

佛經五戒の一にして、虚言することなり。○在郷 田舎といふに同じ。

先哲

先輩の哲人をいふ。智と○出離 この世を、離るるをいふ。○早成の人 少年の時、既に、大人たる人。○成敗 仕置、刑罰などいふに同じく、罪にあつることなり。又「セイハイ」を訓みて、事の成功するをいふ。○兇暴猛烈 惡慮にして、勢のほげしきをいふ。○有爲轉變 佛經の語にして、浮世の物事の、出沒變化極り。○同心 兵卒なり。○刑場 しばしなさいふ。○合歡木 ぶかふさとも、又れぶの木ともいふ。

朱陣の民、家國の米良の民

白樂天の詩に「徐州古豊縣有村曰朱陣一村惟兩姓世々爲三番烟云々」

早追

古の至急の使なり。

西方淨土

淨土は、西方にありて、かくはいふなり。「天堂淨土」の所を参照せよ。

宇治殿

太政大臣藤原頼通をいふ。

光陰箭の如く云々

黄山谷の詩に「日月過箭疾」あり。又顔氏家訓に「光陰可レ惜譬レ諸遊水」見えたるより起れり。

合符といふべし

わりふを合せた如くに、丁度合ふたといふべしなり。

寺もくろみなむ

寺もくろみて、尊く見ゆるであらうといふ意なり。

次官藤内

藤内は、儀景のことなれども、他に、藤内、平内などあれば、之を區別するために、次官藤内といひしなり。○列卒 狩獵の官は、民部大輔なればかくいふ。

を誦む。其の唱ふる所の習學は、理を究めて、之を、躬に實行するにあり。宋の末年、習學隆盛し、其の餘

波、遂に、明の王陽明に。○老子 支那宋の世の

傳ばりて愈盛大となりぬ。○老子 人にして、性

は李、名は耳、字は聃、世に、老聃といふ。清静、無

爲を以て道とし、退處、守静を以て教となし、其の所

論を記して、老子上 ○行住坐臥 おきといふ

下五千餘言を著す。○行住坐臥 おきといふ

義にて、不斷。○吉野の雪 吉野山の櫻をい

さいふに同じ。○吉野の雪 吉野山の櫻をい

雪、或は、雲にたさふ。紀元則の歌に「み吉野の山べ

にさける櫻花雪のさのみやあまたたける」又紀元之

の歌に「櫻になさきにけらしもあしび

きの山ののひよりみゆる白雲」とあり。

名行 君に忠に、親に ○尖塔 さきの尖りた

汗馬 戦場を駆け廻りて、汗ばみたる馬をいふ。史

地理に法る 謂禮に「天官は冢宰、地官は司徒、

○竹槍石礫 竹にて作りたる

○竹槍石礫 竹にて作りたる

支那古代の大金持なり、陶朱のことは、「陶朱の富」の

所を見よ。倚頓は、素と魯國の實士なりしが、富を致

すの術を、陶朱に學び、大に富を致せりといふ。故に

後世、大金持を稱するもの、皆この二人を以てせり。

出藍 荀子に、「青出れり藍而青し、藍よりあり。乃ち

て、其の師よりすぐれて、○百代の过客 し久

えらいといふ意なり。○百代の过客 し久

き間、往來して、絶え。○幻の巷 夢うつしの

さる旅人といふ意なり。○幻の巷 夢うつしの

い。○老曾の森の下草 古歌に「旅歴して

なり老曾の森の霜の下草」とありに由りしならむ。

老を養ふ古事 禮儀志に、「東漢の孝明帝、永平

老を養ふ古事 禮儀志に、「東漢の孝明帝、永平

沙干に今やなるみ瀉 「なるみ瀉」のなる

なるみ瀉の鳴をかけたなり。古歌に「遠くなり近

くなるみの瀉干鳥なく音に沙のみちひなぞ知る」とあり

なるみ瀉の鳴をかけたなり。古歌に「遠くなり近

くなるみの瀉干鳥なく音に沙のみちひなぞ知る」とあり

おて。○安危休戚 休は喜ぶべき事、戚は憂ふ

なり。○安危休戚 休は喜ぶべき事、戚は憂ふ

かに喜ぶべき時さなるか、危 ○考試 士を擧げ

く憂ふべき時さなるかなり。○考試 士を擧げ

せんとする時、行 ○艾年 五十歳な

ふ試験をいふ。○艾年 五十歳な

百練の鏡 百たびもれる如くに、よくきたひて、

行器 「ほかいの」 ○先鞭を着く 先きかけ

いふ。○地平の下 遠く海原を見渡せば、雲

丞相 秦の代にありて、今の ○出師表 軍を

時、天子に。○血迸奔湍噴紅雪 血、

急流の中にあはしつて、恰も、赤き雪を、はき

朱頓之門 金持の家といふことなり。朱頓とは、

る意に由り ○朱家の小兒 明の天子は姓を

しならん。○朱家の小兒 明の天子は姓を

は天子を指 ○地上阿鈞不相見 阿鈞は

宗帝の名なり。秀吉、我が軍の明國にまで攻め入らざ

る前に薨じたれば、終にこの世に生存して居る明の王

阿鈞と、軍陣において對面する

この出来ざりしとの意なり。

地下空唾恭獻面 恭獻とは、足利備前

寶鏡堂などを傳、後甘んじて、明王よりらひたる

名なり。乃ち、秀吉はこの世において、阿鈞に對面す

るこの出来ざりし故、死して黄泉に至りしならば、

騰満の卓風にして、我が國威を辱かしたるを以て、

そのこらしめのため、面に唾を吐き

けて、大に心を快くせんとの意なり。

地雷火 陽燄を地中に仕

○老中 徳川幕

執事第一の重臣にして五人あり、初は甲斐守といひ、

後に関老と改む、専ら禁裡、仙洞、皇族、公卿、大名

等のことを ○血路 四方残らず、敵に圍まれたる

を切りぬけて開く道

を切りぬけて開く道

を切りぬけて開く道

を切りぬけて開く道

いふ。又はかりごとの窮し、僅に活路を得るないふ。

西施愛江、嫫母棄鏡

西施は、越の女にして、古今屈指の美人なり。越王勾踐、之を吳王夫差に獻じ、夫差をして色に迷はしめて、其の國を亡したり。嫫母は、列女傳に「帝妃嫫母、貌甚醜而最賢」とあり。西施は美なるが故に江を愛し、嫫母は、醜なるが故に鏡を棄つとの意なり。江は鏡。○同穴の契り 夫婦の親しさいふ義なり。

○守本尊 身の守りとなるべき本尊にて、寺にて、主としてまつる佛像をいふ。○先達 同輩の師ともなるべき先達の人をいふ。又修験者などの山に入る時、同行のさきに立ちて、案内する人もいふ。

匡房卿の才學あらはされし云々

「宇治關白頼通公、曾て平等院を建て、總門を何れに設けんと考案しける折りしも、土御門右府師房公來られしを幸ひ、之に向ひて、平等院は東は河にして、西は後に當り、南には山あれば、北より外に總門を建つ

年々に花は相似たれど云々

唐詩選

の詩に「年々歳々花相似、歳々年々不入同」とあるに由り。○老佛 老子の佛教をいふ。○西の京 古、京都の中央を南北に通あり。それより西を、西の京といふ。其の廣さは、東四十八町、南北三十六町ありて、今は葛野郡に屬せり。色濃くよるづはもて興ずれ かつ、萬の物をもてはやし。○同じうは 同トくは、の面白がることなり。○同じうは 同トくは、音便にして、

同トくであるならば、さてもの事ならばなどいふに同ト。

地をなさむとせしかど

自分の地盤をかためんと欲

どなり。○先考 死したる父をいふ。

色を設く

繪具をつかいて、影色するこをいふ。○先妣 死したる母をいふ。○多武峰神社 藤原鎌足公を祀れる。○地子 公田を作る人の、納むる年貢の類なり。

叫喚

「大叫喚」の、公田を作る人の、納むる年貢の類なり。

西塔

比叡山三塔の一にして、横川、東塔と並び稱して三塔といふ。

如意輪堂

一に塔尾堂といひ、大和國吉野郡吉野山中にあり。

耳遠ければさしおきぬ

きかなればぬこ

○向ひの岸

佛語に、彼岸といふ語あるを、なだらかにいひたるなり、「彼岸」は不死不滅の義にして涅槃ともいふ。乃ち、佛の功徳を以て、不死の岸に到ら

朽ちたる橋に肝を消す

しむること。○朽ちたる橋に肝を消す 橋の木材くちはてし、之を渡らば落ちんこと、肝のつぶるゝ如くあるをいふ。

竹葉

酒の異名なれども、辨當といふにも用ふ。

行幸の神感も云々

叡山日吉祭禮の折り、其の神輿は、幸崎に行幸ある例なるを、大風のために、その古松倒れたれば、行幸の神感も絶えて、神の御守りのなくなれるにやあらんこと、世の人々言ひ合へり。○西河原表の門 北殿の

矢の溜らん所

矢の溜らん所、さいふに同ト。

○合はぬ敵

敵にさりて、不敵なる意なり。

伏見の里ならねども云々

古今集に

にわが世はへなむ菅原ふしみの里のあれまくもをしこあるによれり。

行ひのいとまある時

論語に、「行有餘力、則以學文」と

り。○回祿 支那にて火の神をいひ、轉じては、

名簿 ミヤコ 姓名を記すための帳面なるが、轉じては、名札

時などに、置さし

年ごとに秋にわかるといひく

て云々 毎年、秋にわかるといひ、今は大へ

人、秋に分るゝことが種々重なりて、先師眞淵

行く秋のなごりとのみやたゞに

見む云々 は、行く秋の名残をなしてみてもみでは

ない、これは全く、先師眞淵翁のむかしを忍びての事

よりして、涙のこまをいひたり。○吉上 吉祥さ

めたるを長とし、其の長をいふ

色許さる 古、禁色にて、深紅と、深紫とは、公

制なりき。乃ち、この○西の對 古、貴人の邸

正面に南に向ひて作り、其の東西、若しくは北に、對

屋を、西の對といひ、東なるを、東の對といふ。

早苗とる頃 苗代より、苗をとりて、田

宇治の里人を召して 宇治は水車の名所

水車を作るに巧

竹林院入道左大臣 西園寺公顯

好事を行じて前程を云々 清獻公の

にして、一行好事、莫問前程こそあり。意は、我が身

れさなり。○因果の理 因は因縁にして、果は

は種々なり、果報は實なる。一大藏經の中、皆

早歌 小歌、端歌の類の

衣冠布衣なるべきは云々 衣冠は、公

にして、束帯のこまなり。布衣は、狩衣のこまにして、

る時なれば、これらを用ひるものなく、

西行がむかしも思ひいでられ 西

物語に、遠江國天の中川(天龍川のこまなり)のわたり

に、人多くのりて舟危くありければ、あの法師おりに

めさまして有りけるに、情けなくも、むちもて西行を

ども、西行すこしもうちみたるけしきなくして、手を

更途の方にもならはず 更務の道にて、

任國に赴くことも絶えて云々 時當

地方の政は任國の輩、乃ち、土着の地役人輩の沙汰に

き。○衣笥の折立 衣笥は衣類を入れおく箱

舟岡の子の日 舟岡は、山城國愛宕郡にある

安樂壽院 京都紀伊郡竹田村にありて、もろ島羽

り。○衣笠にては死せず 衣笠は、衣、

此の定ならば なんなこま

宇麻志麻見命

可美眞手尊、又、宇麻志摩治命ともいふ。

宇治左府

頼長をいふ。○全門

藤門といふに同く、入道のこ

り。○有天下而不與

論語に、「子曰、雖有天下而不與、其

天下「也而不與」とあり。乃ち、只人民の安寧を欲するのみにて、敢て、其の天下を有らして、位にあるを樂むにはあらず。○地さへさく

○西の湖

支那にありて勝地に富み、西湖をいふ。○任ずる者をば云々

○任ずる者をば云々

其の職に任ずる者をいふ。

○枋

今いふ天びんぼうのことなり。地方によりては、今猶ほ、おこいへり。

寺々のそや

寺々の僧のする初夜の勤行をいふ。

竹の實をはむ鳥

風鳥なり。風鳥は、竹の實ならざれば食まずことなり。

竹の水門

陸奥國に、竹瀝、竹の油ありて、竹の水門は、この瀝油なるべしとて、而して山の邊なるべしと云ふ。○竹の園生

○竹の園生

親王をいふ、漢の文帝の子梁孝王、竹園に住みしよりかくいふ。○名聞ぐるしく

○名聞ぐるしく

「名聞」は、世の聞え、乃ち名譽なり。名譽のたゞにするが、見苦しきなり。

式部卿の御子

葛原親王のことなり。

色を盡したるも

盛り過ぎて、散り残れる紅葉の色、いよいよ濃きことなり。

○地下の人産業を失ふ

地下の人の産業をいふ。

○多寶塔

多寶如来をまつる塔なればいふ。

○合版

色によりて、幾度も刷る版をいふ。

妄心の至りてくるはせるか

忘心の佛道をいふ。

修する心を狂亂せしむるわざ、自ら、其の心を責めたるなり。

守の館にてあるじし云々

新任の國司の館にありて、もてなし馳走して、のしりさわざ、從者ども數多に、物與へたりことなり。

池と名ある所より鯉はなくて云々

長岡郡の十市村の池といふ所より、魚をもちひし、池といふからには、鯉はあるべきやう思はるれど、それはなくて、鯉以下の魚どもをおこせたりとの意なり。

行く人もとまるとも袖の云々

別れて行く人も、共に別をなしてみても、泣く涙の多く川の如く出て、この邊に居る人々は、皆涙にぬれ優

七畫の部

吳越の思をなす

「勾踐の耻を忘る」の所を見よ。

るその意なり。涙の多く出づるを、川にたとへ、其の縁より、流さぬいひなしたるなり。

舟君せちみす

「舟君」は紀氏自らのことなり。十日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、三十日を六齋日とて、精進潔斎するをいふ。

米をとりかけておちられぬ

調を米にこり

池めいてくほまり水づける所あり

元ありし池はあせて、只、池のさましてくほまり、水づけるばかりなりとの意なり。

丞相

支那にて、執政の大臣をいふ。「宰相」に同す。全所を見よ。

別當

檢非違使、禮人所、院寮、淳和院、興學院、大猷所などの長官をいふ。又、神祇の異名に用

弟猾、弟穢城「兄猾、兄穢城」

○言あげ特別に、さりたて見よ。

沙汰評判、うはさ、たより、お ○孝悌親に

芝罘支那山東省の、貿易港なり。

采地采邑に同じく、古、武士の領せし地所を

○邦家の典型日本國の昔より定りたふ。

身まかる死ぬるこ ○壯り壯年者ないふ。乃ち、元氣の最

○厄弱かよわきこ ○兵火戦争の

孝子之情有終身喪行孝

○志願の臍をぞかたむ堅く志を立つるを

○狂妄きちがひトみた ○志「十志」の所に

良師友師と仰ぎ、友と頼む

君子安而不忘危易に「君子安而不忘危、治而不忘亂、是以身安而

位は期せざれども驕る位高き人は、驕る了見はもた

見識事の心を知り得て、立つる見込ないふ。

男山京都なる男山 ○壯麗廣大にして、且つ美麗なるないふ。

我を汚す收賂の汚名を得させて、名譽を汚すといふ意なり。

私善を惡とし、惡を善とするか如きないふ。

君を知る君の性質を知るなり。

君子は屋漏にも耻ぢず時變より出でたる語にして

屋漏家は家の四面の隅、のうち、我が國のなんどの如き所ないふ。意は、君子たるものは、屋漏の如き所に居ても、人に見られて、耻づかしきみだりの行をしてぬらぬといふなり。

○兵燹兵火に ○形見「かたみ」の所を見よ。

近郊近きあたりの ○見そなはず「みそなはず」

○序順序

見る所をいやしむ朝夕、目に見て居る所は、たさひ、名所遺跡

赤褐赤みを帯びたる茶色なり。

町奉行徳川時代に、市中の戸籍、訴訟など、一切を司る職なり。典力、同心、之に屬したり。

却説それはさてお ○抄録ぬきがきなり。

扶持せしむふち米を興へて、養はしむるないふ。

忍岡今の上野公園 ○抗顔坐食抗顔は、厚顔

攻究せしむ深く究めしむるなり。 ○別業別荘に

○君子すべて、學問や、徳など

邦國の體格國を作る所の骨組み、乃ち、心算といふ意なり。

坐右坐側といふに同じく、常 ○告文天皇陛下の居場所の側ないふ。

夷蕃番夷といふに同じく、 ○折敷へぎの四角

○呂宋南洋諸島中 ○杣人材木をさる

○希有まれにあること

○社頭神社のめ

位山のぼるもくるし老の身は云

々

表面の意は明なり。裏面には、かやうに年若いて、高位高官を賜はるは、其の鴻恩の万分の一にだに、報ゆること能はずして、實に、心苦しければ無位無官の人となりて、世をおくるころ、安氣でよろしいかな。位山は、飛彈國にありて、笏を製する、水松を産するを以て名あり。

君問は、見ずばしらじとこたへ

まし云々

天の橋立のけしきは、どうだぞ、君の御たづねがあらうならば、どう御返答

申し上げませう、見たことのないならば、知りませんと申しませうけれども、かく、實見した以上は、知り

ませんと申し上げるわけにも参らず、さりさて、この天の橋立は、形容すべき詞のなきほど、結構の眺望で

ありさい。○兵革 戦争のこと。○伽藍 寺のこと。ふ意なり。

○杜鵑花 きりしまに似たり。な。○杜鵑花

忌はしき 「いまはしき」○見は 見識は。の所に出づ。○見は

社倉 凶年のそなへのため、一村共同して、毎年穀物を貯へおく倉をいふ

社中 組合の中。○妙齡 若き年ば。間をいふ。○妙齡

足代 足が、り、あしは、などいふに同。○足代

役にさゝれて 役目に、さしあてられてなり。○役にさゝれて

玄孫 ひこ孫、やしや孫。○兵杖 兵器といふに、なごいふに同。○兵杖

○角木 矢のたぐ、名なり。○角木

別るとも何か歎かむ君すまで云々 故郷といふものは、元來、こひしきものなれども、今は、主上も、此所に御在しませすて、ものうき都となりければ、たさひ、只今、立ち別れて、他に行くことも、左程、歎かしいこともなしといふ意なり。

投化 歸化といふに同。く、外國なる國籍を轉して、我が國籍に、編入せらるるをいふ。○投化

妖氣 世の中の、悪しき氣にして、服從せざる凶賊どもに譬ふ。○妖氣

妍哉 喜の喜。切なることなり。あ。○没收 罪により。其の財を没するをいふ。○没收

吹廳 披露といふに同。○吹廳

○里正 名主と同。細川幽齋の。○里正

吾無長人者、唯恭默思道而已 吾無長人者、唯恭默思道而已

○吻合 符合といふに同。く、なり。○吻合

○見參の板 鳴板ともいひて清。思ふといふ意なり。○見參の板

我れはがほ 白まんが。ほなり。○我れはがほ

吹く風も鳴さぬ 世の中のよく治りたるをいふ。○吹く風も鳴さぬ

○近衛 左近衛、右近衛の兩府ありて、大將、中將、少將、將監、將曹の官あり。○近衛

○防人 上古、太宰府におか、居て、之を警備す。○防人

材 事に當る心の、機轉をいふ。○材

玄旨法印 細川幽齋の。○玄旨法印

○吻合 符合といふに同。く、なり。○吻合

○見參の板 鳴板ともいひて清。思ふといふ意なり。○見參の板

我れはがほ 白まんが。ほなり。○我れはがほ

吹く風も鳴さぬ 世の中のよく治りたるをいふ。○吹く風も鳴さぬ

○近衛 左近衛、右近衛の兩府ありて、大將、中將、少將、將監、將曹の官あり。○近衛

○防人 上古、太宰府におか、居て、之を警備す。○防人

○更たくるまで 夜ふくまで。らるゝないふ。○更たくるまで

○似氣なし 「にげなし」の所を見よ。○似氣なし

足をそらにす 心のうきたつをいふ。又、飛ぶが如くといふに同。○足をそらにす

作金 作り刀といふに同。○作金

見し人のかたしるならば身にそへて云々 大君の形しるであるならば、身にそへて、戀しき

添へて、戀しき折々のなでもものにして、災をほらふが如くに、戀しき心をほらはんといふ意なり。かたしる

さは、形代の體にして、人形を紙にて切りのき、それにて身をなで、身にありさいふ災難をこれにうつし

身の代りに、水に流し、以て、災をほらふといふ。潮々さは、時々、折々なごいふ意なり。この歌は、蕭の

君の作 ○尾籠 痴の當字にして、失敬、なり。○尾籠

貝桶 貝合に用ふる、貝。○坊 僧の居所をいふ。○貝桶

軍國中より擄はれ、三年毎に交代。○巫峽 夔州にありて、正、佑、令史の官あり。吹雪 風雪をいふ。吹雪 夔州にありて、正、佑、令史の官あり。吹雪 夔州にありて、正、佑、令史の官あり。

身に反して 如く塗うて、後にそりたるもの。○冷眼を以て 不熱心の見識を以てなり。

言語は君子の樞機なり 併し易經の語なり。「言行君子之樞機、辯機之發榮辱之主也」とありて、言、語、言、行、さ、は、れ、り。乃ち、君子は、盛衰あるの人にして、樞機は、大切なる器機といふ意なり。

芝居して見物す 芝生に居て、見物するなり。

杜撰 研究の行届かぬより、著述などに、由緒もなきことな、妄りに書きちらすをいふ。

志士不忘在溝壑 勇士不忘喪其元 孟子より出でたり。意は、志の正しき士は、又溝壑に餓死するを知りても、志を枉げず、又

勇士は、首を切らるゝを知らず。○東帶 昔、正服なりても、志を枉げぬことなり。○吳子 吳起の著。魏に仕へ、楚に仕へ、効績多かりしが、終に、終

○見參 面會、拜謁などいふに同し。又、面會、節會、或は宴會などに、伺ひたる人の名を記して、其の主人公に出す名刺をいふ。

○足白の太刀 太刀の鞘に、白く塗るる太刀をいふ。二つあり、この銀を、銀にて作りたる太刀をいふ。

言靈のさきはふ國 我が、日本帝國の稱に、自由自在に、變化するの靈妙あるより、かくは、古より言ひ來れり。

杜が詩 杜甫の詩をいふ。杜甫は、字を子美といひ、唐の肅宗に仕へ、律詩を以て著れたり。

求塚 振津國免原郡葦屋里にあり。始は「なごめ塚」といひしも、後に「求塚」と呼ぶに至れり。今

肝魂も身に添はず 添はぬにて、生氣のなきをいふ。○坂東 近江國の彦坂より、東の國をいふ。又、坂東八國などいふ時は關東八國に同し、相模、武藏、安房、上野、下野をいふ。

戒を授く 始めて、佛門に入るものに、戒を授くることにて、戒とは、人を戒めて、不善をさせ、善に導くことなり。○足鼎 足のある鼎をいふ。鼎をさけ、善に導くことなり。

○抄物 めきぎしたるものなり。角直さむとて其の牛殺す 角の曲れらるるをいふ。

吳の舞ひめ、高麗のわざをき 吳も、高麗も、昔、舞技にすぐれたる國なり。故に、かくは形容して用ひたるなり。

住よしの神もうれしとおもふら

其の事實の概要を言はんに、昔、振津國に、一人の女ありしが、之を望むもの二人あり。一人は、同國の産にして、一人は、和泉國の生れなり。女は、志の優りたる方に、從はんことを、其の志、同トかりければ如何せんと思ひたり。女の親、一計を案し出し、此の生川に水鳥あり、これを射給はんかたに、女を娶はせ申さんと言ひければ、二人の男は喜びて、一人は頭を射、一人は尾の方を射たりぬ。こゝにおいて、女は、思ひ煩ひ、すみわびわが身なげてむ津の國の生田の川は名のみなりけり」といふ歌をよみて、水に入りぬ。このさわざに、二人の男も、同所に入りて死にけり。三人の親共、なげきて、同所に、女を中に、二人の男を、左右に葬りぬ。世の人、之を哀に思ひ、この墓を、「なごめ塚」といひ傳へたりといふ。

改元 昔、天皇の代がほりの時、元年を改まりたることなへなり。年號を改むといふに同ト、而して、當時の年號は、吉凶ある毎に之を改めたり。

位記を遊ばして 位記を、お授けになつてなり。

見臺の秩 見臺は、書物をのせて見る臺にして、秩は、書物入れなり。

む云々

住吉の明神も、かく、位を譲りて、安き身となりて、參詣すれば、定めて、およろこ

びになるであらうとなり。○むなしき船は、船の無事なるに、帝位を譲り玉へるをわたり。

佛師

佛像を作る人。○吳竹 「河竹吳竹」の所に出づ。

宏雄偉大

大にして、すぐれたることなり。○壯俊 わかものさい

ふに。○良辰 よき日さい。○良從 郎等に同じ。

○即位 「踐祚」の所を見よ。○車副 添

「家子郎等」の所を見よ。○車副 添

采女

「うれめ」の所を見よ。○夾纈 今いふ板下

村滋籐

弓は、梓、檀の丸木にて作りたるものなるきて、之を製するに至りたり。其の籐の、方の、紫く

登きたるを、滋籐といひ、五所、或は七所なるを、村

滋籐といふ。○祀典 神に關することを、記せる記録をいふ。

更

一夜を五つに分けて、其の一つを更といふ。乃ち、初更は戌の時、今の午後八時にして、二更は亥、

乃ち午前二時、三更は子、乃ち十二時、四更は丑、

志節

志と、其の守る所。○社會 多數の人のみさをなすをいふ。

○空湧 わき出づるなり。

技 堪へず まらぬをいふ。

我が武維揚り 我が帝國の武威の、盛に、諸國

刪潤 けづるべき所は、之を削ぐり、或むべき所は、之を改むるをいふ。

吳天 遠き國の。○祁寒 大寒さいふに同じ。

汪洋 廣大なる。状態をいふ。

何時か吾がみのをばりなる みのをばりに

は、「身の終り」と、「美」○良死を得ず 尋常に尋常

伽陀梵唄

共に佛語にして、伽陀は、韻語を譯し、前の行長の文を頌せず、偈のみを唱

ふることに、長歌に應ずる反歌の如きものなり。梵唄は、聲明のことに、偈頌を節つけ、詩を吟する如

くして、管絃に。○李斯 楚の人にして、郡吏よ

合するをいふ。○李斯 楚の人にして、郡吏よ

補けて、其の宰相となり、暴戾なる政を行ひて、書

を燒き、儒者を坑にしたりしが、後、咸陽の市に斬

られ。○車かゝり箕の手 共に、兵學上陣

君子といふは信もてなす云々 靈術

公簡に、「君子義以爲質、禮以行レ之、○宋元 共

孫以出レ之、信以成レ之君子哉」とあり。支那の朝廷の號にして、唐朝につけるを

宋朝といひ、宋朝につけるを元朝といふ。

私の腹 私事を以て公事。○坊 皇太子のまじ

しが、轉じては、皇太子を。○里内裏 古、皇居

さし奉りていふに至れり。○里内裏 古、皇居

に、一時住はせ給ふ御所をいふ。

杜絶

杜は塞と向しく、やめることなり。○孜々 勉強する

肝煎りて

世話をやくことなり。

別格官幣社

通例の格式外なる、官幣社をいふ。官幣社とは、新年祭、月次祭、新嘗

祭などに、宮内省より幣帛を捧げらるゝ神社をいふ。○折戸 ここの出来

たるやう、作り。○佐野のわたりの云々

毎日髻をと

自ら、死刑の覺悟をするなり。昔、斬罪として、死刑にあつる時

は、水髪とて、油の類を用ひずして、髪をあぐるの例なりき。

我が御ぞうのみ云々 「ぞう」は、たくの音便にして一族をいふ。乃ち、我が藤原の一族のみ、攝政關白となりて、天皇の御後見となり、世の動かぬやうにためめとなりて、守護するの意なり。

君子は言に訥にして云々 君子とは、徳の盛なる人にして、訥とは、言語の少きをいふ。乃ち、君子は、其の言ふ所ば、成丈少くして、身の行ひの方をすばやくなし、其の行ひが、其の言ふ所に及ばぬやうのことなきを、專一とするといふ意なり。論語より出でたり。○住人 其の地に住める家族をいふ。

狂言綺語 狂言とは演劇の仕組をいひ、綺語とは小説のこまをいふ。

折角の合戦 骨をりて一生懸命に、す大事の戦争をいふ。

似も似ぬ 全く似つゝ、似ないふ。 ○廷尉 支那にて、檢非違使のこと。

○尾花の白露今か云々 尾花における

白露の如く、今に消えて仕舞はんとする心持ちのするをいふ。「尾花」は、すいきの花なり。

足弱車 輪のひ弱くして、速に進むことの出来ぬ車をいふ。

初國しろしめす 古事記傳に、「初といふ言に保けたるは如何といふに、まづ國をしろしめす限りの地をいふ名にて、食國といへり。然るに天下悉くは、この御世に至りて、初めて、現しく食國となれる意にて、今の食國を指して、初國といふなり。乃ち、初めて、食國となれる國といはむが如し」とあり。

見じといふ人こそうけれ云々 家管

志學の年 十五歳をいふ。論語に、「吾志學にして、十有五而志于學」とあり。

妙音院 信西入道の息、師長。カヘリ ○返忠 舊主に新主に忠義。カヘリ ○伶人 樂人といふに同じく、音楽を奏する人なり。

別るれどあひも思はぬみよし野の云々 かやうに別れてかへれども、後に心残りがありその意にて、折りふし、山の端近く見えていへるなり。

住みなれぬ板屋の軒のむらしぐれ云々 住みなれぬ、かやうのむらびしき板屋に住ひなれば、軒端にむらびしきまばらなる時雨の音をきいてさへ、はや涙にそではしほらむが、この上時雨にぬれたならば、それほどであらうといふ意なり。

吶喊をどつとつくる 一同に、どつと大聲を發するをいふ。

攻具足 攻道具といふ。○庭弱 柔弱といふに同じ。

究竟の兵 最もすぐれたる兵をいふ。

坂東武者のならひ 大友家持の歌に、「鳥が鳴く吾妻のこは出でむかひかへりみせずて勇みたる猛き軍さげ給ひ」などありて、昔より、勇壯なる、狀に稱せり。「坂東」は

○采菊東籬の下云々 「吾妻」といふに同じ。全所を見よ。陶淵明の詩の中句より出でたり。其の三飲酒の詩に、「結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏、采菊東籬下、悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相與還、此間有真意、欲辨已忘言」とあり。

折鳥帽子引立て 昔をぬぎて、鳥帽子のたゝまりを引きて直したるなり。

見ののみや云々 古今集に「見ののみや人に語らん櫻花手毎にたりて家づかにせ。○社日 春分、秋分の、最も近き戌の日にして、春のを春社、秋のを秋社

○里よりもて来て 里は、禁中に對して、自宅をいふ。 ○庇 廂とも書く。「母屋」の所を見よ。

足を空にまどふ せはしく、足の地につかず走りあるく體なり。

作善 願文の中に、或は經文を書寫せしむか、或は、佛像を供養せしむか、善事を作し事を書きつらぬることにて、○貝をおほふ 貝合せのこま

なり、貝合せとは、蛤の貝から三百六十個をそろへ、更
其の一を地貝と名づけて残しおき、其の餘を並べ、更
に一個を撰びて出貝となし、それを中におきて、地貝
と出貝とに、よく合ふものを選びて、合はせ取る遊び
なり。○佛には人のなりたるなり

佛は釋迦をいふ。釋迦は、天然の淨飯王の王子にして、
悉達太子といひけるが、十九歳にして出家し、檀特山
に登りて、阿羅々々、阿羅々々の仙人に
數を乞ひ、三十歳にして成道せり。

君をこそ朝日とたのめふるさと

に云々 お前ばつかりを、朝日の如く頼みにしてな
るから、この里にのこしおく子供を、霜の

如きものにあてゝからすことなきやうに頼むとの意
なり。「なでしこ」は爲相、爲守を、撫子の花にたとへ、
その縁より霜といひかけ、朝日は、霜をけす
もの故、「朝日とたのめ」の上におきたるなり。

見し世こそ變らざるらめ暮れば

て云々 既に、今年のそらは、春もくればはてし、
夏の始めとなりけるが、その時節の

はり行く空のけしきや、花の散りばてて青葉さかほる
木々の有様など、去年、わが、京都にて見し状さ、別
に異りたる所もなからんが、其の野山のけしきを、君は
相かはらずに見玉ふことならん。さても羨しきことな
るかの。○社壇を焼き拂ふ 岩清水八幡
宮をやきは

貝鐘の音も聞えぬ所 貝も鐘も、皆時を
報ずるの具にし

て、寺のものなれば、こゝは、名寺大刹なき意にいへ
り。夫木集に「雲井寺ふく貝きけばかけるなるかりが
日」にこそ夜はなりにけり。又、拾玉集に「松をばらふ
野寺の夏の夕風に鐘の音さへ秋の聲なる」などあり。

見參に入れ給へ よきやうに、御前に申し
入れて下さいとの意なり。

狂言して打連れ云々 狂言は、戲言
のことなり。

沙門 梵語にして、沙迦摩那の約せられたる。
なり。善を勤め、惡を息むる人といふ。

村上の例により 村上帝は、天慶六年十二月
八日、太宰帥に任せられ

全七年四月廿二日、皇 左大辨
太子に立ち玉へり。 ○何がしの辨 左大辨
藤原長

方 ヒヤウヤウ
を、護衛の武器なり。隨身之
いふ。 ○兵仗 護衛の武器なり。隨身之
を持ちて、隨衛するなり。

抑肝補肝云々 抑肝劑を用ひて瘧疾を抑へ、補
肝劑を用ひて、其の足らざる所

を補ひ平癒に至 を補ひ平癒に至
らしむればなり。 ○何がし上人 覺鑊のこま
にして、鳥

羽上皇の頃 「さほ姫」の
所を見よ。 ○佐保姫 「さほ姫」の
所を見よ。

言のまゝのやしろ 遠江國周智郡一宮村、
事任社をさしていへる

言 コトアツク
なり。 ○言擧 さりとて、詞に
言ひ出すをいふ。

言を立て 思ふ所をいひ立
つることなり。

近きやからのほどにて 近親の間から
にてさいふ意

り。○求むるはしに 求むるう
ちになり。

更にく 決してく
いふに同じ。

我が佛の冥福 自分の道なれば、我が
さいふ詞を添へたり。

狐の疑をむすぶ 疑の生ずて決し難きを狐
疑といふ。狐は、道を行

くにも左右を顧み、其の疑念甚だ深きものなれ
ばなり。楚辭に「心猶豫して狐疑す」とあり。

狐かくをきたる人 「狐かくは」、富者の着
る服をいふ。論語に「
子日、衣三敝、與衣三狐貉、者上可而
不耻者、其由也與」さあるにみれり。

沖つ波たつの都 波の立つに、龍をいびか
けたるにて、龍宮のこと

り。○足鼎 足の三本あ
る鼎なり。

青馬を御らんじき 左右の馬寮より、白馬
二十一匹をひきわたす
をこらんじき

我が誠は言はで、只時に云々 何事
にも

自分の本心はいはで、其の場合に應じ、其の人の氣に
あふやうに、人がよいといへば、實際わるい事でも

はいよろしうござると、御座なりのいゝことをいふさふり。

束脩 入門の時、持ち行く金ないふ。

芋も海帶もばがためもなし云々

共に、元旦の祝の式に用ふるものなり。國では、紀氏の乗れる船中の事をおどけていへるなり。

男もじにさまをかきいだす この歌を漢文

に書き直すをいふ。當時の風、假名文は女の用ふべきものとし、男子に漢文を以て、總べてを物すべきものとせり。故に、かくは男文字としたるなり。冒頭に、なごこのすといふ日記といふ物を云々あるも、この風よりかくは書けるなり。當時の日記は、皆漢文にて記されたるな、紀氏自らは、女子を鏡ひて、自分を自分とせず、徹頭徹尾、女の體度なり。

何とにはなけれど物いふやう云々 何それと、ことを設けて、わざ／＼いひたるにはなけれど、何とぞ、何とぞのこゝとして、は、綾あるこ

さにて、一寸、面白しと、耳ごまりがしたとの意なり。

君戀ひて世をふる 君は推翁親王をいふ。

見し人を松の千年に云々 過ぎ去しり女兒の

跡を、この松の千歳経し如く見ることを得しならば、かく、遠く戀しく別るゝやうの事は、なからんものを、松を見るにつけて、亡兒の事を思ひ出して嘆きしなり。

見る人もなくて散りぬるおく山の云々 誰も見人もなき奥山に、咲きちる紅葉は、實に、夜中錦を着て行くと同しく、何

の咲き甲斐もないものだとの意なり。「夜の錦」は、支那の朱買臣といふ人の言に「密費にして故郷に歸らざるは、錦衣を着て、夜行するが如し」といへるより起れり。

伯夷叔齊 「首陽山」の所を見よ。

沈の懸盤 沈といふ木にて作りたる、かけこある膳なり。

八畫の部

兩句三年得、一吟双淚流 僅々兩句を作るに、三年といふ長日月を費し、故、其の七作なること、一度誦すれば、兩眼より涙を流して、感ずるやうにありさなり。

卒都婆も苔むし、木の葉もふり埋みて、嵐のことゝふも、月の宿か

めむ。 この句、徒然草の「卒都婆も苔むし、木の葉もふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ」ことさふよすがなりけることあるを引けるなり。卒都婆は、梵語なり。高く顯るゝ義にして、墳などい譯す。佛は、高く顯れたるものを、好むといふ義よりして、木、又は、石を以て、地水火風空の、五層に重りたる、高き物を、佛に供するとして、建つるものないふ。月の宿かるとは、月の墓を照すないふ。

板本 板木にて、印刷したる本をいふ。印本といふに同じ。

抹金鏤 今の、高藤繪の如きものなり。○**門田** 門外にある

空しく過ぎなむ 名所のあるをも知らず、行き過るであらうといふこと

○**金壁** きれいなる。○**延喜式** 公私

の譜式を記し。○**知行** 古、武士の領地の稱なり。今の月給と同しき性質なり。○**知行** 知ること勉むること、行

所行 行ひ、しわざ、ふるまひ、などいふに同じ。

沈澱せしむ 水の底に、しづ。○**沈痛** ひど

たはしき。○**長物** よけいなものをいふ。

卵巢にはあらざるか

卵巢とは、子宮の
兩側において、胎

卵のある所なるが、こゝは、包容するものを以て、包容
せらるゝ物の、名に代へたるにて、種子といふに同じ。

怯弱

つたなくかよ

○東雲

あけぼの、曉天、
などいふに同じ。

○具して

引きつれ
かたなり。

岩の皴

岩のひだ

○知食

しろすといふ、固を
延ばしたるにて、天

○花廻り

花を見物して
廻ることなり。

享年

生きながらへて

○念々

思ひ思
ふなり。

忠義の狗となるとも亂離の人と

はならじ

忠義の爲めには、たさひおちぶれて、
犬の如く、人に食をこふに至ることも、

不忠をなして、身の榮を求むるが如
き、人さばなるまいといふ意なり。

宗とす

主とすに同じく、お

○昇平

よく、世
の中

○附庸偏小の球人

屬國たる、
一小國の球

○阿る

おべつかをする
ことなり。

明教

よき教へ

○伶俐

小ざかし
きをいふ。

花桶は名にこそ負へれ

花桶の香は、昔
の人の袖の香

がして、昔を忍ぶといふ、評判はたちてあれどなり。
古今集に「五月まつ花桶の香をかげば昔の人の袖の香
がする」○花刺散の原野 中央亞細亞に
あり。

往くとして學ならざることなく

往く先き目にふるものい、何一つさし
て、學問の種ならぬはなしといふ意なり。

性と用と

性質と、用

○表彰

世の中の人
に、知らる

○吟味

よく検査す
ることなり。

○面々

各々
かた

事かけず

何事にも、不足がな

其名にかなひて

其の名に適
當してなり。

青によし

奈良といふ詞の、枕詞なるをさして、
やがて、菓子の名さしたるなり。包紙

京坊

京のま

○京城勝覽序

京都の名所
を見物し

て廻るに、便利よき、俗にいふ京

○知召す

御
承

○其のかみ

「そのかみ」
の所に見ゆ。

其の所の名を得し事

此所は、何々に
りて、かやうに名

所となり、彼所は、かくくなる事からによりて、か
やうなる古跡となりたりなどの、名所遺跡となりたる

○佳境

よき所

○季世

末世といふ
に同じく、

○兩替商

貨幣、札、錢などを、さ
りかふる商賣をいふ。

金襴繪付

金糸を用ひて、花鳥襴々のも
のを、織り出したるものなり。

○放心

注意をせぬ
ことなり。

宜しきを制す

宜しき所をとりて、
規則をつくるなり。

○官庫

政府の金

○官準を請ふ

官より、
可否の判

決を請ふなり。○京都の職

所司代のことなり。所司
代は、兼中、仙洞乃ち、
上皇の御坐します所を守護し、併せて、京都百般の
事を掌る重職なり。鎌倉時代の兩六波羅におけるが如

○明障子

「あかり障子」
の所を見よ。

命をめされよ

命をさして下
されよなり。

事にふれて動く

種々の事がらにつき、心
がうごきて、一定せぬを

○所詮

理のつまる
所をいふ。

明暗を以て行を二つにす

人が見て
居るから

かして、行を正しくし、人が見て居ない
からして、行を不正にするなどないふ。

咖啡

熱帯に産する木の實なり。之をいりて粉となし、熱湯にたていのむ。

併し

しかしながらの略。○盃蘭盆 盃らんはせられたるなり。○盃蘭盆 盃らんは

解倒懸の機にして、倒さにつらさるゝ如き、苦しみの解くることなり。ほんば、物を盛るうづはなり。乃ち、陰曆七月十五日に行ふ佛事にして、この日、百味の飲食を、盆に盛りて、佛に供すれば、倒にかけるゝが如き、苦みも。○金絲雀 大西洋中の一小島に産する鳥なり。この名あり。其の形、雀より小さく、色黄なり。其の鳴聲高くして、愛らしきを以て、今は、至る所の人家に。○法度 さまざま、おきて、などいふに同し。○肯く 「うなづく」の所を見よ。

宗家

本家のこと。○肯く 「うなづく」の所を見よ。

事わざ繁し

成すべき事多きをいふ。

念慮

おもんばかりなり。又、單に心ざいふにも同し。

泥塑の人

土人形をいふ。○非事なり 道理に

金融

金銭の融通をいふ。

昔の事をしのぶ草

しのぶ草のしのぶに、昔の事を思ふのしのぶ

○非里比納

「ひりつびん」の

○使仕うまつる

使に行くことなり。

○面ぶせ

「おもてぶせ」の所を見よ。

和親

ひたしみに。○所領 領地をいふ。

○松ともして

またい

をさぼしてなり。たいまつさは、竹、或は、木をたばれて、火をさもす料にしたるものなり。

面向不背

何れより見ても正面にして、決

○侍小路

武家の住む町をいふ。

○卒去

主に、五位以上の人の死すること

○性能

心のはたらきをいふ。○青史 歴史のことなり。

○法語の言

法度正しき言をいふ。論語に、「法語之言能無從乎、改

レ之爲レ貴、無レ之言能無レ戒乎、言レ之而レ不レ改、吾未レ如レ之何也、已矣」とあり。乃ち、其の言正しからば、誰かよく従はざらむ。されども、只其の言に従ふのみにて、行ひを改めずば、何の甲斐かあらむ。また、異典の言は、謙遜していふ言也。これも亦、只改ぶのみにて、其の言の心は、如何ぞ深意を辨れずば、何の甲斐。○招牌 商家などにて、家號、變もなしことなり。○招牌 商家などにて、家號、廣告すべきことなどを記して、店頭に出しおくものなり。

青蠅なす

さわぐの枕詞にして、青蠅の如くこといふ意なり。青蠅は、五月蠅ともいふ。

○金二枚

金一枚とは、今の五月頃の、うる。七圓五十錢なり。

○阿媽港

支那香港の西南に

金銀錠

長方形の、金銀貨幣をいふ。

○金錢の賣買

兩替の如

○明朝の遺民

清朝の前を、明朝をいふ。明朝は、清朝の愛親

覺羅氏に亡されたれば、かくば遺民といふなり。

治世安民、後生善所、子孫繁昌の功德あり

現世が無事に治りて、人民が安堵し、未來には、至善の所に生れ出で、子孫

は、愈繁昌するのいさ

をいありこの意なり。

金革を祗にす

中唐より出たる器なり、金革は

の時にしく布圍をいふ。乃ち、武士の戰陣に鍔を

しきて野宿するに、熊捕の境遇をたさへたるなり。

肥富を副へて

肥富の傳記。○物具 ひと

い。○物數ならぬ 我が身を、踐しめていふ

ぬ、不肖なる、な。○事によせ ことよせに同

じいふに同じ。○阿闍梨 僧の師をいふ。ベ

きなり。○阿闍梨 僧の師をいふ。

庖厨

養所、料理場なり。○易姓革命 易姓と皇姓とをいふに同じ。

○松明 「松を燃して」の所を見よ。○秀逸 秀でた草なり。

○法印 第一等の僧位にして、僧正の官に相當す。又、俗に山伏をいふ。

怪我 失策といふ程の意なり。又、轉じては、すべて、過ちによりて、受けたる傷をいふ。

侍大將 鎌倉時代、軍時に、一軍の大將となる侍をいふ。足利の末世には、武士を率ゐるをいひた。

○宗徒 主に、類かよる人をいふ。徒は、借字なり。

所従 おつき、つきそひ、從。○夜陰 夜中に者などいふに同じ。

空前絶後 以前にもなく、又、以後にも無きをいふ。

○卓越 人に越えすぐ。又、下問に答ふる役なり。

○虎の尾をふむ 書經に「心之憂危若履虎尾」云々。虎の尾を踏むは、心之憂危若履虎尾と云々。

河竹、吳竹 河竹は、苦竹ともかき、ただけのこさなり。吳竹は、ほちくの一類にして、吳の國より渡れるを以て、この名ありと、多く庭などに植ゑ、取りて杖を作り、籠細工などに用ふ。

夜の御殿 主上の御座所にして、清涼殿内にあり。

○佩刀 「はせ」の所に見ゆ。杯盤 酒席にて、杯と、鉢、皿などいふ。

典雅 規則にかなひ上。○昌言 書經の大禹謨に「禹拜昌言」云々。昌言は、昌なりとあり。乃ち、當は、道に當れる正言にして、昌言とば盛なるよき言なり。

所化寮 所化は、佛語にして、弟子のこさなり。寮は、弟子僧の居る室をいふ。

押形 刀の模形。○東山殿 足利義政をいふ。

長田狹田 厚に、田といふに同じく、共に、天照大神の御田なり。天照大神この田を耕

花妻

波の亂るゝを、花に。○花洛 京都をさす。たさへていへるなり。

波瀾

物議起りて、互に、軋撃するをいふ。又文章の勢あるをいふ。

金胎兩部

佛敎に所謂金剛界と胎藏界とあり。

河汾水おだやかにして波を見ず 「丹地道なほくして」の所を見よ。○金色の鷗 金色にかがや云々の所を見よ。

○步靴 自ら佩ぶる金毘羅車はこれよりおこれり。

居勢祝 居勢は、今の葛上郡の古瀬村に。祝は、居りの儀ならんか。

武者振 さむらひぶりといふに同じ。○武邊 武又は、武術をいふに同じ。

武にも非ずと世に聞えつる帝 河天皇を。○東武 武蔵國をいふ。

和歌の浦に打出でし聞けば鳴き渡る云々 赤人のよみし一田子の浦に打出でし見ればましろにそふとの高ねに響はふりつゝ、和歌の浦に和歌の遺をかけていへるなり。

宗室 本家のことにして、將軍家なり。○所帯して 所帯をもちて、將軍家なり。

○物心 世情、乃ち、世の中を立つことなをいふ。

油然 油然作樂、沛然下雨とあり。雲子に「天齋戒に同じ。又、ながみなどを避くるさて、家にこもりて悔み、外に出づるには、其の方角をさく、之を○空蟬の所を見よ。

明を損するに似たり 明は、明鑿といふに同じく、目がれ

違ひを世にあらはすやうだなり。○沈痼癘疾 沈痼は、痼疾をいふに同じく、

久しく、臥せる疾をいひ。癘疾は、痼疾をいふ。○典籍 書物の

久しく、到底なほらぬ痼疾をいふ。○典籍 書物のことな

り。○知羞草 物の觸るゝ時は、直に、其の葉

忽必烈 元の太祖、成吉思汗の孫にして、世祖皇帝と稱す。

物ふりたる 物のふりたる。○物學び 學問

り。○花壇 草花を植うる爲め、高く土を盛り

物する 事をする。○侍り 貴人の側に伺をい

坯 物をもち。○疹風 わざはひ。○法語 法

の語を。○所司代 「京都の職」。○兩楹 法

對立の柱にして、乃ち、左右に住あるをいふ。

阿容々々として 阿字を重れたるにて、耻を知らず、卑法に振舞をいふ。

金馬門 城下の門。○阿字を書く 成佛せ

ためなり。阿字の出所は、「八識田中下阿字一刀生死斷

涅槃亦斷」とあるに由る。かく、阿の字をかくば、佛

に縁を結ばしめ。○叔世末運 世の末さいふに

年数を數ふる數詞なり。○長汀曲浦 濱邊

様をいふ。乃ち、長きなぎさ、曲れる浦をいふ。

拖きて褶となり屯りて峯をなす たなびきては、しほの如くに見え、集

陀羅尼 梵語にして、經文の名なり。之を

往來物の類 昔、流行したる書物の名にして、庭

帖木兒可汗 元の天子にして、順宗皇帝さいひ

券契 證書、證文なり。○沓渺たる海天 海外

がなる海。○虎ほゆる國のさかひ 國外

をいふ。○金覆輪の鞍 金にてへりをさ

芙蓉峰 富士山をいふ。富士の八峯を、蓮の八葉に

の所を參照せよ。○典故 故事に

股肱 ももさ、ひちごの義にして、最もたよりにする

如しの。○金堂 木堂のこと。

青雲還一夢 九十日間の春景色も、亦、夢の如

り。○物へなむまかりぬ ざる所に、行

なり。○芹川の御幸 芹川は、山城國葛野郡

暦十五年正月、天皇、芹川野に遊獵し給へり。後、各

仁二年に、之。○侍講 君の側に侍りて、書

林子 林家さい。○面目 世の人に、對すべき顔

金は山にすて、玉は淵になく 莊子

の篇に、「藏三金於山、不取珠於淵、不取貨財、不取近富

貴、不取樂、不取利、天、不取榮、究、不取醜、究」とあるを

引けり。強ち、富てよさいふに非れども、無用の財

を求めて、災を買ふ人の爲に、之を戒めたるなり。

受領 國司の官

命を養由が矢先にかけて、義を紀

信が忠に比すべし。養由は養由基きて、楚

衛に長し、百歩を隔て、柳の葉を射して、百發百中、

一も誤りし事なかりき。紀信は、漢の忠臣にして、

高祖の命に代りて、榮陽の圍みを出し、終に天下

を保たせたり。「高祖榮陽に圍る」の所を參照せよ。

忠仁公 藤原良房

舍人たつるおればかりのおほや

け人を 舍人位になりて居る、おまへ見たやうな、朝に仕へたる人をさいふ意なり。

舍人 「それり」の所を見よ。

物のつき給へるか 何物の、たしり給へるのさいふに同ト。

花田の單狩衣 花田は、標の字にして、露草の花を以て染むる故に此の名なり。露の濡き色をいふ。狩衣は、もこ、露狩の時の服なりしが、遂に、常服の一種さばなれり。

物ぐるほし 「ものぐるほし」の所を見よ。

使廳の使 檢非違使廳の使をいふ。檢非違使廳は非法、非違を檢査する役所にして、今日の警廳の如し。

糸竹にしもたへたるをつらぬ 糸竹は、竹の如し。しもたへたるをつらぬは、糸竹にしもたへたるをつらぬ。

は、琴、三味線などの樂器をいひ、竹とは、笛などの樂器をいふ。乃ち、糸竹とは、管弦さいふに同ト。

奉幣 神に御幣を奉るをいふ。

花のかゞみとなる水はとせられ

たり 古今集伊勢の歌に、「年をへて花の鏡なる水はちりかひるなや曇るさいふらん」とあり。この意をさりていへるなり。

佳辰 よきとき、めでたき時などいふに同ト。

忽且 その場のがれに。○長閑 「のどか」の所を見よ。

侍所 鎌倉幕府の、軍務を司りし所にして、長官を別當さいふ。

底野迦 拉丁語にして、歌にかまれたる時、毒を指す爲に、用ふる音類なり。

佛逆 心にもさり、逆。○祈年祭 陰曆二月四日に、其の

わきだにせよ」とあり。○季節 時節さいふに同ト。

歩跳 はだしにて、あ。○狗寶 垣、屏などに、ゆむをいふ。

物部 ものいふべの略にして、犬部ともかく。○押領使 追捕使に同ト、諸國の兵士をいふ。

長講堂領 長講堂は、京都五條にある寺にして、後白河天皇の建立なり。御深草上皇の頃には、寺領、百八十餘箇所ありて、代々の上皇の御用度に供たり。

金關寺 足利義滿の、建立せし禪寺にして、鹿苑寺したり。三層の閣にして、金箔を飾り、莊麗人の目を驚かす。故に、金關寺さいふ。本尊は、運慶の作れる阿彌陀。○周公 周の文王の子、武王の弟にして、名は且さいふ。禮樂、制度を作爲し、聖人と稱せらる。武王を輔けて、大業をなし、又、成王に代りて、政を攝す。

の意をさりていへるなり。

の意をさりていへるなり。

の意をさりていへるなり。

の意をさりていへるなり。

の意をさりていへるなり。

の意をさりていへるなり。

の意をさりていへるなり。

の意をさりていへるなり。

の意をさりていへるなり。

の意をさりていへるなり。

年の豊年を祈る祭なり。周禮に、「祈年豊年を求むるなり」とあり。今、伊勢宮に、年越詣さいへるありこれ、年乞祭の所を見よ。

虎てふ名のみさゝてだに 清正の幼名を、虎之助さいひしを以て、其の虎さいふ名を、さゝてさへなり。易に「風は虎に従ふ」とあり。

拂底 底を拂ひても、なしさいふ義にして、甚だ、缺乏したる體をいふ。

昆虫 蜂、蟬、蠅、蚊等の如く、三翅六足ある虫をいふ。○法師 「宣官」の所を見よ。

見。○唄づたひに歩む 唄は、山の側の嶮なるといふに同ト。○青人草 健兆の人民の、生れ出づるを、草のいや

ました、生ひ茂るにたさへていふ。乃ち、民さいふに同ト。

花の袂になり行く 墨染の衣を、わぎすてい、花やかなる衣を、替ることにて、喪のあきたるをいふ。古今集僧止遍昭の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

の歌に「みな人ははなの衣になりけり」の袂よか

明月珠

日記政事にいふ「隨侯齊國に往く途中、一蛇の砂中にあるに逢ひたり。其の頭上に、血あるを見、之を水中に放ちやりけるに、歸途、其の所を通りしに、一蛇の珠をふくみて來るに逢ふ。候、之を取らざりしが、夜、一蛇をふむと夢み、さむれば、頭上に、一の珠ありき。其の珠、光明月の如く、人呼んで、隨○征矢

古の、専ら、戰爭に用候の珠といふ。○征矢 古の、専ら、戰爭に用候の珠といふ。○花幔地を蔽ふ 幔は、幕のこと。て短ぐを。○花幔地を蔽ふ 幔は、幕のこと。常さす。○花幔地を蔽ふ 幔は、幕のこと。上より四方にかけ、疾き亂れたるを、幕に見なして、いへるなり。

杳として

はるかいふ。○沈酒 おぼれふけるるをいふ。○明經 古、我國の

卒伍

卒は、一兵卒にして、○明經 古、我國の伍は、五兵卒なり。○明經 古、我國の大學寮にて

抹茶

「碾茶に同じ。○沈々 おも／＼し。全所を見よ。○沈々 おも／＼し。

長坂の橋

南陽の當陽縣にあり。○面はゆく 「お

松風の音

松吹く風の、琴の音に似たるを以ていふ。

非重代

譜代ならざるものなをいふ。○牧 國司の如き役なり。

坦夷

平らいなるをいふ。

物あれば必ず則あり

一の物體があれば、必ず、其の

金門

大陽の昇る出口の、金のやうに、光るをいふ。

金碧燦爛

金色や、みどり色などの、きら／＼と光るをいふ。

空譚雜話

譯は、談に同じく、無益なる、世間話をいふ。

岳武穆

支那、南宋の世の人にして、金を破りて、功績多かりしが、秦檜の、金に通ずるため、謀せられて、獄につ

面頰

薄き鉄板にて作りたる、面の如きも

のにして、眼下、一面をおほものなり。○金襴 錦の一種にして、横に、ひら金の絲

を交ぜ、用ひて織り出したるものをいふ。其銀色の糸を用ひたるものを、銀襴といふ。昔は、支那より舶來せしも、今は、京都の西陣に産す。○取り袴し 袴のものを、取りあげて、奔走に便利なるやうにしたるなり。○供御 天皇の御膳部をいふ。

刹那

梵語にして、極め。○官司 役所の、て短き時間をいふ。○官司 役所の、

明媚

美しきけし。○長嘯子 木下家長の子勝俊のことにして、豊本閣の從兄弟なり。○侏儒 俗にいふ一寸法師にして、長け低き人をいふ。又わざと、いみ、一寸法師の状をなして舞ふわざをもいふ。○阿字の寶牘 阿字は、四十二母字の最初にある最も尊き梵字に、は、「寶牘」は、御符、乃ち俗にいふ御札なり。

免所居官

文字の如くに、居る所の一官を免するにて、其の兼任を解くをいふなり。此の時若し、勳位を兼帯せば、先づ文位のみを免す、さて期年の後、一等を下して叙せられたりといふ。

空輪

丸輪とも書き、塔の上に安置せる輪形の盤ひ、この空輪を成せる箇々の輪盤を駕盤といふ。

邯鄲の歩を學ぶ

書言故事に「學無成日未得邯鄲之歩」

花やかなりしあたり

花美なる邸宅などのありしあたりをいふ。○京極殿 御堂關白道長公の住みし所なり。

法成寺

道長公入道して、住みし所をいふ。○法華堂 法華三昧を行ふ堂をいふ。○雨にむかひて月をこひ 詠

所當の罪科

相當の罪をいふに同じ。

官反内貨來の五つともに備はる

書經の呂刑より出でたる語にして、官は官職にて政府の威光をいひ、反は反報にて仕返しをいひ、内は女謁にて奥向きより頼み入ることをいひ、貨は賄賂にてまひなひする事をいひ、來は請求にて請ひたのむもの。○金銀の砂子地 金銀の粉を、小をいふ。○物心 「もの心」のしたるが如くに、まさき。○物心 所を見よ。ちらしたる紙をいふ。

官符

朝廷より出したる、しるしのふだをいふ。

糸毛の具足

糸のよくこものひて、毛の如くないふ。これ、革おとし、綾おとしなどあるを以て、糸毛とこわりたるなり。

金鐵頭

鎧の一種にして、きたひ鉄にて作れる鎧頭なり。これは、かたきものを射貫くべき料の矢。○沓卷 矢がら竹の、鐵に接したる所なり。○沓卷 巻きたる部分の稱なり。

果報

果は、原因の歸着せし所にして、報は、彼の事柄の此に成就することなをいふ。轉じては、仕合

肩のまよひ

肩衣のやぶれんとするを、つくろはんとする者なしの意なり。

官當

身に帯びたる文位勲位を差し出して、犯せる罪を贖ふをいふ。其の法は、一品より三位までの人は、其の位を以て、徒三年、四位五位の人は、徒二年、六位より八位までは、徒一年の罪を贖ひ得、其の相當の職は、位と。○刹利 印度にて四姓の最上共に解かれたり。○刹利 位に位し、我國の皇族の如く、帝王の御血統なり。

花を見て心源を開きし云々

花を見て心源

の悟りを開きたりなどいへる古人の例どもを心に思ひ集めて理屈ばりたる花見をするは、餘り究風にして、面白くならんとの意なり。又わざと閑靜なるを好み我れ一人、花の下に立ち寄りて、他人の來るを厭ふが如き心狭き人もあり。かゝれば、心を自然に任せて、わざとあまじき風流もせず、又風流めかめにもあらずして、心安く花見る人。○所を置かず 場所を譲らぬ意にて、不通。○忽諸 ないがしらになることなをいふ。

空たきもの

せの好きに。○念誦 念佛を唱へ、經本を誦するをいふ。香をたきたる匂の、何處より來りしとも知れず、空にほひわたる

命いかう

生きんとあるべきを、口をいふ。○命いかう 語のまゝに、かけるなり。

東にはあらぬ武藏の云々

武藏は、東の國なる

が、その東の武藏ならぬ、この武藏の里つゞきにも、東の武藏の如くに、うけらの花が咲くかどうかどうだかといふ意なり。○うけら 板もて屋根をふきたらばは全所を見よ。○板屋 板もて屋根をふきたらばは全所を見よ。○板屋 板もて屋根をふきたらばは全所を見よ。○面々に ぬいづくにさふ。○面々に ぬいづくにさふ。

夜の衣を返せとも云々

小野小町の歌に、いせせめてこひしき時はねは玉の夜の衣をかへしてぞぬる。とあり。これによりてかゝれたり。衣をかへしては、こひしきことを夢に見する。○青陽 春の異名

雅に「春為三青陽」とありて、註に「氣清温陽也」とあり。

東三條殿

高松殿の北にありて、表の方は二條通りなり。

武者所

下北面の伺候する所なり。○北面武士の所を参照せよ。

東塞り

金神又は、大將軍の遊行日などなるべし。十干、十二支によりてくることにて、其の在る方へ向ひて、○奉行 總支配の大事をなさぬなり。○奉行 總支配の大事をなさぬなり。

所詮誰々も云々

所詮は、むし

京極を上りに

京極は、賀茂川の四に沿ひたる通りなり。

物其の物にあらねども

名目程の價は

宗行

承久の亂の時、院宣を書きし人なり。

花物いはまほしげなり

李白の詩に「荷

蕩舟人」とあり。○物はりにて云々 「物はり」は、洗濯人をいふ。

官物

國衙の費用を辨する租をいふ。○固紋 堅紋とも書き、紋の遠くにおか

れたるをいふ。

周の文王の車の右に云々

本朝國論の序文の中に

「齊桓公之得道左矣、便是商頭牛口之匹夫、周文王之戰車右焉、亦猶謂陽德變之賤老者也」とあり。

東の對

「西の對」の所を見よ。

物ごとにあはれなれ

花鳥風月、すべて物につきてあはれがある

○夜寒になる

陰曆十月の比、夜の次第に寒くなる

○花やかに嬉しげ

威勢よく、花美にして、おもこ

○具足取りしたゝめ

道具を取り片

○青き眼

好ききらひさいはんが如し。乃ち、阮籍といへる人が、心

のなばぬ友には、白眼を以て見、かなへる友には、青眼を以て見しといへる故事より起れり。阮籍は竹林

七賢の隨一の人なるが、晋書に、「不_レ向_二禮教_一、能_レ爲_二青白眼_一對_レ之、及_二衽喜來吊_一、籍作_二白眼_一喜不_レ慍而退、喜第康聞_レ之、乃_レ瀼_レ酒挾_レ擊_レ造焉、籍大喜乃見青眼」とあり。

空より降りけむ土より云々

禮記に

之經、非_レ從_レ天降_一也、非_レ從_レ地出_一也、人情而已矣」とあり。この意を、反對にさし書きしなり。

侍従大夫などの

侍従は爲相にして、大夫は爲守なり。

和歌の浦にかきとゞめたる云々

和歌浦は、紀伊國にあり。之に和歌をよみかけ、我が家のことをいへるにて、意は明なり。

夜のやどなまぐさしといひける

人 白氏文集に、「朝_レ食飢_レ得_レ費_二杯盤_一二夜宿_レ腥臊_レ二牀_一」云々あるをいへり。

和徳門院 仲恭天皇の御女、義子内親王なり。

虎のかしら 本草綱目に「虎の頭骨を枕として寝る時は、悪しき夢を避け又、初

生の小兒を、この煎_レたるものにて浴せしむる時は、惡鬼をさけ、疥癬癩癧の症を去る」とあり。されば、御湯殿の儀式に用ひしものならむ。

物のあはれは秋こそまされ

拾遺集に「春

はたは花のひさへにさくばかり物

のあはれは秋がまされる」とあり。

花の一重に咲くばかり

「物のあはれは秋こそまされ」とあり。

○物のけ

物氣、物怪の字にして、見よ。

夜の雁の遙に海を云々

漢書に、「漢の爲

に幽せられて、歸ることを得ず、匈奴、漢と和して後、蘇武死せりとして歸さず、漢の昭帝、即ち匈奴にひいて曰はく、上林の中に雁を射たりしに、足に書あり。即ち蘇武の簡なり。未だ死せず速に歸すべし」とあり。是に於いて武は歸ることを得たり」といふ事見えたり。乃ち、この故事によりてかくはいへるならん。

粉榆の居

仙洞といふに同く、上皇の居る所をいふ。漢の高祖の起れる地を粉榆とい

ひ、祖廟、又粉榆にあり。故に、祖廟を粉榆といひしが、轉じて仙洞をいふに至れり。

金谷の花を弄び

晋の石崇といふ人、金谷園を宴して、詩成らざれば、酒三杯を飲せたりとの故事あり。金谷の園蓋とて、花宴に有名なる處なれば、かくはかりていへるなり。李白の春夜宴桃李園序にも、「如詩不_レ成、罰依_二金谷酒數_一」云々あり。

金青

紺青とも書き、薄き紺色の明るきものなり。

奄有天下

詩經に、「自_二彼成康_一、奄有_二四方_一」云々其明」とあり。

始馭國天皇

始めて、國しらす。天皇といふ義なり。

附會

都合のよきやうに、其の事に、引きつけ合はることをいふ。

物に逐はるゝ事なし

中庸に、「事_レ豫則立、不_レ豫則廢、言_レ前定、則_レ不_レ殆、事_レ前定、則_レ不_レ困、行_レ前定、則_レ不_レ疚、道_レ前定、則_レ不_レ窮」とあり。

○面折

直接に

の非を擧ぐ

○青垣山

垣の如くにめぐれる。青き山をいふ。

花はかすみとなりけり やいぐれそ

あつりの、一面に、**○花ぐもり** 櫻のさく

のりさ、**○物さだめの博士** 品評

いふに同じ。源氏傳木の巻に、「右馬の頭ものさだめの博士になりて」とあり。

東の大臣 徳川家康 公をいふ。○武林 武家さい

青侍 若侍のこ。○雨づゝみするに

くれする。○**非藏人** 重大の諸大夫にて、未だ職になり。人に補せられざる間、昇殿

するものをいひ、主に賀茂、稻荷などの、神祇を補せられたり。

物部の道 武道をいふ。○芹をつみて

献芹さいふ。志餘りて、品物の粗なる意なり。嵯峨與山巨源二書に、「野人有快爽二背而美芹子二者欲獻レ之至尊、雖二區々之意二亦已疎」

とあるより起れり。

虎の前にたちけむ狐 戦國傳に、「荆宣王

北方長昭奚恤也、暴賦如何、群臣莫對、江乙對曰、虎求ニレ獸ニ而食レ之得レ狐、狐曰、子無ニ敢食レ我、天帝使レ我

長百獸、今子食レ我、是逆天帝命也、子以レ我爲ニ不信、我爲レ子先行、子隨ニ我後、百獸之見レ我而不敢走乎、

虎以爲レ然、故遂與レ之、行、獸見レ之皆走、不知レ虎長レ已而走一也、以爲長レ狐也、今王之地方五千里、帶甲百萬、而

專屬ニ之昭奚恤、故北方之長ニ奚恤也、其實長ニ王之甲兵一也、猶ニ百獸之長レ狐也」とあるに依り。

岩屋なども見ゆ 瑞巖寺の境内にあり。瑞巖寺は、政家の創建にして、

先年、陛下御巡幸の際、行在所させさせらる。

放埒せされば なげやりにならばなり。

枝をならさず 論衡に、「太平の世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ枝、雨不レ破

レ塊、」とあり。乃ち、春の花、秋の紅葉、皆おだやかなる状をいへり。

昆明池 漢の武帝の作れる池にして上林苑にあり。西京雜記に、「武帝作昆明池、欲レ伐昆吾

夷二教二習水。○**忠臣之心無革命時** 忠臣

は、只其の君に仕ふるを知りて、二君に仕ふる心なれば、革命などいふことは、いさゝか心中になしとなり。

○**金銅の高さ** 唐金

三万九千五百六十斤、黄金一万四千三百六十六兩、水銀五万八千六百二十兩、金鉛十五万枚、白銀一万一千六百八十

斤、炭一万六千六百五十六石、然して造り上げたる大佛は、面長一丈六尺、廣さ九尺五寸、眉五尺四寸五分、

目長三尺九寸、口三尺七寸、鼻口 **○知遇** よく

を知りて、おのれに對する、其 **○沿襲** 今まで

の人のよきもてなしぶりをいふ。○**法體の身** 僧の身

東照宮の仰せられし云々 家康岡崎の城にあ

りし時、禁を犯して魚鳥をさししものあり。當に死刑に處せらるべき時に、旗本の士鈴木久三郎、こゝさら

に禁地の地に網を入る。家康怒りて、之を斬らんすとす。久三郎目を嚙らし、君は暗主なり、魚の爲に人を殺さ

虎の前にたちけむ狐 戦國傳に、「荆宣王

北方長昭奚恤也、暴賦如何、群臣莫對、江乙對曰、虎求ニレ獸ニ而食レ之得レ狐、狐曰、子無ニ敢食レ我、天帝使レ我

長百獸、今子食レ我、是逆天帝命也、子以レ我爲ニ不信、我爲レ子先行、子隨ニ我後、百獸之見レ我而不敢走乎、

虎以爲レ然、故遂與レ之、行、獸見レ之皆走、不知レ虎長レ已而走一也、以爲長レ狐也、今王之地方五千里、帶甲百萬、而

專屬ニ之昭奚恤、故北方之長ニ奚恤也、其實長ニ王之甲兵一也、猶ニ百獸之長レ狐也」とあるに依り。

岩屋なども見ゆ 瑞巖寺の境内にあり。瑞巖寺は、政家の創建にして、

先年、陛下御巡幸の際、行在所させさせらる。

放埒せされば なげやりにならばなり。

枝をならさず 論衡に、「太平の世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ枝、雨不レ破

レ塊、」とあり。乃ち、春の花、秋の紅葉、皆おだやかなる状をいへり。

昆明池 漢の武帝の作れる池にして上林苑にあり。西京雜記に、「武帝作昆明池、欲レ伐昆吾

んすとす。榮村の暴に過ぐと、家康悟りて、遂に、先のものをも致せり。後、人に語りて曰はく、直言諫争の功は、一番檢に勝れり。敵を犯すものは、心に、重賞の機嫌を思ひ、主を諫むるものは、其の禍害を慮らざればなりといへり。一番檢とは、第一番に、敵陣に突き入るものなをいふ。

兎毫錢 芒目の義にして、陶器の肌に、芒の如き筋あるをいふ。錢はさがつきなり。

東萊府使 慶尙道の東萊府の長官なり。○虎口

に危き所をいふ。莊子に、「科ニ虎頭一編ニ虎鬚一鬚不レ免ニ虎口ニ」とあり。

周梨樂特 釋迦の弟子にして、記憶甚だ悪かりし人たるが、後遂に、悟通して、羅漢の列に入り。

例のこといもみなしをへて 在任中の公事

公物、通例の諸事、すべ

てを整理しなばりてなり。

物によりてはむるにしもあらず

器物の厚きにより、もつともな
つけて、ほむるにあらざりなり。

妹がうむをづの浦なる

「妹がうむ」は、
なさいふ調の

枕詞。○京誇にもやあらむ

京都に近
りたるを誇

り心にいひたる
ならんかなり。

來ときては川の堀江の云々

こま
來

るさして來たところか、堀江の川の水が浅き故、船も
行きなやみ。我が身も亦病に憫む今日かなと、甚だ嘆

九畫の部

相公

國家の宰相をいふ。相國に同す。野相公は小
野篁、善相公は三善清行、管相公は管原

是香、江相公は大江音人、後 ○按司

昔、琉球
國諸所の

領主にして、○臥薪嘗膽

「勾踐の耻を忘
る」の所を見る。

息せし
なり。

物思ふ心のうちしくらければ云

々 心に物思ひをしてなれば、明石の浦のけしきも、
少しも面白くはみえぬとの意にして、「くらし」

「あかし」を對して、な ○沈の懸盤

沈ふ
いふ

水にて作りたる、か
けこある懸なり。

段落

文章中の大なる切目なり。又區域、
一きまりなごいふ意にも用ふ。

前駟

「地下の前駟に召し」○宛然

さなり。

神道聖法

神道とは、天祖天照太御神の教へ給ひ
たる神の道にして、聖法とは、孔孟の

説かれたる聖
人の道をいふ。○卑俚

卑しく俗な
るをいふ。

枕ことば

成ることば、いはんとするに當り、其
の詞に、えんある詞を、其上におくも

のをいふ。乃ち「ちはやぶる神の「ちはやぶる」、
さまくら旅の「くさまくら」、「さりがなく東の「さり

がなく」の如。○故事

古にありたる事、又は、古
より言ひ傳へたることをい

ふ。○庠序

學校をいふ。○郊野

市外のこ
ななり。

屍

死にたる身
體をいふ。○直隸總督衙門

直隸省の
總督たる

官人の役
所なり。○威靈

御威光をい
はんが如し。

要路顯職

要路は大切の役目にして、
顯職は貴き職をいふ。

食客

かゝりうと、ぬさうら
ふ、なごいふに同す。○軌道

道筋をい
はんが如し。

○宮柱

お宮をい
ふに同す。○風氣

氣候をい
ふに同す。

風儀

ならは
しなり。○虺

まむしの
ことなり。○春况

春
の

有標
なり。○活路

生活の道
をいふ。○度會縣

維新の
際、伊

勢におかれし縣なり。後、安
濃津縣と合併して三重縣となる。

屈撓せず

たばよない。○追賞

死んだ後よ
り賞するを

いふ。○某侯

久留里侯土谷民
部少輔をいふ。

星羅基布

星の如くに列り、將基の駒
の如くに散りて居るをいふ。

持論

持ちまへの
議論をいふ。○美さま

様をいふ字を草
字に書き、其の

つくりを、業の字を
したるものないう。○故實

作法、儀式などの、
昔の事例をいふ。

俗儒

なみ／＼の
儒者なり。○苟且

「かりそめ」
の所を見よ。

奇爾稽思人

さるぎすとい
ふ國の人なり。

拮据經營

一生懸命骨折りて、體事の
設け營みなすことをいふ。

協和

心を合せ、むつま
じくする。ことなり。○奇特

いふしんさ
いふに同す。

指南 教ふるこ。○貞永式目

後堀河天皇の貞永元年に

北條義時、三善康速等と、制定せし法律なり。其の項目、五十一條ありて、徳川時代に至る迄、武家法制の

大本と。○飛礮 石をいふ。○建元し 年號なるこ。○音訓にわたる 國子の圖は音に

つるこ。○思ひたどる 思ひ極むるなり。

便捷 便利よきこ。○扁階 西洋風の家の入口。○故兒 死したる

屈修 真心を屈して、修養す。○故兒 死したる。○胡人 外國人をいふ。

炮烟彈雨の潜流 炮烟彈雨は、大炮のけむり。○眉間尺 古、支那に眉間尺とて、眉と眉との間、一尺

あり人あり、事によりて楚王を怨めり。時

に、又、楚王を怨める某あり。よりて、眉間尺某と計

り、自ら刀劍の穂先を口に含み、首を某に切りしめて

楚王に奉らしむ。楚王其の腹せざるを聞き、之を沸湯に

煮ること七晝夜ならしむるも尙ほ腹せざりければ、某

楚王に謂て曰はく、眉間尺は王を一見せざれば、其の

怨はれざるべし。其の怨はれなば以て腹すべし。請ふ、

鼎に噓みて、眉間尺と相見るべしと。依て、王之に臨

む。眉間尺含む所の刃劍を吐きて、王の首を切斷し、

首の鼎中へ落つるや、首と首とのかみ合ひを始めた。首

某見てこの機失ふべからずと、自らも、鼎に向ひて首

をきり、三首鼎中に相争ひ、其の争ひつゝとろけし

形こそ、三つ巴の起原となりけりといふ小説あり。

骨未だ冷ならざるに 死して間もなき

協賛 同意、賛成なり。○軍よばひ さまのこ

神垣 神社の周圍の、垣根をいふ。

思ひかね入りにし山をたぢいで

云々 世の有様を慨嘆するに堪へず、世をのがれ

んと、一旦、山にわけ入りしも、再び山を

立ち出で、かく浮世にまよひあるくは、昔、天皇の

御爲めである、決して、自分の心の變じたためではな

ない。○系統 ちすぢ、同類の關

風趣 ねむき。○風格 格はきそくなれども、

に同。○律令格式 預め、人民に法令を示すも

につきて、其の細則を示すものを、式といひ、これら

を犯したるものを、罰する法令を、律といひ、律令、

式を、臨時に改正した。○洙泗の學 洙も、泗

の生れたる、魯國の邊を流るる川の名にして、孔子

の學といふに同。乃ち、聖人の學の事なり。

音韻を釐正す 音は聲音にして、音のひびきを

なり。○神典 神道に關する。○相臣 宰相に

同。○神籬 神を立て廻らして、假に、神の

宮所 都に。○宮門 宮城の門

敵傍山 大和國十市郡。○前司

前の國司なり。信濃の前

司一三河の前。○皇大神の御靈代 大天

の、御神休の代り。○軍だち 戰爭に、出立

にする標をいふ。○柑 世は、かうとみかんの

略稱にも。○臥雲日件錄 百三代後土御門天

のこを、主とし。○春宮 皇太子を東宮とい

て書ける書物なり。○春宮 皇太子の御坐す

御殿を、春宮といひしが、轉じては、皇太子をも春宮

といふ。はるのみや、かこのみや、ひつぎのみや、ま

うけのみや、な。○差物、指物 昔、戰爭の時

標の小旗にして、鎧の背。○神君 徳川家康

の、受け前にさしたり。○南部諸白の樽 南部

酒なり。○承順の道 命令に従ふ道と

いふ程の意なり。

奇兵 敵の側面、或は背面より、不意にうちかゝる兵をいふ。

南湖の十の境 南湖は西湖の誤なるべし。西湖の十景は平湖秋月、蘇堤春曉、斷橋殘雪、雷峰落照、南屏晚鐘、麴院風荷、花港觀魚、柳浪聞鶯、三潭印月、兩峰插雲これなり。

故 故にさういふ。○**女女倭** ことなまなる古言なり。

故舊 古きなり。○**故府** 代々住居して居た所、乃ち、甲斐國の城下。○**恬淡** 欲もなく、物にさんなり。

神聖 神をいふ。「神聖三種の神器を授く」の神聖は、天祖、天照大神をさしていふ。又、「神聖にして犯すべからず」などの神聖は、靈妙にして尊く、咎と人間以外なるをいふ。

科戸の風 神風をいふ。しなつひこ、しなつひめ、二神の吹かせ給ふ風なり。

帝紀 紀は、紀傳體歴史の語にして、一代を主として書きたるを、帝紀といふ。

洲は陸につゞき淵は島とかはる 洲は、水の淺くして、土砂のあらはれたるをいふ。洲の陸となり、淵の島となるは、變遷の甚しきないへるなり。○**便なし** 多く不都合といふ意に用ゆ。

風流士 風流なる人。○**宣りごち給ふ** 皇天の命令するることなり。○**南の山** 詩經天保篇言ひきかすることなり。○**南の山** 詩經天保篇の言ひきかすることなり。○**南の山** 詩經天保篇の言ひきかすることなり。○**南の山** 詩經天保篇の言ひきかすることなり。

直垂 古は、一般武人の平服なりし。後には、禮服となりたり。

相生相對 「七星五行」の所を見よ。○**品定** 品評といふ。

前車の轍 史記に、「前車の覆るは、後車の戒め」といふ語あり。即ち、前の人の失敗せきたるを、帝紀といふ。

直垂 古は、一般武人の平服なりし。後には、禮服となりたり。

相生相對 「七星五行」の所を見よ。○**品定** 品評といふ。

前車の轍 史記に、「前車の覆るは、後車の戒め」といふ語あり。即ち、前の人の失敗せきたるを、帝紀といふ。

軍旅 軍勢の数を数ふる語なり。傳して、いくさ、戦争などいふに用ふ。

威風凜々 威儀ある風采の、鋭く身にしむ體をいふ。

相生相尅 「七星五行」の所を見よ。○**洗滌** 心の穢きをいふ。

飛鳥の淵瀨 には限らざりけり。今古集に、體人知らず「世の中はなにかつれなる飛鳥川昨日の淵が今日は瀨になる」とあり。この意をこれり。

背水 水を背にして、敵に對するをいふ。これ、退くに途なきを以て、必死の勇を鼓し、能く戦ふ所以なり。○**皇祖皇宗** 皇祖は、天照太神、天忍穗耳尊、瓊々杵尊、彥火火出見尊、鸕鷀草葺不合尊、神武天皇をさし奉り、皇宗は、綏靖天皇以下、列朝の天皇を申し奉るなり。

南山、有竹、不揉、自直云々 孔子家語に出づ。孔子は、南山の竹は、ためすとも、自然に真直であつて、切りて楡にすれば、楡をも突き通す、之を以て

しを見て、自らの戒めとするをいふ。○**宣旨** 天子の命をいふ。通鑑に「天子命宣旨」とあり。又曰「宣命」とあり。任官には、上層より出でし口宣案を、大外記受けて書き出す、之を宣旨とす。これに、口宣を調し、頭の辨に送り、官に任ずる人の許に、遣はす也。

前々代 徳川六代將軍家宣。○**眇** 一方の眼の異をいふ。公をさしていふ。

屋形 館と同一く貴族の邸宅をいひ、傳しては、國守、大名などをいふ。○**屋形** の御感にも預るの字形は信長公。○**神妙** 殊勝、奇特、などいふに同をさしていふ。

咄嗟發射の音 咄嗟は、ときの聲にして、發射は、鐵砲をうつことなり。

風姿瀟灑 なりふりの、さつぱら。○**皇考** 天子の御考にさしていふ。考は、死したる父をさして、一般にいふ。

春のなごりもあらし山 あらし山は、風山にして春は、櫻、秋はもみぢを以て名あり。この「あらし」に、「あらし」の略せられたる「あらし」をかけた。

考ふれば、物は天然のまゝでよろしい、學問などせずとも、よきものなりとの意なり。

香藥 沈香、丁香、龍腦などの如き香類と、甘草、茵香などの如き藥草類をいふ。

春盤 今は、「くひつみ」といひて、蓬萊のざりのことなり。これば、來客にもすゝめ、其の身もさりとて食ひし故にこの名ありといへども、今は、主客とも、之を食はばこの名なれば、大に違へり。嵐雪の句に「ほつくと食積あら」○思ふどち 氣の合ふたす夫婦かなとあり。

春宵一刻值千金、花有清光一月有陰 蘇東坡の詩にして、三四の句は、「歌管樓鐘春寂々、鞦韆院落夜沈々」とあり。其の意は、明なるべし。

春入燒痕青 唐僧惠崇の詩なり。冬燒きたる草のあとの、春になりて青くなれる

○持佛堂 祖先の佛を祭りすふたる堂をいふ。

亭午 日の午の刻に當るをいふ。杜詩に、「亭午風和暖」又、東坡の詩に「日輪亭午汀洲融」などあり。

前栽 庭前にうゑたる草木をいふ。○昭宣公 藤原基經をいふ。

神がより 神の人によるをいふ。

神冥のおそれ つかみのば○狩くら 狩りくらの所を見よ。○法のわざを教ふ 佛法の事を見よ。

○冠者 元服して、冠をつけたる少年をいふ。○首途 家を

出で發足することにして、○苞苴 まひなひ戦争に出づるをいふ。

前を追ふ 前駆に同ト。「地下の前」に云々の所を見よ。

指貫 昔の袴の一種にして、すそを固くして括り直衣、狩衣など替る時に用ふ。

狩衣 古は、鷹狩の時の服なりしが、遂には、常服の服の一種となりたり。染色、紋所何れも隨意

なり。○直衣 古の公卿の平服にして、烏帽子さしぬきと、共に替る。袍の服は、貝、

地合と紋所。○按察大納言 按察使にして、大納言を兼ねたる人なり。按察使は、地方官の政

を按察し、人民を巡撫する役なり。○妹 男子より、女

子を親しく。○古口 管、茅などにてあみ、多く、いふ詞なり。○船の屋根をふくに用ふ。

香の直垂 香染の直垂をいふ。香染とは、常のものより少しく薄く、黄色を帯びたり。

○海賦をむすぶ 海賦を以て染むるよ。○海賦をむすぶ 賦海

は、海部さもかき、海に關する部類の名なり。海繪、織物などに、施す模様にして、波の中に、貝、月などは、海賦を稱へ造るなり。○修理 手入する。

室町の時 足利尊氏、幕府を京都の室町に建てしより、足利將軍を、室町將軍といふ。

乃ち、室町の時は、○修羅道 佛語にして、六道足利將軍の時なり。○修羅道 佛語にして、六道

亂の場所をいふ。「修羅の國」修羅のちまた」など、皆争ひのある場所なり。

會長 變異の長。○修辭潤色 文章の字句を

をつくる。○修驗道 佛教の一派にして、胎藏金剛界を元とし、神佛同途

に仕へ、祈禱をなす。この祈禱をなす人を、修驗者といひ、袈裟、頭巾をつけ、大刀を帯び、金剛杖を持ち

法螺をふき、諸國を修業しあるくを以て、山伏ともいふ。而して、吉野の大峯に入るを、先達といふ。

修驗者 「修驗道」の所を見よ。○柳營 幕府をいふ。漢の將軍周亞府、細柳

に營を構へたる。○砒霜 砒石のこぼして、故事より起り。○砒霜 砒石のこぼして、含

まるい毒物なり。砒石、亞砒化砒素などいふに同ト。

神皇產靈尊 「高皇產靈尊」○柳の糸 柳

のこを以て、かくはいふなり。

柳の五衣 柳重れの五つぎなり。柳重れとは、表は、五枚重ねといふに同ト、昔の婦人の衣服なり。五つぎぬき

枚より多きもあり。而して、柳がきれ、腰がきれ、うめがきれ、など種々あれども、表は皆、同トき色にして、裏はひきつと、紅○柳のななし 女官

のひらぎぬを付けたり。○柳のななし 女官

名なり。○怠狀 わび状なり。

柳さくらをこきまぜて 古今集素性法師の歌に「み

わたせば柳さくらをこきまぜて都が春のしきなりける」とあり。其の意によれり。

段 「七八段ばかり」○郎從 郎黨に同ト。「家子の所を見よ。」

追捕使 「追捕使」の所を見よ。○要領 或る事の中につきて、最も、必要なる主眼の

○洗皮鎧 薄紅にそめたるなめしがはいふ。蓋し、洗革といふは、緋色の革を、洗ひはがして、色をうすくしたるを以ての名なり。

思ひかね心つくしに祈れども云々 大意は明なり。「つくし」に靈くしと筑紫ををかれ、「うさ」に憂ささ字佐とをかれたり。

持明院派 持明院は、伏見に在りて、後深草上皇ここに在せり。故に、其の御子孫を、持明院派(或は統、流)といふ。○城代 一城を留守する役にして、大坂と、駿府とにおきたり。○逆茂木、逆木 「さかもぎ」の所を見よ。

相貌堂々 人相のいかめしく、立派なるをいふ。○迷盧 「めい」の所を。○枳棋 芝罘梨とも書き、たけ高く背つ喬木なり。夏の頃、小さき花を開き、實は、五木の小枝より成り、其の上に向ふり、冬熟して味甘美なり。

南八 南氏の八番目の子。○前途程遠、馳懐關山之夕雲 江朝綱の、越の國に下りし時、旅の別をかなしみて、誅卜たる長篇の序の一部なり。「前途程遠」は、四海まで行くには、まだ、道が甚だ遠しにて、「懐を關山の云々」は、遠方の山の雲までも、心をやつてなるといふ意なり。

奇峭 思ひかけの程、人にぬき出でたるをいふ。○春筍の轟出 春に筍の、によき出づるをいふ。○枯蹙蒼濁 枯れちみみて、水氣のなき状をいふ。○肺腑に透る ぼらはたまでしみまほるをいふ。

首陽山 伯夷叔齊の餓死せし所なり。伯夷叔齊は、孤竹君の二子なるが、周の武王、兵を擧げて、殷の紂王を討ぜんとするや、君臣の義をききて之を諫めたれども、武王聽き給はず、終に、天下を己の手に歸せしかば、二子は、周の粟を食はずとて、首陽山に入りて餓死せりとす。

突兀 或は高く、或は低く、其の狀のけはしきないふ。

恍として 左も其のやうに、つさりさしてなり。

畑つ物 畑のもの、乃ち、○陌の塵 「紅の塵」に同

皇張 大に張るをいふ。○故國 自分の生れし國をいふ。

胡籙 「やなぐひ」の所を見よ。○宣命 神事、改元、大赦、立后、立坊、任大臣などの時に發す。○祖師 其の宗門、其道の祖をいふ。○架空の言 うそことなり。

風韻 風雅のあぢはひあるをいふ。○架空の言 うそことなり。

持此來擬男子國 男子國は、日本のことをいふ。古名を一のころ「ま」を以て、男の子の意にされるなり。乃ち、趙家の老寡婦を、おどかしつけたる筆法を以て、我が男子國に向ふといふ意にして、老寡婦と、男子とを、對して用ひたる所妙なり。

相摸太郎膽如蘘 相摸太郎とは、北條時宗の如く大なる事、蘘の如く大なりといふ意なり。○施藥院 古の慈惠院に於て、病めるもの、賑ふたるもの、或は貧兒などを、療養する所なり。

勇往の情 勇みで進む情をいふ。○拮据 手と、口と、共にはたらく事より轉じて、能く勉強するをいふ。詩經に「予手拮据」とあり。○革命 「天地革而四時成、湯武革命順乎天而應乎人」より出でたる語にして、諸外國の如く、王統定らぬ國にて、繼體の命數あらたまりて、主權者の變更す。○宣下 宣旨をいふ。乃ち世代のかはるなり。○宣下 宣旨をいふ。○格言 法則すべき程の名言をいふ。○美術 巧妙なる

挑げ盡して云々

鳥獣歌に、「夕霞飛、恨然、秋燈挑盡末、成、眠」とあり。

○叙位

古、陰曆正月五日六日の頃に、宮中において行はれたり。

飛道具

空中を飛び来る、弓矢、銃砲の彈丸等をいふ。

春は花秋はもみちをみよし野の

云々

いや何もしない事は、春は花を見て暮し、秋は紅葉をながめてあかし居れば、實にこの吉野山は、住居のしがひのある山だぞ知り玉へさなり。「みよし野」山のみに見さいふ詞をかけたなり。

食攻

兵糧攻といふに同く、戰はずして、唯敵の兵糧の盡くるをまちて、敵を困しむるの法なり。

柿の衣

柿色の衣にして、山伏などの着るものなり。

○南殿

一名。○逆修 逆修冥福の略言にして、若き人は先きに死して、年老いたるものが、其の圓向などすることをいふ。又、死なぬ先きより、死んだ時の如くに、圓向するをいふ。

逆鱗

天皇の怒り給ふをいふ。轉非子より出でたる語なり。

染羽の矢

雲の白羽を青くか、赤くかに、染めたるをいふ。

秋やかへりて云々

新古今集に「涼しきは秋やかへりてはつせ川

ふるかはのべの杉の下かげ」とあり。

南陽縣

福州風土記に、「南陽郡縣、其源傍、水極甘馨、飲此水、上壽百二十、中壽百餘、七十者猶以爲夭」とあり。

○神さびて

向にも寂漠たる状をいふ。すこく尊く覺ゆる状をいひ、古くなりたる状をいふ。

皆練

振練とも書き、薄き紅の練り張りたる絹なり。

○追灘

陰曆十月の夜、禁中にて行はるゝ公事にて、年中の疫をおいはらふ式なり。之をおにやらひひなやらひさといふ。

○洞院左大臣

洞院實季公をいふ。

食は人の天なり

天は、人の賣りて生ずる所にして、食も亦、人の命をつなぐものなるよりかくばいふ。書經に、「夫食爲人天、農爲政本」とあり。

律師

僧官にして、僧部の下なり。位は五位に相當す。

城陸奥守泰盛

秋田城介藤原景の三男にして、この家、代々、秋田城介に任ぜらるゝ家格あり。而して、陸奥守たるを以て、城陸奥守といひたるなり。

秋ふかき草の枕にわれぞなく云々

秋深くなれる草の枕に我れ、その鈴虫の音をふり立て、鳴けさいひたるにて、「鈴虫」は爲相なまして、いへり。鈴虫の音をわれずなくと、五句より三句につづけて見るべし。

拜賀のさきに

官位進みたる後、御禮に拜賀すべし、その拜賀のまだすまの内に

○春日野の云々

古今集に、「春日野のさぶひの野守いでし見よいまいくありて若菜つみてむ」とあるに、これなり。

故郷をわかれ路におふる葛のはの云々

故郷をわかれて來し路に、まえて居た葛の葉は、風のまに、葉をかへせども、われ

は、最早多数の月日を送りて、早秋となりしかど、かへることできないが、何時の世にか、都にかへること出来るであらうかと、嘆息し給ひしなり。

「葛」は、來れ、かへるにかゝる縁語なり。

思ふことなくてぞ見まし云々

あけ月の、ほのく、志賀の浦の波に映するさまを、何も心にあんずることなく、氣樂の身にて見たいものむに、どれ程愉快ならむに、といふ意なり。

南樓の月に吟し

晉書に、「亮鎮武昌、諸佐史段潜之徒、乘月登南樓、不覺亮至、將起避之、亮曰、諸君且住、老於此、此復不覺、僕亦與之共醉、誦其坦率如此」とあるに、これなり。

○垣循に搔き

垣を結びて、搔きに、代用したるをいふ。

秋の霜

刀の異名なり。

○星の位

三公をさして、三公をさして、天の三台星にたとへり。

○星霜

歳の積るをいふ。塔婆抄に、「霜は年毎に降るものにして、星は一年毎に天を巡るものなり。故に歳の積るを星霜を送るといふ」とあり。

客觀様に「主觀物に」○神隨カムナガラ 神の體を、
の所を見よ。そなへたる

まゝなりと
いふ意なり。

柱をたてかへざれば 柱は、こぢちて、
糸を張る柱をい

ふ。弦の緩急を調べて、音の高低を變ずるは、柱の運
轉にあり。楊子に「譬へば、猶ほ、柱に膠して、瑟を
鼓するが如し」と。○津緞子ツツコ 緞子は、麻糸をも
ありたるより出づ。○宮地ミヤヂ 大宮に
おりたるものにして、伊勢の津

の名産なれば、津緞子といふ。○宮地ミヤヂ 大宮に
通り路

ふい。○直々スジク しくしらべも云々 飾な
く眞

直にさい。○染殿のやしほの色シホ は、染殿
ふ意なり。○染殿のやしほの色シホ は、
染殿

禁中の染物する所にして、「やしほの色」は、
幾度も染汁に入れて染めたる濃き色をいふ。

枕がみ 枕もさいい。○契りおく日キリ 何日
に何日

かへりて遷はんと
契りおく日なり。

限りなく遠くも來にけりと 伊勢物
器に

「限りなく遠くもきけるかなさわ
びあへるに云々」さあるにふれり。

品かたち 人品さ容
兒さなり。

骨なけれども道になづまず 其の器
用なけ

れども、其の道に盡ツク。○亭子テイシのみかど 多
滞せずさいふ義なり。

天皇を申。○思ひたつ道もや 足利高氏の
亂に乗じて、

北條氏に代りて天下の權を握らんと思ひ立つやうの事
もあらうか、いかにもさう思はるゝなど、人々の密に

さいやくも賊にしるく、遂
に關東にてそむけりとなり。

服膺 心にさむることなり。中庸に、「得二
善一則拳拳服膺而弗レ失レ之」さあり。

神田山 今の駿河臺。○宥坐の器 宥は右
座右におきて、戒さ。○持滿 書經に「滿招レ損謙
すべき器なりといふ。○持滿 受レ益時乃天道」こ

あり。又、易經にも「天道
虧レ盈而益レ謙」さあり。

首材後材を建て肋材を植る 首材は
軸を作

るべき材、後材は軸を作るべき材、
肋材は中腹を作るべき材をいふ。

郊勞の御使等 郊勞は、郊迎をいふ。
ひ、迎の使者をいふ。

若菜こにいれてきじなど云々 はこ
籠なり。若菜は、陰曆正月七日の儀式に用ふるものな
れば、それ故かくは、わざと、贈りたるなり。而して、
風流のおくりものには、雑なごを、花の枝につけて
する。當時の風なれば、わざと、かくはしたるなり。

思ひやる心は海をわたれども云
々 我が思ひやる心ばかりは、幾度も海をわたりのけ
ども、これを告げやる書のならば、かなたの人
は、わが名残を、なしく思ひ居ること
は、知らずで居るならむとの意なり。

音をのみぞなく 聲を立て、泣
くことなり。

春の野にてぞねをばなく云々 はこ
船歌の一にして、當時、水主どもの中に流行したるも
のなるべし。意は、春の野に出で、若すいきなどに、
手をさられて、なくなくつみたる若菜を、親や姑など
は、好みて食ふことならんに、それを親や姑に、食は
せもせて、昨夜の童子は、ひどい奴かな、おれをだま
して、持ち行きて仕舞ふた、その錢もまだ失れず又、
當人がこさわりに來もせずとの意なり。「まほる」は、
食るをいひ、「かへらや」は、柏子にちへたる詞なり。

「そらこ」は虚言にして、「おぎのりわざ」は、除の
字にして、物を買ふに、即時に金をばらはず、かけわ
ひにする
をいふ。

宮の御前もたゞにもおはしまさ
ねば 御前あらせら
れたるをいふ。

風ふけばおきつしらなみたつた
山云々 あのさびしき立田山を、夜ふけて、君が
人にてこしてお出でになるであらうか

荆 おどろ。○書庫 書物を蔵むるに同じ。

時辰儀 時計のこ。○剛毅 こはくしてひきまなりのこ。

庭燎 庭にたく。○宸儀 天皇を申し奉る。

埋火 「うづみ火」。○殉 伴ひ死することをいふ。「國に殉す」は、國家のため死す。

○高十萬石 高は石高にして、高十萬石は、田畑、物成のあがり高、十萬石なるをいふ。

殺生禁斷の結界 生物を殺すことを、禁じたる場所をいふ。

峨艦 大なる軍艦をいふ。○氣節 きこつさいふに同じく、風伏せざる勇氣をいふ。

○契潤 疎遠といふに同じく、久しく御無沙汰したるをいふ。

烟霞の妙察 烟霧は、霞をいふ。乃ち、風景の御觀察は、實に妙であることの意なり。

○草摺 錠の腰に、数段に分れたる、切き摺をいふ。

時服 其の時候に従ひて、着るべき衣服をいふ。

桃源を採める心地 桃源は、仙人の居る所なり。晋の太元中武陵の人、魚を得んとて、溪に行き、忽ち、桃花林の岸を夾むに逢ふ。其の林を突めんと欲すれば、林、水源に盡きて、一山を得、山をたどりて、終に仙境を得たり。之より仙境を桃源といふ。

草の市 農具を賣る。○消息 手紙をいふ。市をいふ。

恙なし 無事といふ。○冥理を知らず 冥理とは道理をいふ。○旁藥 伐り株より生ずる芽、乃ち、びこばえをいふ。

息あひの藥 氣つけの藥をいふ。

唐織の肩衣 唐織は、唐織錦の略せられたるに、唐紅の錦に似せて織りたり。肩衣とは、古、武家の禮服にて、肩より背にかけてきる、俗に之を「かみ」こいひ、下にきる袴を「しも」こいひ。

草莽 草ばらのしげれるをいふ。轉じては、朝廷に對して民間をいふ。「草莽の臣」などの如し。

高野大師 弘法大師のこをいふ。○烈膽義肝 最も忠義にこりたる、きこをいふ。○唐櫃 「から櫃」の所をいふ。

烏帽子親、烏帽子子 元服の時、烏帽子上にかぶせ、名を付くる人を、烏帽子親といひ、烏帽子親に對して、其のかぶせられたる人を、烏帽子子といふ。

馬郎 駝馬をひきて、渡す人。○格言 法をすべき語をいふ。世する人をいふ。○格言 法をいふ。

鳥頭 花木の名にして、其の形、鳥の頭に似たるを以てかぶさくともいふ。毒草なり。

悒々 うれふるこをいふ。又、志を得ざるこをいふ。○通俗 世間一般の俗人に、通ずる言をいふ。

郡奉行 昔、大小名の命令を奉りて、町村の役を勤めしものなり。

浪人、浪士 主君に別れて、流浪する武士をいふ。

茯苓 松の根株の中に生ずる植物にして、薬に供す。皮は黒くして皺あり。

旅ね 旅宿にれる。○貢物 朝廷に納むるものなり。

殊勝 佛經の語にして、最もすぐれたる徳をいふ。轉じては、奇特、神妙、などいふに同じ。

家苗 細川家、山名家、赤松家、などの苗字なり。○殉死 主君の時を共に死す。

起器 起動器のこをいふ。○起器 起動器のこをいふ。蒸氣を起して死するをいふ。

○院 寺といふに同じ。又、車船など、上皇の御身をもいふ。

宸襟 天子のみ。○海角 岬といふに同じく、海のかどなり。

高材逸足 高材は、才智のすぐれたるはたらきをいふ。逸足は、早足にして、事の早く進むをいふ。

○師名あるに似て 軍を起すに似たり。○倍臣 倍臣ともかき、諸侯の臣を、天子に對していふ。乃ち、又、臣に對していふ。

○唐虞以降 唐は堯の姓にして、虞は舜の姓なり。乃ち、唐虞の姓にして、乃ち、唐虞の姓なり。

きの云々

故に、對多の雪をばれ返すが、其の早きは

れへされたるにほゆきの如く、薄山に、種々の小鳥

が、亂れて飛び出づるも、御かりの原よりはさいふ意

なり。「あがき」は、馬の足をもぐことをいふ。早きは

やみは、早き故になり。みかり野の原は、單に狩野

といふに同く、○海里 一海里は、一緯度の六

十分の一にして、我が

十六町九七 一哩は、我が十四町

五に當る。○哩 四十三間餘に當る。

虐ぐ 非道にさりあり。○案山子 竹藪ふどにて

之に弓矢を持たしめて、田島の間にたしめ、

め、鳥獸をおどして其の害を防ぐものなり。

袖かへす天つ少女もおもひいで

よ云々 古、大瀧人皇子、吉野山に、夢を遺せしに、

たりと。これより、五節の舞はは下まされり。乃ち、古、

吉野の山に天女が來りて、袖ふりかへして、舞をまひ

しさいふ、むかし物語りを、○海嘯 海水の大に

思ひ出でよさいふ意なり。○海嘯 漲りて、陸

り。源平の代より起り、徳川氏に至り

ては、齋藤の士を御家人といひたり。

鬼切、鬼丸 共に名劍の名なり。薄金

冥助 かげより、神の○唐筆畫讚類 支那

軒の端さして登る 軒端から

庭の儀を奉行する人 けまりをする場所

桂の風葉をならす夕には薄陽の

江をおもひやりて云々 「桂の風葉をな

をひくことなり。桂中納言經信稱琵琶の名人なりしを

以てかくばいふ。薄陽の江は、唐の白樂天が、江州の

司法に貶せられたる時、薄陽江といふ所にて、琵琶を

彈する女に逢ひて、琵琶行といふ古詩を作りたり。其

上に至り、人家、田島など。○浩漣 廣く大なる

時令 時候といふ。○宸翰 天子の、御自ら書き

起請 すべて、其のゆゑを、書きし

高皇産靈尊 神皇産靈尊、天御中主尊と共に、

れ給ひし神なり。これ ○冥顯 幽明と、顯世と

庭濼 雨のふりて、地上に ○班田 班田收授の

るにて、古六年毎に、月給を給し、人生れて、六才に

至れば、男子には、田二反、女子には、其の三分の二

を、又、奴婢には、各若干を給與し、而して、

死者の田地は、之を政府に還付せしめたり。

校尉 將校といふに同く、○烏合の衆 櫛

のなき、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

のなか、寄り集る ○家人 その家に仕ふる家來に

荒涼の使かな 物面白くもない、殺風景の使かなといふ意なり。

脇がひ 鶯、眼白等を飼ひて、善き鳴音を學ばせんとす。其の傍に飼ひおくものな。○時のゆければ 「ゆければは行き時勢の變遷して、來たものだからといふ意なり。

時じくものから 時トくは、非時の字にして、其の時節ならぬに、いかに、も、其の時節らしきないふ。「ものから」は、ものながらの略にして、ではあるがといふ意なり。

耻ある一矢をも射さぶらひて 士武

案内者 人ないふ。○准三宮 准后に

袖しほらるゝ 甚しく、悲しきをいふ。

砥の如し 平坦なる。○恭黙 て、口をきり

鳥の名のみやことなりぬすみだ

川云々 鳥平朝臣、隅田川にて、名にしおほいざ

鳥の、費に充つるものさす。○條里 町々といふに同じ。

人の、費に充つるものさす。○條里 町々といふに同じ。

配所 流されたる所をいふ。○旅脇差 旅行の時、

帯ぶる短き。○脈絡 道すぢといふ意なり。

悔の八千度 古今集閑院の歌に、「さきだいの悔の八千度悲しきは流るゝ水の歸り

このなりとあり。○恩頼 おめぐみとの意をさるなり。○酒仙 杜

美の飲中八仙歌に、「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙」とあり。これより

大酒を飲む人を形容。○悌順 すべて、年長の人に

ふい。○振袖 昔、男女共、元服以前に、替たる衣

其の長さを短かめたりと。○租庸調 土地の租

乃ち、米穀なるを以て、那羅などに賦し、或は地方官

の扶持米、則ち俸給なごす。庸調は、絹布、絹帛、其の他、種々のものにして、京都におくり、京都の役

は、兄弟をいひ、「まごの」は、○笏 昔、束帯の

一に集りて並びをなす。○笏 昔、束帯の

最上のもは、牙、次は、木などを薄く削りて作る。

元は、事を忘れたため、之に事を記し、ものなれども、後には、儀式のものとなれり。

氣さきをよる 氣のむいて居る所を、ふきげんにするをいふ。

消息 たづぬること、又、案内することといふ。○帽

烏帽子直垂ながら 略服のまゝと

流石 「まさぐ」の所を見よ。○茶道 殿中にて、茶の役

消極的 「積極的消極的」○海老尾 さいを

徒御 「車副」の所を見よ。○書篋 書物箱の

晏駕 天子の死せるをいふ。蓋し、御葬送の時、常の

行幸と異り、百官、臣民、共に、みしみ奉りて、

ひ、琵琶、又は三味線の、糸巻に近き上部の、後

に曲りて、伊勢殿の尾の如く、なりたる所ないふ。

徒御 「車副」の所を見よ。○書篋 書物箱の

晏駕 天子の死せるをいふ。蓋し、御葬送の時、常の

行幸と異り、百官、臣民、共に、みしみ奉りて、

御駕の委きを、望むよりいひしなり。○射向の袖 袖の左手の袖をいふ。

馬揃 臣下一同の、馬を揃めて、主君之を檢分する式をいふ。

馬の三頭 馬の尾の七部、少しく横によれる所を行なるをいふ。又、三途とも書く、骨相の、三行なるをいふ。○記録所 後三條天皇の朝に、莊園の興政を、矯正せんが爲め、

始めて、おかれたる役所にして、上卿、辨、開闢、寄人などの職を定め、天皇、御親ら、訴訟を聽断し給ひ、大に、大政を、院政、院廳、院宣 天皇、震盪し給へり。○院政、院廳、院宣 天皇、位を

譲り、院中にありて、政を聽き給ふを、院政といひ、其の廳を、院廳といふ。而して、其の院廳より、發する部を、院宣といひ、之に違ふもの。は、違勅に等しき、罪を以て刑せり。

流鏑馬 古、武家の遊戯にして、馬を、一直線に馳せ、走りながらに、鏑矢を以て、三所、或は五所に、的を射る。今、尙ほ、地方の祭禮に、この式を存す。

財施法施 財寶を施して、經文などを、誦讀するをいふ。又、貧者に、財物を惜まず施すをいふ。

悄然 しまれて、心に、憂○胸壁 低き疊壁をいふ。今は、掩壁といひ、之に、大砲の彈丸を防ぐ強硬掩壁と、小銃の彈丸を防ぐ掩壁とあり。

豺狼 山犬と、狼とをいふ。共に恐るべき獸類なれば、かくの如き恐るべき殘酷なる心ある人を形容して。○海を地に轉ず 海を平坦の如く、造進 建築の落成し、塔のこ、たるをいふ。○浮圖 塔のこ、をいふ。

草賊狗盜 小盜人をいふ。○氣韻 氣風の、をいふ。○特立特行 他に、唇を翫す 驚き怪む。○特立特行 他に、へつけられず、只、法律を主とし、○草の蔭 葉草の蔭といふに同しく、○造物の奇怪 天然自然の事といふ。○刻意 意をこらし、來たる奇妙の山。○粉本 畫の下が、壯年をいふ。○粉本 畫の下が、

すを財施といひ、自他を兼利し、能く衆生をして、三界より出でしめて、諸煩惱を斷たしむるを、法施ともいふ。○浩々 ひろく、たるをいふ。○貢聘 かけつぎ物を迎ふ。○唐卷染 鹿の子しぼりの如きものなり。

冥鑒 天は、冥々の内において、人を監督すといふ意なり。

拳々服膺 兩手にて、貴重なる物を、拳持して、之を胸間につけたるが如く、習くも、身を離さず、能く○倉皇 あわただしき守り行ふをいふ。○倉皇 さまをいふ。

時の花をかざす かざすとは、頭に、花をかざすことなり。乃ち、其の時々の、季節にあひたる花を、頭にさす意より勢を得て、時めく方に、従ふを以て、利さすといふにたへたる

○破竹の勢 竹をわるに、初めは、力を要すれども、二三節を過ぐれば、其の餘勢を以て、わけもなく、一散にわれて仕舞ふが如く、始め、二三の敵城を、攻落したる餘勢を以て、其の他の城を、容易に、○海漚 「うたかた」の所を見よ。

冥搜默運 舊事を心中に求め考ふるをいふ。

家々の繪 畫家の流義に、土佐流、狩野流、一蝶の他に、多くあり。單に「家」の繪といへば狩野流なり。○唐のふり 唐風の繪に、圓山派、四條派などの如く、寫眞的に畫けるものにして、外國風ともいふべからん。

時雨も痛くもる山 紀貫之の歌に「白露も時雨もいたくもる山」下葉残らず色つきにけり」とあるに由れり。もる山の守り守山の守り時雨の漏る漏るさなかれたり。守山は近江國野洲郡にあり。○朔風 北風のこ。○唐松 冬葉の落つる松にして、富士松、又は落葉松ともいふ。

泰山に登りて云々 古、孔子といふ、支那の聖人が、泰山に登りて、はじめて天下を小なるものなりとしたり。孟子に「孔子登東山ニテ登登三泰

國文通釋 十畫之部

悄然 しまれて、心に、憂○胸壁 低き疊壁をいふ。今は、掩壁といひ、之に、大砲の彈丸を防ぐ強硬掩壁と、小銃の彈丸を防ぐ掩壁とあり。

豺狼 山犬と、狼とをいふ。共に恐るべき獸類なれば、かくの如き恐るべき殘酷なる心ある人を形容して。○海を地に轉ず 海を平坦の如く、造進 建築の落成し、塔のこ、たるをいふ。○浮圖 塔のこ、をいふ。

草賊狗盜 小盜人をいふ。○氣韻 氣風の、をいふ。○特立特行 他に、唇を翫す 驚き怪む。○特立特行 他に、へつけられず、只、法律を主とし、○草の蔭 葉草の蔭といふに同しく、○造物の奇怪 天然自然の事といふ。○刻意 意をこらし、來たる奇妙の山。○粉本 畫の下が、壯年をいふ。○粉本 畫の下が、

悄然 しまれて、心に、憂○胸壁 低き疊壁をいふ。今は、掩壁といひ、之に、大砲の彈丸を防ぐ強硬掩壁と、小銃の彈丸を防ぐ掩壁とあり。

豺狼 山犬と、狼とをいふ。共に恐るべき獸類なれば、かくの如き恐るべき殘酷なる心ある人を形容して。○海を地に轉ず 海を平坦の如く、造進 建築の落成し、塔のこ、たるをいふ。○浮圖 塔のこ、をいふ。

草賊狗盜 小盜人をいふ。○氣韻 氣風の、をいふ。○特立特行 他に、唇を翫す 驚き怪む。○特立特行 他に、へつけられず、只、法律を主とし、○草の蔭 葉草の蔭といふに同しく、○造物の奇怪 天然自然の事といふ。○刻意 意をこらし、來たる奇妙の山。○粉本 畫の下が、壯年をいふ。○粉本 畫の下が、

悄然 しまれて、心に、憂○胸壁 低き疊壁をいふ。今は、掩壁といひ、之に、大砲の彈丸を防ぐ強硬掩壁と、小銃の彈丸を防ぐ掩壁とあり。

豺狼 山犬と、狼とをいふ。共に恐るべき獸類なれば、かくの如き恐るべき殘酷なる心ある人を形容して。○海を地に轉ず 海を平坦の如く、造進 建築の落成し、塔のこ、たるをいふ。○浮圖 塔のこ、をいふ。

草賊狗盜 小盜人をいふ。○氣韻 氣風の、をいふ。○特立特行 他に、唇を翫す 驚き怪む。○特立特行 他に、へつけられず、只、法律を主とし、○草の蔭 葉草の蔭といふに同しく、○造物の奇怪 天然自然の事といふ。○刻意 意をこらし、來たる奇妙の山。○粉本 畫の下が、壯年をいふ。○粉本 畫の下が、

悄然 しまれて、心に、憂○胸壁 低き疊壁をいふ。今は、掩壁といひ、之に、大砲の彈丸を防ぐ強硬掩壁と、小銃の彈丸を防ぐ掩壁とあり。

豺狼 山犬と、狼とをいふ。共に恐るべき獸類なれば、かくの如き恐るべき殘酷なる心ある人を形容して。○海を地に轉ず 海を平坦の如く、造進 建築の落成し、塔のこ、たるをいふ。○浮圖 塔のこ、をいふ。

草賊狗盜 小盜人をいふ。○氣韻 氣風の、をいふ。○特立特行 他に、唇を翫す 驚き怪む。○特立特行 他に、へつけられず、只、法律を主とし、○草の蔭 葉草の蔭といふに同しく、○造物の奇怪 天然自然の事といふ。○刻意 意をこらし、來たる奇妙の山。○粉本 畫の下が、壯年をいふ。○粉本 畫の下が、

家々酔ひ人を扶けて云々

唐の張演の詩に「驚」

山下稻梁塵、豚糞雜酒糝、桑原、桑柘斜、影春社散、家々扶醉人歸」とあり。

荒れにし後は云々

新古今集に「人すまぬ不破の屋の板庇あれにし後はたゞ秋の風」とあり。

の風」とあり。

范蠡が吳國を覆し

「勾踐の耻を忘る」の所を見よ。

翁らがさがな目にも云々

翁は、大宅の世繼翁なり。

馬道

禁中の條側にして、これより、馬に乗ることを許さるゝよりいふ。

唐綾

支那より渡來せし綾をいふことも、又、今の輪子なりともいふ。

浮紋

紋のしげく附。○唐のやまとの風唐

や、日本風や、さまざまに意を用ひたるなり。

リ。乃ち、この大鏡といふ本は、世繼の物語りせしを記し、体に仕組みたれば、わざとかくはひしなり。

家居にこそ云々

住宅の様子によりて、主人の心持ちにあらなり、其の

他の萬事をも、おしほ

○蚊遣火

蚊をおひにがす爲に、種々

の物を火に入れて、

○桃尻

馬に乗りて、其の股のすわらぬをいふ。

馬鞍をのみ重くし

平氏の勢盛にして、其の武士ども、文事を外

にして、戦時必要の馬鞍の如き

馬鞍をのみ重くし

浮雲のおもひをなせり

浮き雲の所定めざるが如く

に、心の定まらず、

安心せざるをいふ。

袖のみなどの浪はやすまで

袖を漕き見な

し、涙の袖に絶えぬをいへり。

夏ごろもはやたちかへて

衣がへの、

陰曆の四月に、春の衣を、夏の衣を、取り替ふる儀なり。

時をもさとりしめ給ふ

御崩御の時間を能く御承

知になりてなり。

柴のいほりのたゞしばしと云々

四行の歌に「いづこにもすまれずばたゞすまであらむ柴のいほりのしばしなる世に」とあるに由れり。

時しもあれや

時もあらうに、さいふ意なり。

鳥の頭白くなるとも

事文類聚に「燕太子丹爲レ買ニ於秦」

秦不禮、乃求歸、秦王曰待、鳥頭白馬生、角當ニ於子歸、太子仰レ天哭感、得ニ鳥頭白馬生、角、秦王大喜遣レ舟歸、

さあり。又、後集に「山がらす頭も白くなりけり我がかへるべき時や來ぬらむ」とあり。これらにより

○馬筏

馬を水中に井べて、筏の如くするをいふ。

鳥帽子せさせて彼が名とす

ていふ

ふ意にして、乃ち、其の岩に、龜といふ名をかぶせて、龜石といふさなり。

庭の蓬も露かけくひま云々

新集に「尋

能をつかむとする人

藝能を身に付けんとする人をいふ。

連山波濤の如し

岑參の詩に「塔勢如連山若二

波濤、奔走似、朝、東云々」とあり。山の高低を波濤に見立てたるなり。

根來寺

紀伊國那賀郡根來山にありて、大傳法院といふ。

荒駒のあゆみ

荒駒は、牧より出でたばかりの馬にして、其の歩調さしものは

す、よくならずして、はじめて調子よく歩むやうになるなり。

海士のまてがた

諸説ありて未定なり。海士の兩手を磨けて、海に入る

をいふさし。

庭の蓬も露かけくひま云々

新集に「尋

れてもさばれしことは昔にて露のみ深き蓬の宿、又、續後拾遺集に「君ひさりさめぬからにやわが宿の庭も露

けくありぬべらなり」

などあるに由れり。

時あるも時なきも

時は、盛の時にして、時めきてあるも、時め

くもてなし給へといふ意なり。○翁羅 藤羅ともいひ、熱

帯地方。○胸中の烟霞を以て云々

我が見たる所の風景を、御老人に、御話し申したしといふ意なり。

哥亞國 印度の臥亞にして、孟買の南にあり。今は、葡萄牙に屬せり。

海參 さまこの乾した。○郡代 代官の上るものなむ。○郡代 代官の上

高祖榮陽に圍れし時 高祖、楚の項羽に、榮陽に圍まれたる

時、事甚だ急なりければ、漢の將軍紀信、自ら漢王の

車に乗り、欺きて楚に降るといふ。其の隙に、高祖還

く逃る。依りて。○狼籍 「狼藉」草而臥難、披雜紀信は難に死す。○桑門蓮胤 桑門は僧侶の

稱しては、亂暴をもいふ。○桑門蓮胤 僧侶の稱しては、亂暴をもいふ。○桑門蓮胤 僧侶の

馬のはなむけ

旅立つ人に、別れを告ぐる時、

方へむけて、酒をすいめなどして、門出を祝ふをいふに

至れり。こゝにては、門出を祝ふ酒宴なり。

海賊むくいせんと云々

紀氏在任中は、鋭意諸制を勵

行し、嚴しく海賊等を戒めし故、今、紀氏の歸國せん

とするをききて、怨を報いんとするなり。こは、藤原

純友等の餘黨なりといふ。

釘ぬきなどいと多かる 「釘ぬき」こは、標の類なり。

秦旬の一千餘里 和漢朗詠集に「秦田之二千餘里の間、月光似氷云々」とあり。

海行かばみづくかばね云々 「山行かばね」の所を見よ。○卿相雲客 相稱

十一畫の部

能引いて 「よびいて」の所に出づ。○野相公 「相公」の所を

見。○陶朱の富 其の身代、王侯の身代にも、陶

朱は、越王勾踐の臣たりし、范蠡の事にして、越王を

輔け、吳を亡して後、陶といふ地に止りて、大に富み、

自ら、陶朱公。○御宇 天皇の、御代を治さ稱したり。○御宇 天皇の、御代を治

婆羅 「ぼろれを」○御 御前の略にして、婦人の

御「談路の御」○紅茶 支那より出でたる、其

の煎汁に、紅色を帯ぶる。○紅毛人 昔、和蘭人

稱なり。其の頭髮の色、○渚葦 渚に生えた。紅色に似たるを以てなり。

こは、大中納言及び三位以上のの人にして、雲客とは、四位以上の殿上人をいふ。

紀行 道中の日。○後方羊蹄 今の後志の

常經 正しき道。○袞龍 天子の御即位、大嘗會

ふ御禮服をいふ。其の色赤く、日。○宿根 其の

苗枯れて、根のみ残り、翌年、それより、苗を出すも

のなり。此等の種類に屬するものを、宿根草といふ。

商山の四皓 東園公、綺里季、夏黃公、角里先

人。○梭の如し 梭は、機を織る時にたて糸

人馬の通行はげし。○祭政一致 神を祭ること

事なりといふことなり。○産靈の神 高島

尊、神皇產靈尊 ○現世 過去と、未來との中間の二神をいふ。

國庫 政府の金ぐ ○國本を固くす 農は

本なりといへば、農民の身體を、強壯にし、智識を増すは、乃ち、國の本を強固にするものなり。

烽火臺 烽火をあぐる臺なり。烽火さば、狼煙とも書き、古、軍中にて、相圖に打ちあぐる煙

火の如き ○祭壇 祭をなす爲めに、高くものなり。

祭文 祭の席にて讀む文章、 ○清酌時差 清

酒と、其の時節にあひ ○崩る 天子の死するこ

たる、供物をいふ ○崩る 天子の死するこ

貪汚 物をむさぼりて、行 ○啼く 乾く

常磐堅磐 永久變らぬをいふ。堅磐は堅き岩の約りたるにて、堅固なるをいふ。

脚色 芝居、狂言など ○國史舊記 日本

の意 ○帷を下す のれんを、かけてなどいふなり。意にして、學問所を開く

なり。 ○悠然 ゆつくり、又、久

粗學 學問の淺 ○倚信 頼みにして、信

架紉 支那の、夏の代の、末世に出でたる天子を、架

ふ。共に、暴政を行ひ、民を殺して、樂せり。之より、暴君を稱して、架紉といふ。

貨 錢をふや ○啓沃 君を導きたす

祭酒 古の、大學頭の唐名なり。 ○晦冥 空のまつくら

蝮蛇 くちなはの、大 ○健歩 足の速者な

張皇 大げさに言ひふら ○清樂 風流の樂

強飯加餐 飯を強ひ、餐を加ふるの義にして、

眞帆 追風にかけた ○眞砂 細き砂

字義の如き、小さな所 ○逸史 普通の歴史に、も

字義の如き、小さな所 ○逸史 普通の歴史に、も

に、眼をつけぬをいふ ○悠々の徒 おちつきはらつて

る書物なり ○悠々の徒 おちつきはらつて

清廉謹慎 よく心なく、萬事に ついしみるをいふ。

夢幻泡影 仰めさ、まぼろしと、あわさ、かげさ

なり。共に、さりさめのなき、はかな

きもの ○訟を断じて平にす 訴訟事

をいふ。 ○訟を断じて平にす 訴訟事

閉扉 こぢまりの ○座像 すわりたる

陳跡 舊跡をいふ ○淺まし の所を見よ

庶民 平民をいふ ○陶磁器 陶器と、磁器と

以て製し、磁器 ○理財の關節 理財は、經

商估 「工匠商估」 ○辰筆 宸翰に

淫祠 みだらなる神社をいふ。乃ち、 ○産穢

産みたるけ ○虚人 身體のよわ

理不盡 や、なごいふに同。 ○國司 昔、

六十六國、二島におきたる、地方の官にして、長官

を守、次を介、乃ち次官、次を權、次を目といふ。

野老 夏の長き草なり。菓は、山の芋の葉に似、根も、

赤山の芋の根に似たり。蒸して、之を食へば、

味甘 ○得撫 新知 擇捉 共に北極

鳥目 古の錢の異名なり。錢の中の穴、鳥

野鷄 鷄の屬にして、山に住み、腰に、長き毛の、麗

は、美味にして、最 上の料理に用ふ。

梨棗を費す云々 梨棗は版本の、ことなり。即

んが爲に、わざと版木を起して、出版するものとは、余程の違ひありとの意なり。

拘摸 往來にて、人の携へ居る品物を、かすめ取る人なり。なにいふ。きんちやくきり、ちぼ、などいふに同じ。

○後矢射る みたたりしもの、却りて、我れに向いて、矢を射りけ、敵意を示すなり。○國老 大小名の、臣の長をいふ。家老といふに同じ。

哺時 夕飯時のことなり。

勘定奉行川路聖謨 勘定奉行とは、古の武家の役にして、租税、戸籍などの事を司り。之に寺社奉行、町奉行を合せて、三奉行といふ。○崇禎 社といふ。○掟て侍り 言ひきかせて、戒めおこなふ。○陰陽五行 陰陽は、支那の理學の名にして、易とせる場合に用ふる語にして、男を陽とすれば、女を陰、晝を陽とすれば、夜を陰、火を陽とすれば、水を陰、春を陽とすれば、秋を陰とするが如し。五行は、「七星五行」の所を見よ。

陪臣 「陪臣」の所を見よ。○陰陽師 昔、陰陽寮に屬せし者なり。陰陽頭は、加茂、阿部の兩家、第一の者に任ず。○専途、先途 進み行くべき所を参考せよ。○異端俗學 異端とは、又、結局の場所といふに用ふる所もあり。○異端俗學 異端とは、しき教へに反したる老莊の教をいひ、俗學とは、稗史小説の如きものをいふ。

脱肛 肛門の出づる病なり。○國府 昔、各國におかれたる、地方府の所在地にして、府中といふに同じく、今も地名となりて、現存せる所あり。

野合の合戦 歴々のなき、平地にてなす、戦争なり。○深窓 奥深き御殿をいふ。○眞率 さりかざりなく、有りのままなるをいふ。○眞率 ありのままなるをいふ。

眞木 幹に意を述べしにて、世の感無量なり。

陪臣 「陪臣」の所を見よ。○陰陽師 昔、陰陽寮に屬せし者なり。陰陽頭は、加茂、阿部の兩家、第一の者に任ず。○専途、先途 進み行くべき所を参考せよ。○異端俗學 異端とは、又、結局の場所といふに用ふる所もあり。○異端俗學 異端とは、しき教へに反したる老莊の教をいひ、俗學とは、稗史小説の如きものをいふ。

脱肛 肛門の出づる病なり。○國府 昔、各國におかれたる、地方府の所在地にして、府中といふに同じく、今も地名となりて、現存せる所あり。

野合の合戦 歴々のなき、平地にてなす、戦争なり。○深窓 奥深き御殿をいふ。○眞率 さりかざりなく、有りのままなるをいふ。○眞率 ありのままなるをいふ。

眞木 幹に意を述べしにて、世の感無量なり。

陪臣 「陪臣」の所を見よ。○陰陽師 昔、陰陽寮に屬せし者なり。陰陽頭は、加茂、阿部の兩家、第一の者に任ず。○専途、先途 進み行くべき所を参考せよ。○異端俗學 異端とは、又、結局の場所といふに用ふる所もあり。○異端俗學 異端とは、しき教へに反したる老莊の教をいひ、俗學とは、稗史小説の如きものをいふ。

脱肛 肛門の出づる病なり。○國府 昔、各國におかれたる、地方府の所在地にして、府中といふに同じく、今も地名となりて、現存せる所あり。

野合の合戦 歴々のなき、平地にてなす、戦争なり。○深窓 奥深き御殿をいふ。○眞率 さりかざりなく、有りのままなるをいふ。○眞率 ありのままなるをいふ。

眞木 幹に意を述べしにて、世の感無量なり。

淳をはなれ樸を去る すなほの道の、なくなるをいふ。

紀傳志 紀傳體歴史の術語にして、紀は、帝王の御一代を主として書き、傳は、人臣一代の經歷を記し、志は、紀傳の外に、天文、地理、禮樂、政刑などを、記述したるものなり。

訥 辯舌のわる。○得色 いたり顔。○宿酒 昨夜のみし酒。○貪吝 よくどうし。○國造 國の御臣の義にして、上古、朝命を奉り、一國の政務を、祭祀を司る役なり。

後卷 後詰といふ。○偏髻を剃らる 髪を剃らるるなり。○陰陽 寒暑をいふ。○常憲院殿 德川五代將軍綱吉公をいふ。

猛虎も鼠となる 李大白の詩に「君失れば、虎も鼠となる」。乃ち、門閥にして、政を執れば、賢才の用ひられず、時勢を見るも、救ふこと能はざるの意なり。

部屋附 「内通詞云々」の所を見よ。○菜色 青菜の饑にして、食物足らず、衰へたる顔色の形容なり。

陸王二氏の説を喜ぶ 陸象山と王陽明と。大哲學者なり、朱子學を脱して、陽明學を唱へ、一時、世の中を風靡せしめたり。

粒々辛々 一粒／＼の辛苦。○探題 北條時義隔せる重要な地に、置ける地方官にして、地方の事を奉行し、外交の事を司る。

梵刹 寺のこ。○乾坤の外 天地の外。○常世の橘 常世は、外國をさしていふ。垂仁天皇の朝に、田道間守を、常世國に遣して、非時香菓を求めしむ。非時香菓は橘をいふ。蓋し、非時は、不斷常住の意にして、橘の菓は、夏より冬に至りて、有る。○後室の化粧 夫の死に乃ちこけの化粧して、身。○釣殿 水に臨みたる家をいふ。

鳥ととも 鳥がなくて、同時にさいふ意にして、早朝さいふこさなり。

密煎 あまづらさいふ、蔓草の汁を、さりて製し、砂糖に代用せしむるものなり。

後の道行きよりの日記 古に對して、後に、更科日記のこさなり。更科日記は、菅原孝標の女の著にして、一條天皇の、寛仁四年より、後冷泉天皇の、天喜二年まで、三十六年間の、折りにふれたる事どもを、記したる書なり。

野ら らは、添へたるにて、單に、野さいふに同ト。「野らに同ひて」は、野らに居る、自性に同ひてなり。

渚 「なぎさ」の所を見よ。 啓す 皇后宮、春宮なり。上にする

祭主 伊勢神宮の、神主の長をいふ。 帳 おとちやの如きものなり。 着籠 上着の下に着る、籠の一種なり。主に、くさりのたびら。

鹿首 海老尾の本の所をいふ。

御裳濯川の流 天子の御血 國風 我が國の

御曹司 風俗をいふ。轉じては、風俗のあらはれて居る、詩歌などいふ。

御勝の御方 大田家より入りて、家康の龍を得、阿規の方ともいふ。

御臺所 大臣、大將、或は、將軍の妻を、敬ひていふ。略しては、御臺ともいふ。

達尊 天下に通じて、尊むべき人さいふ意なり。孟子に「天下有達尊三、爵一、齒一、雲々」

晨夜 あけくれと 冤罪 無實の罪をきるを

御手のものども 手下のものともなり。

移の馬 乗り換への馬をいふ。 御稜威 稜威に同ト。

參観 参り觀る義にして、古、大小名の、年を定め、領地より、江戸に至り、幕府に、在勤する

參差 相互に、入り交りたるをいふ。 倦容 物にたるをいふ。

淺茅 「あさち」の所を見よ。 倚廬 すべ

鹿毛 馬の毛色の、鹿の如く、茶色なるをいふ。

問注所 鎌倉時代の、裁判所にして、長官を、執事といひ、掛官を、寄人といふ。乃ち、原告、被告の申分を問ひて、註記し、

羞惡 羞は、己の不善を以て、厭惡、斷獄を取扱ふ。 羞惡 羞は、己の不善を以て、厭惡、斷獄を取扱ふ。

雪の曙 櫻の花の盛りのはぢ、雪は、人の不等をにくむをいふ。

偏諱 片名、乃ち、名前の一字をいふ。 莊嚴 りしく、うるはしきをいふ。立派といふ。

清野 其の土地に有る物を、悉く、取り除け、或は、やきはらひて、敵の宿すべき家、食ふべき食物

咬々 眞白くさえるを、なからしむる計略なり。 炯々 きらきらいふ。

符節 割符をいふ。割符とは、木片を二つにわり、之に、文を記し、証印

黒潮 赤道直下より、流れ来る暖流にして、其の色、黒きを以ていふ。 埠頭 波止場の所をいふ。

宿將 祖父以來

異域の鬼とならしむる勿れ 異域と外

許先帝以驅馳 先帝、芝罘公には、身を惜しまず、諸方をかけ廻ることを承諾した。 停年 其の職に、留り居る年限をいふ。

得長壽院 今いふ、三十 進止 さりさば

措辨 さりさばき 淋漓 液體の

國字本 假名字にて、書

倪黃

倪雲林也、黃一峰にして、共に支那元の代の、名高き畫家なり。

笨拙

愚鈍して、自らを、下○兜の星に、連手といふことなり。

堵に安んず

安堵と同、安心

康福

安全なること、幸さなり。

崇高森嚴

たつさくして、け

深奥雄大

奥深くして、甚だ大なるをいふ。

舵機

かちをさる。機をいふ。

蛇も蜂もとらず

何一つ、得ることなきをいふ。但願なり。

國主領主

普通の歴史に、舊きもの。こされたる形跡をいふ。

桶側洞

鐘の洞の、左の脇に、同所を見よ。

梨園

やくしやをいふ。唐書に「明皇既知音律、又酷愛法曲、選坐部伎子弟三百、教三千梨園」とあり。蓋しこれに基きしならん。

曼陀羅

極樂淨土の實相をうつしあらはし、梵字を種子に、百千无量の形を出現したる圖をいふ。

黒餅

圓形の中に模様なき紋所をいふ。旗幕などに付く。

陳蕃が慨然として云々

陳蕃は後漢の人物にして、字は仲舉、幼年より奇名を顯したり。十五才の時、一室を取り亂しありたる折りしも、父の友人某來り、戯に陳に向ひ「何故室を掃除して、賓客を取り扱はぬぞ」といひしに、陳答へて「大丈夫の世に居るや、當に天下を掃除すべし、何ぞ一室を事せん」といひたり。靈帝の時、大傳給尙書事となり、後讒にあひて殺されたり。

國事犯

政事に關し、時の政府に反對して犯したる罪をいふ。

處士

官に仕へず、家に居るものをいふ。孟子に「階級放恣、處士橫議」とあり。

し。常に山中の穴などに棲めり。

異朝の人さへ日本刀の歌を作る

歐陽永叔の詩に「昆夷遠道不三復、世傳切玉誰能究、寶刀近出日本國、越買得之之滄海、東、魚皮裝貼香木、黃白前雜錦與銅、百金傳入三好事手、佩服可三以顯、妖凶、傳聞、國居、大島、土製、沃、風俗好、其先徐、詐秦民、探、樂、淹留、留、童老、百工五種與之居、至、徐、器玩皆精巧、前朝貢獻、往來、士人往々工三國、徐、福行時書未、逸書百篇今尙存、令嚴不、傳、中、國、舉世無人識、古文、先王大與、夷、若、波、浩、蕩、無、通、津、令人感激坐流涕、鑄、澁、短、刀、何、足、云、とあり。これと四五文字を異にせる司馬溫公のもあり。これらをかきし

ていへる。○眞珠 多くは、あこや貝より出づる珠なり。貝などより出づる珠

銀色にして五色の彩を放ち、形は圓くして、服用よし、又寶玉と共に、裝飾品とす。

○陵戸 御陵を守る民にして、陵毎に定員あり。治部省諸陵司において之を支配す。

深き謀を帷幕の中に運らす

「蔡を帷幕の中

にめぐるす」に同。桶側洞 鐘の洞の、左の脇に、同所を見よ。

由に屈伸し、右の脇下にて合ふやうに作りたるものなり。

○梨園 やくしやをいふ。唐書に「明皇既知音律、又酷愛法曲、選坐部伎子弟三百、教三千梨園」とあり。蓋しこれに基きしならん。

曼陀羅 極樂淨土の實相をうつしあらはし、梵字を種子に、百千无量の形を出現したる圖をいふ。

○黒餅 圓形の中に模様なき紋所をいふ。旗幕などに付く。

陳蕃が慨然として云々 陳蕃は後漢の人物にして、字は仲舉、幼年より奇名を顯したり。十五才の時、一室を取り亂しありたる折りしも、父の友人某來り、戯に陳に向ひ「何故室を掃除して、賓客を取り扱はぬぞ」といひしに、陳答へて「大丈夫の世に居るや、當に天下を掃除すべし、何ぞ一室を事せん」といひたり。靈帝の時、大傳給尙書事となり、後讒にあひて殺されたり。

○國事犯 政事に關し、時の政府に反對して犯したる罪をいふ。

○處士 官に仕へず、家に居るものをいふ。孟子に「階級放恣、處士橫議」とあり。

商鞅 衛の公子にして、刑名の學を好み、魏の相公叔坐に仕へ、後、秦の好公に仕へ、變法の令など布き、藩刺の政を行ひ、遂に、○御守殿 魏川墓王のために車製せられたり。

の時、將軍家の女にして、三世以上の階級に嫁したるもの、居所をいふ。

淨瑠璃 織田信長の侍女、小野おつうといへるものに合せて、かたれるを始めとす。と言ひ傳へたれども其の以前において、既に、世に行はれたること、宗長日記に見えたり。

○常憲院殿 魏川五代將軍綱吉公をいふ。

深衣 括要にいふ、「古者衣裳不、相運惟深衣上下相運は、白細布にて、裳は十二幅として十二ヶ月に應じ、交之を解き裁ちて、上狭く下廣く、袖には袷なくして筒となり、襟は強に至るまで一直線に附けられたり。

御耳のうときやうに 俗にいふつんぼのさまをいふ。

○假名世説 支那の世説にならひて作りたる書なり。

陰德を積みて云々

易經に「積善之家必有余慶」種不善之家必有余殃

○陰氣深し

樹木の茂りて、日あたりの悪しきないふ。

陰には

ふに同じい。

○御息所

皇子皇女を生み奉りたる女

官を敬ひ稱したるなれども、轉じては、東宮親皇の御妃を申し奉るに至れり。

御禊

身洗の約せられたるにて、身に、不淨、又は罪ある時、河原に出で、水にて身を洗ひ清むる

○野の行幸

天をいふ。陰曆六月と、十二月の三十日に行ひし儀なり。

○望月

陰曆十五夜の望月をいふ。

鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも云々

鳥部野、舟岡は、共に、京都の邊隅にある葬式場にして、其他の野山なる葬式場にも、毎日、葬送する人の多い日はあるけれども、一人も送らぬ日は一日もなしとなり。

梓に乗りて海に浮はん

世をさくるため、梓にのり

て、海に浮び、海島にかくれんといふ意なり。論語に「道不行、乘桴浮于海、從之者其由與」さあり。

混々たり

止まず水のわき出づる状をいふ。

銃打つたるに

銃は折り釘をいふ。乃ち、擲の上に之を打ちつけ、拳より矢の脱れぬやう。

○張良にも劣らず

張良は、漢の高祖の臣にして、智謀に長し、遂に漢の宰相となり、項羽を滅したり、張良曾て、下邳の橋邊にて、仙人黄石公にあひ、之が爲めに、其の仙人の橋下におさしたる履をとりて奉り、風塵を興へられて試みられしが、遂に感らざりしを以て、黄石公より、種々の方術を傳へられしとす。

黒きすぢはすくなりき

黒髪は一本も無くなりたると、年老いたる状をいふ。

○庸醫

俗にいふやぶ醫者なり。

虚器を擁す

名のみありて、其の實徳のなきをいふ。

窓の梅の北面は云々

和漢朗詠集に「池凍東風度未解、窓

○旃檀の板

高祖をさす

に、右の船上にかけ結びて、之を蔽ふ具なり。形も、製も、袖を小さくせしもの如し。

張輿

略儀に用ふさも、又は罪人などの乗る時に用ふさもいひて、外を疊表にて張り、押縁を打ちたるなり。

○張巡厲鬼となりて云々

唐書に「十月癸丑、賊攻城、士病不能戰、巡四面拜曰、孤城備竭、非二能全、臣生不報三陛下、死爲厲鬼以厲賊」さあり。乃ち

○過去帳

僧家にて、死者の姓名、法名、これをいひたるなり。

○唯稱す

をいふ返辭す

○異位重行

古、公事儀式などの時、公卿の内裏の庭に立ち並びたる配列にして、親王以下、參議、非參議、三位以上の一列に并ぶを異位

○粘臍

あぶらにてあげたるもちをいふ。

○探韻

韻を探り取り文章を作

○宿世

過ぎ去りたる世にして、前世といふに同じい。

執行

寺院の事務を取りあつたふ職をいふ。

○康熙以來

康熙

清朝の初の年號なり。乃ち、清朝以來といふに同じい。

莫斯哥未亞

魯西亞のこことなり。

○眞情徑行

眞心のまゝをいふ。

○宿禰

古、臣下を親みて賜りたる姓なり。「藤井宿禰」二宿田宿禰」など

後の世の契の爲にのこしけり云々

未來にて佛に縁を結ばんが爲め、我國、佛寺の根原さもいふべき、この天王寺に、かくは一筆を残しおくこの意なり。むすぶは契を結ぶに、水をむすぶの縁をもたせたり。「水くき」は全所を見よ。「四天王寺」を参照。

○衰衣

衰龍と同く、天皇の御衣をいふ。

魚鱗がよりにかける

魚鱗は、古、軍陣における陣

立ての名にして、鱗の並びたる如く、順序正しく兵を並ぶるをいふ。乃ち、魚鱗に陣立てして突き入りたる

○推膚脱がせ給ひ はだをおしぬぎてなり。

夢に道行く心地 ゆめうついなる心地をいふ。

脚巾 「はき」の所を見よ。 ○野伏 山伏のことをもいへど、山野などにさす

○混々と飛び下る 混

黒木の御所 山から取り出したまもの、丸木にて作りし御所なり。

貧道 僧の自分を賤めていふ詞なり。

晝の御坐の劔 天皇の晝間居給ふ御殿に在る御劔なり。この劔は、清涼殿

の東、平敷の南端にありて、朝は東に、朝は西に向ひたり。古は、御世毎に、新造せられたりきさず。

笛藤の弓 藤を、笛巻の如く、巻きたる弓をいふ。 ○梟悪 暴虐

をいふ。梟は、夜中、小鳥を取り食ふよりくばいふ。

猪首に着る 少し仰向けて被るをいふ。乃ち、敵を恐れぬためかくするなり。

紅葉亂れて云々 古今集に「立田川紅葉みだれて流るめりわたらば錦

中やたえなむ」さあり。

都府樓纒看五色云々 菅原道真の不出門の詩に「一從三

觀音寺只聽鐘聲、中懷好逐孤雲去、外物相逐滿月迎、

此地觀音雖三月無三檢緊、何爲寸步出「門行」さある詩の句なり。都府樓は太宰府の官舎にして、觀音寺は、

天智天皇創。○涯分 其のかぎりとする所の寺なり。

宿鴉馬 赤を帯びたる。つき毛をいふ。 ○清見天皇 天武

を申し。○後徳大寺のおとゞ 大炊御門右大臣公

能公の子左大臣。○祭の頃 單に祭といへば、加賀の祭禮をいふ。同

祭は陰曆四月中の。○荷前の使 荷前は初穂にて、諸國より

萩のやけ原かきばらひ云々 後醍醐

ふよりは萩のやけ原かきばらひ若菜つまんさ誰をさそはん」さあるに由れり。

夢より霜やむすぶらむ 夢見るをも結ぶくをも結ぶといひ、草枕するをも結ぶといふ。乃ち、この三の結ぶをいひたり。

陸奥のけふの寒さを云々 無名抄に、「けふの朝

布といふは、陸奥より出づる、鳥の毛にておりける布なり。多からぬものなれば、はたばりも狭く、廣みもみど

かければ、上にきる事はなくて、小袖などの襟に下にきるなり」さありてその細布に、今日の寒さをいひたり。

ついでた。○雪は鷲毛に似て 白居易の文集に「鷲毛

鷲毛二飛散亂、人被三鷲毛」さあり。○宿業 如何なる前世の因果にていひ

ふ意。○望郷の鬼 鬼は幽魂の義にして、魂魄の故郷を望む意なり。武陵

の詩に「辭國幾經歲、望、望空見山」さあり。

奉る買物を、十段八基に、進らせ給ふ使をいふ。○清猷公 宋の衛州の人にして、

道并、字は國道、仁宗、英宗、神宗の三帝に仕へて參政に至れり。

夢にも人をなどむかしをわざと云々 伊勢物語に「ゆきくつて駿河の國に至りぬ。う

くらうほそきに、つたかえではしげり、物ごころほそく、すゑなるめをみるこそいふに、すぎやうざあ

ひたり。かゝる道は、いかでかいまするさいふを見れば、みじ人なりけり。京にその人の御もごにさして、文

かきてつく「駿河なるうつの山へのうつ」にも、夢にも人にあはぬなりけり」さあるをいへり。

都までかたるもとほしおもひねに云々 あが思寝にしたふ、むかしの人に見えたる

夢は、都の人の許まで言ひ送るも、其の距離甚だ遠きを感じその意なり。遠は、昔の遠きと、京都の遠きをかけたなり。

戚里の寄 外戚の重き家柄をいふ。

御階の櫻さやぎけむ 孝明天皇の御製に「錦さりてまもれものいふ九重のみほしの櫻風さやぐなり」とあるにこれなり。

御酒の勅使 侍従の所に、御酒を下賜するの儀につきて、勅使のたいせらるゝなり。

御修法 僧を賜めて、祈り行ふをいふ。

御幸 皇上の御出ましをいふ。かく、天皇の行幸、皇后の行啓を區別すること故置なり。

御壺 慶殿、御座など、建て廻らしたる中の壺をいふ。

都をばひとつにいでし朝日山云々 朝日と共に、都を立ち出で、この朝日山に来て、まだなめあわぬうちに、春の永き日も、はや夕暮になれり。

符契 符節をいふに同じく、判符の意なり。

執し思召して 執心といふに同じく、深く心留りて、思召し。

陰陽を和げ 令體解に、「變者也和理者治たるをいふ。」

國忌薨奏 國忌は、天皇の御忌日にして、薨奏は、奏去を奏聞するをいふ。

御藥 古、陰曆正月三日の三ヶ日、御藥酒を陛下に供する儀式なり。

深心院 基經公の院なり。

鳥鵲南すと咏ぜし君 鳥は鳥の誤なり。曹操字孟徳の短歌行に、「月明星稀鳥鵲南、繞樹三匝無枝可棲」とあり。

曹孟徳の智略 前文の大風、鳥鵲に應じたる文なり。

荷前の箱のをにもなど 萬葉集に「東人の荷の緒にも妹が心によれりけるりな」とあるにこれなり。

御國ぶりの要を得たり 島國人は、本来の誠心を以て、物事に感下、無言の中に、奥所を極むるを習俗として、虚飾を尊ぶことなきをいへり。

御國ゆづりの節會 天皇、皇太子に、御位を譲り給ふ時の節會をいふ。

○堂々 盛大なる状をいふ。論語に、「曾子曰、堂々乎張也」とあり。又、曾子に「堂々之陣」とあり。

○酌酒 酌は、酔ひてくさるひをいふ。

約をいるゝ窓よりす 窓は、正しき入り口なり。受くる所なり。乃ち、謙むる明光をみせめたる所に簡約なることを入れて訓れば、十分に理解すといふことなり。易經に、「納約自牖終无咎」とあり。

御國ゆづりの節會 天皇、皇太子に、御位を譲り給ふ時の節會をいふ。

○逸樂 遊興をいふ。

○御佛名 陰曆十二月十九日より三日間、禁中にて行はるゝ佛事をいふ。

也、言太政大臣佐王論道以經、諱國事一和、理陰陽二則是有徳之選、非三分掌之職、爲先其分職、故不稱學、假

之稱之紀、燕及三其、○紀綱 政事をいふに同じ。君子爲國張其綱紀、又

培克 税を過分にさりたつるをいふ。

御國ゆづりの節會 天皇、皇太子に、御位を譲り給ふ時の節會をいふ。

○窓の雪 古、支那の孫康といふ人、雪を集めて燈に代へ、以て勉學したる故事。

○頃 田百畝をいふ。

○嘯時 日暮をいふ。

野花啼鳥一般春 野花も開き、鳥もうたひ、なれり。

○陰寒 冬は陰なればいふ。

宿を點して 宿をさし。

○淨名居士 竺天

清少納言が詞 枕草紙に、「牛の歩むまゝに水ちりたるこそをかしけれ」とあるをいへり。

御相傳うける事云々 うけるは浮きたるなり。乃ち、先祖より申し傳へざり。あれどうそではあるまいがなり。

得失なく此の一矢に云々 この後の矢で、必ず中てやう、この矢ははつしてもなと思ふことなく、いつでも、一本より無きものと思ひ、必ず一矢であてやう

○窓の雪 古、支那の孫康といふ人、雪を集めて燈に代へ、以て勉學したる故事。

○頃 田百畝をいふ。

○嘯時 日暮をいふ。

野花啼鳥一般春 野花も開き、鳥もうたひ、なれり。

○陰寒 冬は陰なればいふ。

の維摩詰のこゝに於て、すぐれて道を行ひし聖なり。常に、方丈の室にありて說法したりきとぞ。

國に必しもいであつかふものにあらず この人は、よしある人にて、國の守など、出で来て、仕はるゝものにあらずなり。

國の人の心の常として云々 土佐の人の

情の常として、在任中には、親しかりしも、任みちてかへる時には、今は、かまふことかばさて、尋ね來らで見えざる事なるをさなり。然るに、心ある人は、薄情なる國風に興るをも意せず、長年お世話になりたれて、離ながら、別を、來れりとの言なり。

屠蘇白散に酒加へて云々 年元且

の用に於て、屠蘇白散に、酒を加へて持ち來るなり。延喜式に「白散一劑（白散錢且以温酒一吸五分一）家酒活一氣温疫一辟邪毒氣」ありて、必ず元且に用ふべきものせり。

眼もこそ二つあれ云々 人體中にて、最も大切なり。

いふ、眼は二つあれど、唯一つしか無い、眼よりも大切の鏡をたてまつるゝの意なり。

望月の駒 「駒ひきわたる望月の頭」を参照せよ。

清華の門 三公に任ぜらるべき家柄をいふ。乃ち大炊御門、今出川、廣幡、醍醐の九家なり。

陳平張良が肺肝云々 陳平は前漢の人に於て、黄、老の術を修め、氣概を持たれども、家甚だ貧しかりき。曾て料理番となりて肉を切りしに、幾百千切の肉、悉く同

量なりしかば、不思議の才もあるものかなと之を褒めしものありしかば、陳平は、天下の切り盛りをなすも尚ほ、この肉の如くせざるべからずといひしが、後漢に張良、何等と共に、漢の高祖を補け、文帝の時、大將を以て死せり。「張良」は全所を見よ。

十二畫の部

傍若無人 傍に、人なきが如く、傲慢に振舞ふをいふ。世説に「王猛隱居華山、猛在、世之念、恒温入關、猛被三編冠、而詣之、面談當世之事、門

之、猛而言、傍若無人、温察而異之」とあるより來れる語なり。

會稽の耻 「勾踐の耻を忘る」の所を見よ。

奥義 すべて、諸藝の、一等奥深。○**莊園** 古、原野を、諸王、佛寺等に賜ひ、開墾せしめて、別業、又は、寺領せしめしもの、賜田、功田の私有となり

て、朝廷に、返納せざるもの、私に、社寺、權門に寄附、贈進したるものなどより、租税の納らざる私田となり。國司の支配を受けざる地をいふ。後には、私に開墾し、或は他を強奪して、兼併せるものも多し。而して、其の地主を、領主、○**素人** すべて、其の道領家、本所などいふ。

孫子 孫子武、又、孫武といひ、楚の人のいふ。○**孫子** 孫子武、又、孫武といひ、楚の人のいふ。有名の兵法家なり。吳王

闔廬に仕へて、將となり、四は、楚を破りて、郢に入

り、北は、秦と、晋とを威して、名を諸侯に知られた

り。兵法十三篇を著して、軍事の蘊奥を論じぬ。

素讀 書物の、文字の、みを読むをいふ。○**純美** 最も美なり。

華美 はなやかに、きれいなをいふ。○**紡績所** 糸をつむぐ所なり。

粟散 元亨釋書、日羅の語に、日本を、東方粟散國と

いふ。佛説に、百國に足らざる國をいふとあり。

貫 一貫の地は、十石に當るを以て、十貫は百石、百貫は千石なり。或は、一貫は、千坪の地なり

と。○**閑雅** 靜にして、且つ、風雅なるをいふ。

紛糾たり 糸の亂れたるが如く、入りくみたるをいふ。

純素樸率 最も、すなほなることなり。

越王會稽に降る 「勾踐の耻を忘る」の所を見よ。

限 「くまの」○將軍塚 坂上田村麿の武装したる土偶を埋めたる所を見よ。

登庸 役人に、さりあふ。○朝勤行幸 古、天子の正月二日に、上皇、皇太后の宮に、行幸せらるゝことな

○登極 み位につ。○朝がれひ 天子に奉る、朝の御飯をいふ。○評定衆 鎌倉時代、執權と共に、御飯をいふ。

○莊子 支那、戦國時代の人にして、名執り行ふ。○評定衆 鎌倉時代、執權と共に、御飯をいふ。

○朝がれひ 天子に奉る、朝の御飯をいふ。○評定衆 鎌倉時代、執權と共に、御飯をいふ。

○朝がれひ 天子に奉る、朝の御飯をいふ。○評定衆 鎌倉時代、執權と共に、御飯をいふ。

蛙鳴蟬噪に均し 蛙や、蟬の鳴くことく、只、ぐに、同くこと。○斑 種々の色の、入り交りたるだといふ意なり。○塚 土を高く積上げた。○塚 土を高く積上げた。

訴をことわる 訴へることの善悪を、取りさむるをいふ。

訴のなる 裁判のきまをいふ。○訴の庭 裁判所をいふ。

描出す 再び、心にうか。○廊 ちうかの。こころなり。

勝境 すぐれたる場所。○敵邑 片田舎の。村をいふ。

渡合 戦争を始む。○提糸 提棒にかけて、かぜることなり。○楮幣 紙幣をいふ。

焙爐 火の上にかけて、物を乾かす道具なり。○楮幣 紙幣をいふ。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。○補助貨幣 本位貨幣を、補助する貨幣なり。

測量 器械を用ひ、數學の力にて、物の深さ、廣さ、高さ、遠さ等をかり知る事なり。

堤防 池川などの。○犄角の勢 牛の角をつき合して、

競ふさま。○朝儀 朝廷の儀。○道 人の行ふをいふ。○集はせ 集らせ。○童蒙 蒙は、

倫の道。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。○遊冶 だうらく遊び。

流の聖人なり。故に、其 ○黄瓦毛 黄色の勝ちの徳を慕ふ者甚多し。

をいふ。瓦毛とは、白に棒を帯びたる色にて、土器の色に似たるを以ていふ。○狴 俗に

りさいふ。○剩 「あまつさへ」の所を見よ。○斑白 しまの毛髪をいふ。乃 ○猩々絨 極めて、あざやち、白髪交りなり。○普天の下率土の濱 小雅

どをいふ。○普天の下率土の濱 詩經北山篇の語にして、普天の下は、天の蔽ふ下にして、乃ち、全天下さいふに同く、率土の濱は、大地のつ

いかん限りにして、乃ち、○堡壘、堡塞 地理全地球さいふに同く。○散策 散歩さいふに同く。

間道 わきみち、かくれみち。○散策 散歩さいふに同く。

程朱の學 程朱の學は、宋の世に當りて起る。其道も、學も、皆一の、性に基くものせり。程は、程明道と程伊川とにして、朱は朱熹なり。

○寓言 かりに、事實を設けて、ことなり。○散策 散歩さいふに同く。

○堅實 堅く、

温養 古をたづねて、業を修むるをいふ。○景仰 あふきあがむるをいふ。

遐齡 高年さいふに同く。○無疆 ことなり。

提起 ひつぎげ起すさいふに同く。○堅實 堅く、

遠山の眉 遠山のけしきを、眉に見立て、いひたるなり。

等持院殿 足利尊氏をいふ。

嵐のこととふも、月のやどかるも云々 「卒都婆も昔むし木の葉もふり埋みて云々」の所を見よ。

腋上嗽間丘 大和國、葛上郡にあり。

循良の吏 おさなしき、よき役人をいふ。○短冊 和哥を書き厚紙にして、一尺一寸五分、横一寸八分、

表には、金銀の箔をおき、彩色を施す。

等輩 朋友に同く。○厨子 棚と、月とありて、手置する戸棚をもいふ。○温和淳朴 おさな

はなる。○崎嶇 山のけはしき。○疎放 物事をいふ。○景情 有様なり。

○翔躍 おどり上るに、石のあらはれ、或は、あらはれんさしなるをいふ。○翔躍 おどり上る

なるをいふ。○間者 の、などいふに同く。

無碍、無下 「むげに」の、所を見よ。○須らく 「すべ」の

所をいふ。○敢爲進取 如何なる難事にも、勇み

道すがら 「すがら」の、所を見よ。○會釋 あいさつをす

番上せしむ 當番を定めて、上らむるをいふ。

普廣院殿 足利義教の、所をいふ。○閑院左府 左大臣

棟は八つ門は九つ戸はひとつ云々 この歌、「何者のし出しけむ中より出されたりとて、其の意義も、亦知るに由なし。かゝる時には、つ

堯舜の道 聖人の道と。いふに同く。

禍福は糾へる纏の如し 文選に、「夫禍之與福兮何異之

糾纏に。○黄耆 葉莖共に、くらくに似たる、薬草にして、夏に、あづきに似たる、卵色の花を開き、其の柔き根を、薬用とす。○隋侯の珠 「明月の珠」の所

○遁辭 こぼれ口上のことなり。 ○祿秩 同。

堅魚脯 魚脯をいふ。 ○道心者 佛道に心を傾けたるものないふ。

○象をなす 形をなすなり。 ○須つ所 要必

○惻憶 傷はしく思ふことなり。 ○殘虐 手ひ

○紙子 紙にて製したる、衣服をいひなす。

○黃蜂 山蜂の一種にして、形、最も太く、腰の色、黃赤なり。

湮滅 きへてなく。 ○偉人傑士 常人にすぐれたる人。

○殘編 きればし。 ○腑分 漢方醫の

○棋子 玩具の將棋のことなり。 ○無機體 活生

○無機體 活生

詞章記誦の末に趨り 字句のせんぎだてのみして、書物を讀むさいふのみにて、

○黃金の術 丹砂を煉

○黃金の術 丹砂を煉

○黃金の術 丹砂を煉

○黃金の術 丹砂を煉

○黃金の術 丹砂を煉

○黃金の術 丹砂を煉

○黃金の術 丹砂を煉

○黃金の術 丹砂を煉

○黃金の術 丹砂を煉

婉曲に諷す かどだのめやう、おだやかのほのめやすことなり。

遠島の汰沙なし 島流の命令なきをいふ。

○陽神陰神 陽神は、素戔の神にひきて、陰神は、伊弉諾尊、陰神は、伊弉册尊をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○集 詩、歌、文などを、集めて記したる書物をいふ。

○堅睡 心をこめて、ひかぶさるさいふ意なり。

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

○猗歎 あいに

陽炎 カゲツラ 遊絲も書き、春の、のどかなる日、ちらく
と空中に立ち上りて、見ゆる氣をいふ。

無頼の少年 イリどころのな い、少年をいふ。

超涯の皇恩 天に越えたる 天恩の思なり。

傍正の疑 傍正は、正不正といはんが如し。乃ち、
正系と、傍系との疑なり。正系とは、
祖父母、父母、子、孫の如き、續きがらにして、傍系
とは、伯叔父母、兄弟、姉妹、甥姪の如き、續きがら
ない。 ○程子 宋の人にして、名は頤、字は正叔、
伊川と號す。天性豪邁にして、器
なり。壯にして、大學に遊び、胡瑗に對して、造次頤
沛、聖人の道を、身に實行すれば、遂に、聖人の域に
達し得る事を論じ、大に、世人を驚したり。後、四
京國子教授となり、兄頤に次ぎての哲學者なり。

道心 佛道に傾く。心ないふ。 ○菩提に赴く 佛道に入
るないふ。

普賢 佛の名にして、徳利普く、慈悲、賢明の菩薩
にして、圖に畫くには、常に、白象を伴ふ。

雲客 雲の上人、殿上人などいふに。○登遐 かお

琵琶法師 琵琶をひく、目 ○報謝宿 施した
め、無縁にて、旅人を ○遠つあふみ 遠江
やどらしむるないふ。

閑谷の學校 岡山藩主、池田光政の創立せし、
學校にして、熊澤了介、この校に
功績あり。○揖讓 辭退して、ゆづるないふ。説文に、
「手の胸につくを揖といふ」とあり。

雲林院 淳和帝の離宮にして、
山城國紫野にあり。

遁甲方術 遁甲は、陰陽の術を以て、鬼神の奧を、
究むる事にして、方術とは、占ひ、ま
たなひ等の ○雲客 四位、五位の
殿上人をいふ。

莊公 莊園と、國司の支配 ○無二無二 一心
する土地をいふ。

有 三乗法「無二亦無三」とあり。○紐説く の心

くれないなる ○雲のあし 雨を含める雲の、
こさなり。

又、單に、垂れさがり。○報本反始 禮記、郊
て見ゆる、雲をもいふ。

奥院 すべて、寺にて、本尊を奥 ○奥區 内部
にこ
もれる、肝要 ○費府 合衆國の大
都會なり。

極印を押しぬ 證據の符を、つ
くることなり。

遠淺 海濱の底淺くして、海上、
遠くまで連るをいふ。

備武兼文絶代名士 文學と、武術とを、兼
れ備へ持ちて、前代
らない所の、譽れあり。○雄麗 雄大にして、華
麗なるをいふ。

奠都 都を定め給 ○復古 古通りに、復
ふないふ。

媛踏踏五十鈴媛 事代主神
の女なり。

うらくつろぎ ○猥 ニツカラワラフ
たるをいふ。

強弩の末勢は魯縞を穿つ能はず 強弩は、強き石弓をいひ、魯縞とは、支那の魯の國の、
曲阜といふ所に出来る、うす絹なり。乃ち、強弩の如
き、大勢力あるものにて、既に、遠くに達する時は、
魯縞の如き、薄絹でさへ、破る事が出来ぬことなり。

短兵格闘 刀劍を以て、一人々々の、
勝負を決するをいふ。

雄略 すぐれたる、は ○雄視 他に向つて、威
張りことなり。

悲歌慷慨 かなしき歌をうたひて、國の事
を、なげかはしく思ふをいふ。

間然 ひなんなす ○陽々 氣色の盛な
るをいふ。

朝中よだき 「あさまだき」
の所を見よ。

遠き御守り 魂は、何時までも、長く、御
身の守りとなることいふ意なり。

雄文宏詞

文章を作ること、巧にして、詩を賦すること、すぐれたるをいふ。

詞人

唯、詩文のみを、作る人をいふ。

遊麗殆ど遍かりき

麗は、下駄のことにして、全國中、殆ど、到り遊ばぬ所は、なし。

○筆墨を鼓舞す

はづみしさいふ意なり。

○淳膏碧を凝らす

水のおするをいふ。

○道祖神

さへの神のことにして、伊弉諾尊の、

投げ給ひし杖より、なりませる神なり。俗に、猿田彦神さしいひ、道路を守るの神さ、いひなせり。よりて、

世俗、往々鞋を献下、以て、旅程の災の、なからんことを祈るさいふ。

階庭

庭の飛び石の、ことなり。○欽定、天子の御思召を以て定め給ふことをいふ。

○階砌

石段さ、敷石さ、をいふ。

雲樹森々碧殿寒

雲樹さば、雲つくばかりの大樹をいひ、森々さば、こ

んもりさ、樹木の茂りたる、状をいひ、碧殿さば、彩色を施したる、美廉の御殿をいふ。乃ち、樹木の茂りあひたる中に、碧殿など、物すこく立ちて、人も通はぬ、さびしき有様をいひしなり。崖登華清宮の詩に、

「草連三回磴一絶三鳴壁、雲樹森々碧殿寒云々」とあり。

○崎嶇

高低のあるをいふ。

筑海颶氣連天黒、筑海さば筑前の海にして、颶さば海上に吹く暴風をいふ。乃ち、筑海に颶風の吹き起らんとするやうすが見えて、天の一面が眞黒に見ゆるさなり、

悲風黯澹

あはれなる風が吹きて、ものさびしき状なり。

無人艶説歴山王

「歴山王」は、歴山王の所を見よ。大意は、今では最早歴山王をほめそやすものはなくなりて、なほれおんをのみほやしたつるさなり。

黄金の花云々

前の世界の大都市の香風に對面より黄金と變化すきべ物。

○普請

僧家にて、を産出せしめんとするなり。

○普請

僧家にて、普く人に請ひて、建築するより轉して、すべての建築、土木、作事などをいふに至れり。

惠の露に生ひ出づる

天子の御恩をうけて生活するをいふ。

雁股

獸の一種にして、獸形の如く其の先き二つに分れたり。

評定所

徳川幕府の時の裁判所にして、龍の口に在りたり。若中、若年寄、及び三奉行、毎月式日三度、立會日三度を定めて相集會して訴なき、大目付、目付も之を聴監したり。

欽羨

慕ひ敬ふ。○棲遑、寂感して、進退をいふ。

猶子

禮記に「兄弟之子猶子」とあるより出で、實は甥をいひしものなれども、後には、親族、其の他、他人の子をも養子としたるものをいふ。

○無用の用

ちよつと見たるもの。

堀河の左府

左大臣藤原顯光をいふ。

無用のもの、如くなれども、其の實際に至りては、大に功用あるものをいふ。

掌を指すよりも云々

巳の手のひらをさすよりも判然とわ

○葉樹

四時共に葉のある樹、乃ち常盤樹のこをいふ。

富貴は浮べる雲の如し

論語に「不義而富且貴、於我

○無量壽院

阿彌陀堂をいふ。

渡りさふらふといふ時

番人が、れり物などの、今来る

さ知らする時になり。

無常の歎きはひ來たらざらむや

戰爭にて敵軍の襲ひ來るが如くに、無常の敵が

云々、勝ひ來りて、出家の身をも、避世の上をも攻めぬことはなし。故に、其の死に臨めることを覺悟すること、兵卒の戰爭に出で、家をも身をも忘れて、い

さぎよく死を決するが如くすべし。徒に、月花に吟、水石を弄びて、生を貪るべからずといふ意なり。

裕々緩々

ゆつたりとして、おだやかなるをいふ。

紙燭さして

紙燭をさもしてなり。「紙燭」さば、今の蠟燭の代用として用ひたるも

のにて、紙に油をつけて作れり。

遠き御守りこそ云々 遠き所、乃ち黄泉から、貴所の御守

りさなら。○惣門 「惣門」に同じ。全所を見よ。

發心、發起 さんげして入。道するをいふ。 ○無下 見苦なし

り。○富貴之家祿位重疊云々 富貴の家

にして、藤と位と共高き時は、恰も、二度實を結ぶ木は、必ず、其の根を傷くる如くに、福を免るゝことば出来ぬ。○程子の四箴 乃ち、左の如し。

心分本慮、物無迹、操之有要、視爲之則、蔽交於前。其中則選、制之於外、以安。其内、克己復禮、久而誠矣。

人有乘、弊本乎天性、知誘物化、遂亡其正。卓彼先覺、知レ止有レ定、閑レ邪存レ誠、非レ禮勿レ聽。

人心之動、因言以宣、發禁、誨妄、內新、靜專、剛是、權機、與

我出好、吉凶榮辱性其所、召傷、易則、傷、煩則支、已肆物件、出悖來違、非レ法不レ道、飲、我、訓、辭。

勳 箴

哲人知レ機、誠之於思、志士勵レ行、守之於爲、從レ理則裕、從レ欲性危、造、克念、戰兢、自持、習與レ性成、聖賢同レ歸。

須達長者 天竺の富人にして、佛を甚だ信仰し、邪惡の風盛なるをうれひ釋迦の爲に、説法場を寄附せんとして、祇陀太子の園をかりて、精舎を建立したり。之を祇園精舎といふなり。

須彌八萬由旬 「めいろ」の所を見よ。

越王會稽に降せし云々 「句踐の耻を忘る」の所を見よ。

索餅 さうめん。御酒を賜る式をいふ。

尊者 大要の時の正客をいふ。

道の者にもやうたちまざる 刀劍を鑿定して生活するものより、やゝ勝れて居るなり。

雲霞のつはものをたなびかせて

雲霞の如き澤山の兵士を引きつれてなり。雲霞にちなみて、たなびくといふ語を用ひたり。

蛭卷 昆刀の柄の所々を、銀の輪にて巻きたるをいふ。 ○崎陽 長崎のこ

雁がねにわが身をなさばみよし

野の云々 もしも吾が身を雁になしたらば、私は、この吉野の花を見捨て、故郷にかへ

るやうの事はしま ひものをさなり。 ○爲體 すがた、なりゆき、體裁などいふに同じ。

窈窕 まつくら。足袋のこ ○單皮 さなり。

閑々と打つてかゝる 閑々は、盛におこり立つ形容をいふ。

犇犇と さんく。 ○博勞馬 馬賣りのうる馬からぬ馬を

さしていふ。博勞は、昔、馬を賣る人をいひたるに、支那の古代に、馬のよしあしを見わくる、博勞といへる人ありし。○無革命時 二君に事ふるより出でたり。

○傳子の箭前拂の云々 傳子は我が乳母の子をいふ。箭前拂、障面敷など。姓なり。古は、氏

は、皆、この人々のあだ名なり。○朝臣 なによりては異り源平などは朝臣、清原、當麻などは真人、物部、長谷部などは宿禰等なり。

黄桃花毛 全身白きに、黄色を帯びたる毛なり。

湯ぶね 湯だらひのこさなり。

遂にかく沈みはつべきむくしあ

らば云々 かやうに、思ひわづらふべき境遇さなるべき、前世のむくいのある程ならば、何さて、天皇に生れ来たであらう、普通の人と生れなば、かやうの憂き目に逢ふこともあるまいにの意なり。

壺装束 衣をつぼれ折るといふ義にして、あまり、自分の貴からぬ女の、外出する時の襟にし

て、市女笠といふをかぶり、薄絹きたる装束なりといふ。

紐おしやりて 靴の入紐をはづし、互に、うちさけて遊ぶをいふ。

道をかへりみるうらみは云々 道歌

の盛衰如何を顧みれば、甚だ遺憾多くして、其の慨嘆の念は、之を晴し慰むる事能はざれども、子の爲と、我が身をも捨つること能はずなり。

尋ね来てわがこはかゝる箱根ぢを云々 はるく尋ね来て、今日只今、箱根山をこえかゝれば、山の峽があるが、これは、わが心願の届きて、今度の争ひに勝ちて、来たかひのある道しるべならんとの意なり。「かひ」に、峽さ、功をなす。

道の程もかたしけなかるべし 太島

子の資格にては、途中など、却りて、煩しがるべければ、着任の上にて發表すべしとの意なり。

素意の末をも 本意の片はしだ、けにてもなり。

御室 仁和寺のことなり。宇多天皇御落髪の後、此處に御室殿を作り玉ひしによりて御室といふ

黄覆輪 「金覆輪」といふに同じ。黄覆輪山 治宇

雲なかくしそといさめけむ 新古今

「君があたり見つゝを居らむ伊駒山雲なかくしそ、はふるとも」隠人不知さありの伊勢物語に、「かの女、大和の方を見やりて、君があたり見つゝを云々」とあり。されば、業平の歌にあらずして、女の歌なり。

割籠 重箱の如きものに、辨當をいふ。

散るはなにうづみしふちも山吹の云々 落る花に埋まりし山吹の淵も、川波に洗はれて、瀬にかり行くが面白しとの意

須彌壇 佛像をおける壇をいふ。

華族もえいゆうも 華族は、清華といふに同じく、三公となるべ

富有天下 中唐に、子

き家柄をいふ。えいゆうは英雄なり。也、典義爲二聖人二尊爲二天子二富有四海之内二子孫保之」之あり。乃ち、富貴なる事、四海を保てりとの意。

雲泥水火 雲は天にありて、泥は地にあり、又「水火」は相

象牙の箸 象牙の箸、股の肘王、容れざるものなり。

葉わけ 葉の間にわけるを、箕子、大に嘆下。十八史略に見ゆ。

黄金の馬 黄金の法馬なり。法馬とはふんごうのことなり。

朝賀 朝拜の事なり。元日、大極殿に出御ありて、群臣の拜賀をうけ給ふ儀式にして、群臣の舞踏して武官萬歳の旗を揮る。

牽強 強てひきつ、くるをいふ。

菅の根の春の日に 菅の根の如く長き春の日に

雄島の笠屋もかたぶきて 新古今集に「立ちかへりまたも来て見ん松島や雄島のさまや波にあらずな」とあるによれり。

猫また 猫の年老いて、妖怪をなすものをいふ。

堅固かたはなるより その技に、なれず、自在ならぬをいふ。

紐とけがたき むすばれたる糸のさけ難き意にて、轉下

堯の子の堯ならむ 堯の子が、また堯の如くに、聖天子であるやうに、醍醐帝の聖天子にましますといふ意なり。

黄河水 黄河は常に濁れるが、瑞祥あれば、清むといひならはしたり。

滑綱橋 綱を兩岸にわたして、籠に入れ、其の綱を傳はせて、向に渡すやうにしたるものなり。

復號の事 慶長十二年朝鮮より例によりて、日本國王殿下として、來書ありしに、返書には、日本國源秀忠のみありて、王の字なし、故に、使節は歸國の上、正當の返書を得ざりし隙を以て附せらる。されば、元和三年の使節は對馬の宗氏の家人と謀り、王の字を加へ、三代將軍の

時も、亦斯く王の字を加へたり。これは幕府にては、聊知らぬ所なり。後、現はれしかば、關係のものば、皆刑に處し、又、事情を朝鮮に通じ、先方より、日本國君と書し、返書には、日本國源某とある事に定めたり。然るに、白石は建論して、日本國王源家宣としたり。白石は、天皇と國王とは、自ら違へりといふにあり。白石ほどの學者にして、何たる謬見ぞや。

無名異を外誘す 無名異は、過酷化滿庵、又、る。下に出来る黒色の塊なり。この無名異の、陶器の質内にこもれるものを、外に追出すといふ。

第十三畫の部

幽 明ならず。○**糗秣** 兵糧米や、馬の糧なり。○**稜枝** 若き枝をいふ。○**勝妾** 「官官云々」の所を見し。○**意執我執** 執は、執行ひをいふ。○**意執我執** 執は、執行ひをいふ。

詠みたび ひみ給なり。
飯ぼしてつるとや 魚の代りに、米をさらせし故、男共が口にし、飯粒にて魚をつりたりといひしなり。「飯ぼ」は飯粒なり。
遊子なほ残月に行きけむ云々 和歌
 月詠集に、「佳人塵三節於長粧、魂宮鐘動、遊子猶行、於殘月、函谷難鳴」とあるによりて記せるなり。「木綿付鳥かすか」にむとづれて云々」の所を参照せよ。

我が意志を、強ひて。○**累々** 重りあひたる。○**率** ひなり。○**鼎鎗** 足のなき鼎。○**殖産** 物をふやす。○**終に近く参らぬ男** 嘗て、御側近

くに、参りし。○**察當** 察度の轉かといふ。法にさなき男なり。○**稚松** 若松に。○**電線** 電信用と、電話用との。○**鉄管** 瓦所用と、水三種あり。○**鉄路の輪聲** 汽車の音。○**稜威** 鋭利なる威なり。○**鼓樓** 大鼓やぐら。○**解船** 傳馬船。○**礎** 礎に。○**愛しき萌芽** 萌はゆらしき、めだちなり。

塙檢校 塙は姓にして、檢校は、官への最上官をいふ。次は勾當、次は在名、次は衆分、次は打掛。○**對策** 朝廷にて、人物を採用する時、其の學問を試みるため、之に問題を與へ、其の答案を求むるをいふ。○**博士** 古の官名にして、専門つものをいふ。乃ち、「紀傳博士」「天文博士」などの如し。今のは學位にして、學術の深き人に、文部省より賜はる。又ものしり、學。○**零落** おちぶる、者などの意にも用ふ。

郷黨隣里 郷黨は、むらのなかまにし。て、鄰里は、さなり村なり。
經世 世を治む。○**痴鈍** 氣のきかぬをいふ。○**愛宕神** ちの神。○**資料** 材料といふに同く、たれのこさなり。○**愛宕神** ちの神。○**慄き恐る** ふるひおそ。○**溝壑** たにやみ。○**殿堂** 御堂のこさなり。殿は、立派なる建物をいふ。○**殿宇** 佛堂の家に限りて、宇といふ。
蜉蝣の身何ぞそれ營々たる 蜉蝣の如き。組命の身を以て、ごうして、かやうに、朝から晩まで、せつせつと名利に、取り急ぐであらうさなり。蜉蝣は、朝に生れて、夕に死する、命の短き小虫なり。故に、人生のはかなきにたさふ。
萬代不易 千万年の、後の世までかはらぬをいふ。
對峙 陣を、向ひ合せ。○**鉦鼓** 鉦は銅鑼にして、銅鼓の如きもの。

なり。乃ち、ごらや ○義俠 ぎりだです
大鼓といふ意なり。 ることなり。

蜥蜴 蛇に似て小さく、足四本あり。 ○椰樹 樹
て、尾長く、切れ易き出なり。 けし

群鳥驚起の昔 源頼朝の、兵を擧ぐるや、平
清盛、孫維盛を遣はして、之
を討たしむ。源平の兩軍、富士川を挟みて陣す。夜、
水禽群り起つ、平軍之に驚き一戦もせずして、四蹄せ
り。之を思ひ。 ○詩經 五經の中の
起したるなり。

感觸 身にうくる。 ○資人 古、五位以上の諸
臣に賜ひし、護衛
をいふ。乃ち、 ○聖人 智徳、共に、衆人に勝れ、
舍人なり。 萬事に、すぐれたる人を
いふ。 ○福祉 さいはひ

資養の精力を補益す 土地の種物を養ふ
べき、精力の少く
なりしを、お
ぎなふをいふ。 ○蜀の棧 支那、蜀の國に、蜀
道とて、險阻の道あ

りて、棧を設けたり、 ○晴の色 眼中の、ひと
之を蜀の棧といふ。 みの色なり。

違例 病にかかりし時、 ○頑なる 「かたくな
の心地をいふ。 〇頑なる の所を見よ。

農男 瀧澤馬守の編纂漫録に、「享和壬戌夏五月、蓋
を荷なひ行きて駿河の府中に遊ぶ。彼の地の
人の説に、四五月の頃、富士の雪の、消残りたるが、
寶永山のほごり、凹みたる處に、人の形如く、雪の
殘ることあり。之を農男と名づく。この殘雪見ゆる年
あり、又見ゆる年あり。田子の土人曰はく、農男の見
ゆる年は、必ず五。 ○嵯峨 岩のそばだて
穀豊熟す」とあり。 〇嵯峨 岩のそばだて
る状をいふ。

義烈 最も義理がた。 ○飲廟の時 徳川三代
光公の。 〇詮なき口論 わげもない、
時なり。 〇詮なき口論 口論なり。

塗炭におつ 甚しく、なんぎくるしむをいふ。
塗は、泥をぬられ、炭は、火にや
かるゝにて、水火のく。 ○塞外 せりでの外にし
るしみさいふに同。 ○塞外 て、乃ち、萬里長
城外を。 ○畫工犬馬難鬼魅易 畫かきの
犬馬をか

り、瑞穂の盛に、みのるを以、
て國の名をなしたるなり。

瑞穂國 我が、日本帝國をいふ。瑞穂は、ケツノ、
しき、稲穂のことにて、我が國には、古よ

細戈千足國 細戈は、すぐれたる、戈の義にし
て、枕詞なるべし。千足は、何事
も、足りざるのへる、國といふ事なり。千は、物の數
の多きをいひ、これに、戈のちさいふ所の名をわれた
り。我が國は、古より萬事、足りざる。 ○登然 足
のひしを以て取りて、國の名とせり。 ○登然 音

の高き様。 ○博雅三位 宇多天皇の皇孫、源博
雅の事にして、音楽を
以て名あり。三年の間、彈丸の度邊を併
相し、遂に、琵琶の秘曲を得たりといふ。

細川二位法印 細川藤孝の事にして、髪を削
りて、幽齋と號す。法印は、
僧正に相當し、大。 ○詮議 評議さいふに同。○
和尙さいふに同。 ○詮議 又、罪人の吟味をも
いふ。 ○義公 黃門光國 公をいふ。 ○禁漁 魚を捕るこ
とをいふ。 ○禁漁 魚を捕るこ
とをいふ。 ○蝮 蝮の中にて、蠶より化した
ある城の、めぐ。 ○蝮 蝮の中にて、蠶より化した
ある城の、めぐ。 ○蝮 蝮の中にて、蠶より化した

くは、甚た六ヶ敷事である、如何さなれば、犬馬は、
常に、賤人の眼目にふるものなるを以て、人の批難
を、うけ易く、其れ故、難けれども、鬼などの如き、
ばげものは、嘗て之を見しものなきを以て、如何なる
標に、之を畜くも、敢へて、批難するもの
なきを以て却りてこの方が書き易しことなり。

蜀黍毛 もろこしきびに、生えたる毛をいふ。
ふ。蜀黍は、玉蜀黍のことなる。

電奔風馳 電や、風の如くに、早。 ○斟酌 事物
に應じ、よき程になすをいふ。 ○斟酌 事物
に應じ、よき程になすをいふ。 ○斟酌 事物

に應じ、よき程になすをいふ。 ○傳奏 古、禁裡に
ふ。又、推しはかるをもいふ。 ○傳奏 古、禁裡に
ふ。又、推しはかるをもいふ。 ○傳奏 古、禁裡に

より、奏聞することある。 ○瑞垣 神垣といふに
を、傳へ奏するをいふ。 ○瑞垣 神垣といふに
を、傳へ奏するをいふ。 ○瑞垣 神垣といふに

の、周圍の。 ○誠をさへ荷へるよ 心眞
きれをいふ。 ○誠をさへ荷へるよ 心眞
きれをいふ。 ○誠をさへ荷へるよ 心眞

をこめられて、かくも、結構の、大
日本史を贈られたることなり。

楯なめて 楯をふらべてなり。楯さば、厚板にて
作り、身を蔽ひて、敵の矢丸をふせぐ、
戦争の道具なり。射さいふ詞の、枕詞にも用ふ。
「楯なめていなさの山の木の間ゆも」の如し。

傳令使

戦争の時、本陣の命令を、全軍中に傳ふる職の武官なり。

博陸

關白の異名なり。前漢の霍光、博陸侯に封ぜられしより、故事なれり。

紺かさ

紺屋のいふ。前日、神供の稻を、豊徳院にて、主上も、きこしめし、群臣にも、賜りたり。豊徳院にて、義稱にして、明は、酒をのみて、顔の照り赤らむ義なり。

豊さかのぼる

豊に、榮え。○箴著 易者のいふ。○葎屋 賤の家をいふ。○福田 佛敎の語にして、佛を修むるには、沃饒の田に、嘉苗を生ずるが如しといふ意なり。而してこれに、三種あり乃ち、三寶の種を散ふを、敬田といひ、君父の恩に報ゆるを、恩田といひ、貧者をあはれむを、悲田といふ。

當途の時

役目につきて、居る時なり。○煩惱忘念 煩惱は、佛經の語にして、人世の慾情、願望などの、煩はしく、惱ましきないふ。忘念も、佛經の語にして、忘るものを誤ぶより、其の大意をさることを誤ぶがよいとなり。左するときは、何れのものより副屬せしかば、其の痕跡が知れなくて、よゝ萬夫不當 万人をいふ。○落合ふ 行き合ふ。○萬年青 盆裁として、實美せらるる草にして、四時青く、夏の末に、淡白色の花を付け、後、ほゞづきに似たる、實を結ぶ。

獻芹の誠

區々たる忠義の心をいふ。列子に「野人背をさらすを快とし芹を食ふを美なり」とあるより出でたり。

勢子

狩りをする時、鳥獸を驅り出す、人足ないふ。

殿中の一種物

古、一種づきの品物を、持ち寄り遊び事。○鄒魯の風 鄒は、孟子の住居せし所なり。孔子の生れし地なり。されば、傳へては、孔孟の學風ないふ。○聖學の筋 聖人の學ぶ順序なり。○聖人 聖人、天子、などの「道」の所を參照せよ。○聖 聖人、天子、などいすぐれたる人をもいひ、徳の高き僧をもいふ。

郷貫

族籍のこ。

感狀

勳状ともいひ、軍功を感す思はれて、大將より其の部下に、賜はる文書なり。

新待賢門院

古の、待賢門院に對し。○義 那支にて、倫々五常の一にして、善、又は美、又は正と、承認せらるる道に、身の行ひなどのよく合ふないふ。

對悍

對捍の方よろし。○傾覆 家などの、つかないふ。○僉義 衆人の評議のこをいひ、又、研究することをもいふ。

跡の白波に身をよする朝には

身の、はかなきことを、思ひ知りたる、朝にはいふことなり。滿智沙彌の歌に「世の中を何にたごへむ朝はらげこぎゆく身の跡の白波」。○照臨 みたすことなり。○萬年青 盆裁として、實美せらるる草にして、四時青く、夏の末に、淡白色の花を付け、後、ほゞづきに似たる、實を結ぶ。

解由

古、國司などの任はてたるに、官の事務、租税などのこと滞りなく済みたりとの趣きを書き物にして後任の人より受け取れる事務引繼書の如きものないふ。國司ならずとも事務の引繼に波。○照影 背像といふ。○累葉 代々といふ。○煉字不若煉句、煉句不若煉意、煉意則字句皆妙、無痕跡可見 煉字とは、字を撰ぶにて、月をみるを書くべきを「見る」にせんか「觀る」にせんか、又、「愛す」にせんか、やうにするなり。乃ち、字を撰ぶよりは、一句を成したるものを撰ぶがよい、又、一句を成したるもの、想像をいふ。○新ばり 新に、開闢するをいふ。

歲月は人を待つものにあらず

公の、勳學文に、「勿謂今日不學而有明日、勿謂今年不學而有來年、日月逝矣、歲不我延、嗚呼老矣、是誰之愆」をいふ。○解由 古、國司などの任はてたるに、官の事務、租税などのこと滞りなく済みたりとの趣きを書き物にして後任の人より受け取れる事務引繼書の如きものないふ。國司ならずとも事務の引繼に波。○照影 背像といふ。○累葉 代々といふ。○煉字不若煉句、煉句不若煉意、煉意則字句皆妙、無痕跡可見 煉字とは、字を撰ぶにて、月をみるを書くべきを「見る」にせんか「觀る」にせんか、又、「愛す」にせんか、やうにするなり。乃ち、字を撰ぶよりは、一句を成したるものを撰ぶがよい、又、一句を成したるもの、想像をいふ。○新ばり 新に、開闢するをいふ。